みのりちゃんシリーズ

日曜日には宇宙人とお茶を

火浦 功



早川書房

カバー／いしかわ　じゅん

みのりちゃんシリーズ

日曜日には宇宙人とお茶を

火浦 功



日本SF

ベスト
キャラクター
フェア

■ハヤカワ文庫JA/早川書房■

ハヤカワ文庫 〈JA190〉

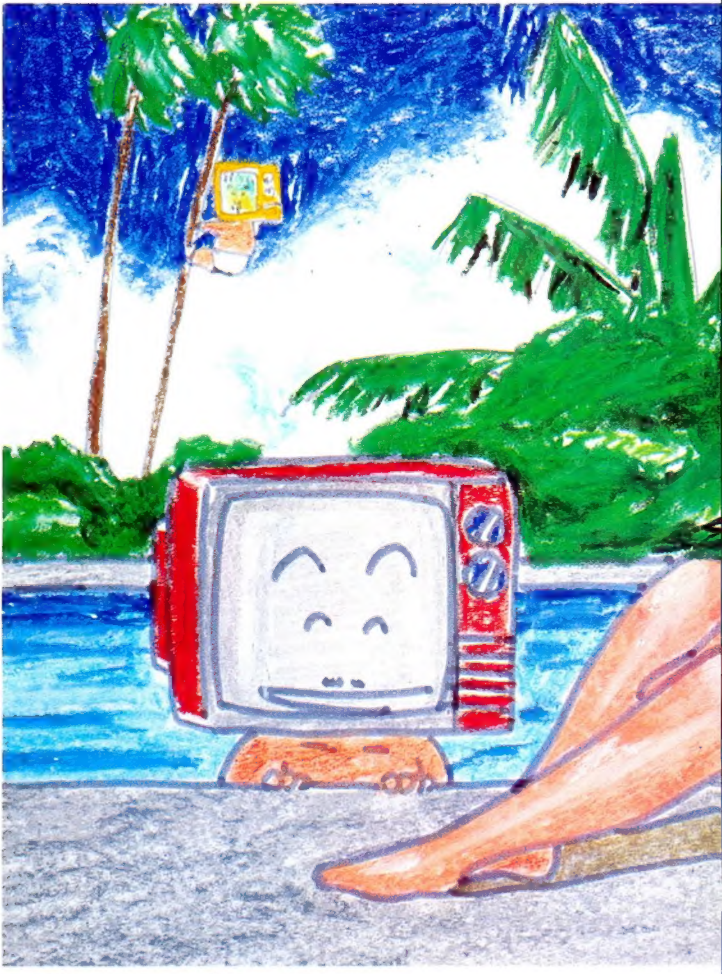
日曜日には宇宙人とお茶を

火浦　功

早川書房



『日曜日には宇宙人とお茶を』



みのりちゃんピンナップ

ハヤカワ文庫JA
〈JA190〉

日曜日には宇宙人とお茶を

火浦　功

早川書房

1755

カバー／口絵／挿絵

いしかわ じゅん

目次

日曜日には宇宙人とお茶を

第一話　マッドサイエンティストです

1

「豪田篤胤科学研究所……」
　助手兼カメラマンのサトルが、字を覚え始めたばかりの子供みたいな調子で、看板を指さして棒読みに読みあげた。
　下ぶくれの顔を、うれしそうにほころばせて山下をふり返る。
「どうやら、ここらしいですよ。先輩」
「ああ。お前の言うことだから、まちがいないだろうよ！」
　死ぬほどの皮肉をこめて、山下は答えた。このへんの地理に明るいというサトルに、朝からさんざっぱら、引きずりまわされた後だったのだ。
　今時珍しいレンガ壁を張りめぐらせた広い敷地に、貝殻を伏せたような不思議な形の建物。おまけにでかい看板まであって、どうやったら道に迷えるのだ？
　山下は苦々しい顔つきで、門柱についたドア・ベルのボタンを押した。その後ろではサトルが、

ほめてもらえるのを待っている忠犬のように、ニコニコ笑っている。

猫ヶ丘ニュータウン。

最近振興著しい、TOKIOメガロポリスの衛星都市の一つだ。

二人は、この街のタウン誌、『猫又ジャーナル』の記者なのである。

今日は、『わが町のマッドサイエンティストたち』というシリーズ・ルポのために、市のはずれまではるばるやって来たというわけだ。

「緑が多くて、なかなかいいところですねえ」

ほめてもらえないとわかったサトルが、気まずい沈黙に耐えきれずに、口を開いた。

「猫ヶ丘にも、こんなところがあったなんて、ちっとも知りませんでしたよ。あはは」

気楽そうに笑う。

――そうだろうとも！

山下は、いっそう苦々しい気持ちになって、さらに顔をしかめた。もう一度ドア・ベルのボタンを押す。

「いつも不思議に思ってるんですけど、どうして猫ヶ丘って言うんですかねえ。先輩」

山下は黙ったまま、三たびドア・ベルのボタンを押した。

だんだんイライラがつのって来ていることを、自分でもはっきり自覚していた。その背中に、サトルは脳天気な声で、言葉を続けた。

「別に、犬ヶ丘でも羊ヶ丘でも牛ヶ丘でもかまわないと、ぼくは思うんですよ。それとも、昔こ

のへんは猫の名産地だったんですかねえ」

ドア・ベルのボタンにかけた指先に、我知らず力が入る。山下の左のまぶたが、ひくひくと痙攣を始めた。

「うちでもずっと前、猫を飼ってたことがあるんですけどねえ、もう話したことがありましたっけ？　タマっていうんですが、すごく可愛い三毛だったんですよお。ところが交通事故でねえ……」

山下は、目をギラギラ光らせながら、まるで親の仇ででもあるかのように、ボタンを押し続けた。食いしばった歯の間から、今にも唸り声がとび出してきそうな形相だった。

——もう一言でも喋ってみやがれ。山下は気の狂いそうな頭で考えた。おれは誓って、この馬鹿をしめ殺してやる！　絶対だ！　絶対、絶対、絶対、絶対……！

心の中で、絶対絶対絶対とくり返しながらボタンを押す山下に、サトルがのんびりと声をかけた。

「誰も出ないようですねえ」

「言ったな〰〰」

幽鬼のような表情で、山下がふり返った。

「はい？」

人のよい笑顔を満面に浮かべて、サトルが聞き返した。

その時——

「ごめんなさぁい。そのベル、一昨年（おととし）からこわれてるの」

大きなスーパーマーケットの袋を三つもかかえた、年の頃十七、八の女の子が、二人の背後から声をかけた。走ってきたのか、肩で息をしている。愛敬のある丸ポチャ美人で、ネギと大根の間からのぞく大きな瞳が、キラキラ輝いていた。――はっきり言って、めちゃめちゃ可愛い。
「そうなんですか。こわれてるんですか」
サトルが大きくうなずいて言った。
「そうなんです。こわれてるんです」
女の子も、真剣にうなずいた。
「先輩！　大変です！　そのベルは、こわれてるんですよ！」
人類存亡にかかわる重大な秘密でも打ち明けるような調子で、サトルが報告した。
山下は、サトルを張り倒した。

2

「ほんとにすみません、お客さまに、そんなことまでしていただいて」
その娘は、台所のテーブルに山と積まれた食料品を、片っぱしから冷蔵庫に詰めこみながら、何度も山下に謝った。
脚立の上で危なっかしくバランスをとりながら、山下はドア・ベルの親機を調べていた。左目

にぬれタオルをあてたサトルが、不平たらたらって様子で、脚立を支えている。
「この乾電池、いつ取り替えたか覚えてますか？」
山下は、おそろしく変色した四つの単三を取り出しながら訊ねた。
「乾電池？」
娘の目が大きく見開かれた。
両手の小さなこぶしを口元にあて、彼女は本当にびっくりした声で言った。
「それって、乾電池を食べて生きてたんですか⁉」
今度は山下が面くらう番だった。
「食べてって……、ええ、まあ、そうですけど――。知らなかったんですか？」
「ちっとも！　いつも何て役立たずのドア・ベルだろうって思ってたけど、そうだったの。可哀そうなことしちゃったわ……、ぐすっ」
うっすらと涙ぐみ始めた娘に、山下はあわてて声をかけた。
「ちょっとお嬢さん。心配ありませんよ。ドア・ベルはまだ死んじゃいません。新しい乾電池はありませんか。ここは科学研究所でしょ」
「乾電池……」
娘はロンパリ目になって考えこんだ。
秒針が時計盤を、きっかり三回半まわった。
「あるわ！」

不意に目を輝かせて、彼女は叫んだ。
「これでドア・ベルさん助かるのね？」
「危機一髪ってとこでしたけどね」
山下が、難かしい心臓の手術に成功した名外科医みたいな顔をして、重々しくうなずいた。
「さあ、早くとってらっしゃい」
「ハイ！」
娘はけなげに涙をぬぐうと、パタパタと家の奥へかけて行った。
その後ろ姿を見送っていた山下が、額に片手をあてて、そっとつぶやいた。
「熱が……」
無事、ドア・ベルが生き返った時の、娘のはしゃぎようったらなかった。
表へ飛び出して行き、門柱のボタンを押しては、こう叫ぶのだ。
「鳴ったあ？　ねえ、鳴った？」
山下はとにかく七十回まではつき合った。その忍耐力は十分賞賛に価しよう。しかし、七十一回目のベルが鳴った時、山下は「はいはい、鳴りましたよ」と答えるかわりに、決然として玄関に出て行き、娘を説得する方を選んだのである。
「ねえ、お嬢さん？」
山下は、右の頬を打たれたら左の頬を差し出せという主義の実践者みたいな声で、辛抱強く言ったものだ。

「こういうことを、考えてみたことはありませんか？　我々が一体何のために、地下鉄に乗って、わざわざここまでやって来たのか。――どうです？」
「うーん、難問ねー」
娘は腕組みをして小首をかしげた。
「ひとの家の、こわれたドア・ベルを修理して歩くのが趣味……、ってことは、ないわよねえ」
いくらかは常識をわきまえているらしい。山下は少し安心した。
「だめ。降参だわ。謎々って昔から苦手なの。教えて、答はなあに？」
「じゃあ言いましょう。実は、私は……」
「火星の秘密諜報部員とか」
「ちがった。月刊『猫又ジャーナル』の山下です」
「山下さん」
「そう。で、今日は、豪田博士のインタヴュー記事を、いただきに参ったという……」
「あら、まあ！」
「ええ、そうなんですよ。だからですねえ、お嬢さん。ぜひ豪田博士にお取り次ぎを……。いらっしゃるんでしょ、博士は」
「はい！」
返事はいいのだが、娘はいっこうに動こうとしない。ニコニコと山下を見あげているばかりなのだ。

「お願いですから……」
と、山下は懇願した。
「どうか豪田博士に会わせて下さいな」
「だから……、はい！」
娘は、いっそうニコニコしながら、気をつけをしてみせた。笑うと両方のほっぺたに、えくぼができた。
山下が黙っていると、娘はつま先でくるりと一回転してみせ、それから、しきりにモジモジしながら、上目遣いに山下を見あげ、くすくす笑い、髪に手をあててつんと気取ってみせ、しまいには、あまり山下が長いこと何も言わないもので、半分ベソをかきながらスカートをいじり始めた。
不吉な予感に頬をひきつらせながら、山下はかすれ声で訊ねた。
「ま、まさか、あなたが……？」
「はい！」
娘は元気一杯こたえた。
「あたし、豪田みのり。十八歳。
マッドサイエンティストです！」
胸を張って敬礼してみせた後で、みのりはぺろりと舌を出して首をすくめた。いたずらっぽく笑って言う。

「と言っても、まだ仮免許だけど。――うふ♡」
その笑顔に、軽い目まいを感じて、山下は壁に片手をつき、深い深いため息を吐き出した。記事の失敗が目に見えるようだった。

3

「そうですか。おじい様の豪田篤胤博士は二年前に……？」
山下が沈鬱な声で言った。
舞台は応接間に移っていた。低いテーブルをはさんで山下とみのりがソファに腰かけ、サトルは二人のまわりをぐるぐる回りながら、写真（ホロ）を撮りまくっていた。
みのりは自分のつま先を見つめたまま黙ってうなずいた。
「すると、ご両親とかは……？」
「父と母は、あたしが生まれてすぐに、タイムマシンの実験中に事故を起こして……」
「お亡くなりに？」
「ううん（と、かぶりを振って）、次元漂流者になっちゃったの。だから、今もどこか別の世界を、二人でさまよっている筈よ。――新婚旅行にしては、ちょっと長すぎると思わない？」
「はあ」

山下は機械的にうなずいた。

「でもね。たまーに、二人の時間線がこの世界のそれと交差することがあるらしくって、そういう時は必ずあたしを訪ねてくれるわ。あたしがどんな風に育ってるか、きっと心配なのね。この前なんか、ちょうどあたしの誕生日に……、あらっ！」

みのりが不意に大きな声を出したので、山下はびくっとした。彼女のただでさえ大きな目が、さらに大きく見開かれ山下の背後を見つめている。

3Dカメラから顔をあげたサトルが、そっちを見るなり、ぎゃっと叫んでひっくり返った。

「お、お化け〜〜〜！」

机の下に頭をつっこんで、ガタガタふるえ出す。

決死の勇をふりしぼって、山下はふり返った。

男の幽霊が、壁からにじみ出すようにして、出現するところだった。ロマンスグレーの渋い中年で、銀色のスペース・スーツをトラッド風に着こなしていた。

「あら、パパ」

みのりが言った。

「今度のサイクルは、ずいぶん早いのね」

「おう、みのり。元気でやっとるか。ちょっと見ない内に、また一段ときれいになりおったな。ますますママに似てきたぞ。わはははは」

半透明なその人影は、応接間をゆっくりと漂うように横切りながら、豪快に笑ってみせた。

「ママはどうしたの？」
「石炭期で、こんなでっかいゴキブリの祖先に追いかけられてな、離ればなれになってしまったのだ。しかし心配はいらん。なんせ、わしらは強い愛の絆でつながれておるからな、ヒッヒ。おっつけ見えるだろうよ」
もう一方の壁に消えて行きながら、父親の影は手をふった。
「じゃあな、みのり。達者でくらせよ。ママに会ったら、愛してるってパパが言ってたと、伝えておいてくれ」
「オッケー。パパも元気でね〜〜〜」
みのりも手をふり返した。
その様子を、山下とサトルが、完全に痴呆の表情で見つめていた。笑顔でこちらに向き直ったみのりに、山下は壁を指さしながら、かすれ声で訊ねた。
「パ、パ……？」
「そうよ。豪田博基っていうの。素敵でしょ？　パパみたいな立派なマッドサイエンティストになることが、あたしの夢なの」
みのりは、ちょっと甘えたような口調で、舌足らずに答えた。
何も言えずに、ただ茫然とつっ立っている二人の足元で、いきなり声がした。
「おや、お客さんなの？　みのり」
二人はしっかと抱き合って、同時にとびあがった。

「あっ、ママ。今、パパがね……」
「来たの、あの人？　全く、あたしをほうり出して逃げちゃうんだから、ほんとにしょうがないったら……。あんな虫の、どこがそんなに怖いのかしらね」
同じく銀色のスペース・スーツに身を包んだ、みのりの母親は、テーブルをつき抜けて上昇しながら、ぶつぶつと文句を言った。四十をいくつか越したあたりだろうが、年齢を感じさせぬ美貌の持ち主で、まだ十分に色っぽい。
「あんまり、パパをしかっちゃ可哀そうよ」
みのりが口を出した。
「それに、愛してるって伝えてくれって、パパからの、で・ん・ご・ん」
「まあ、あの人ったら。いつも、うまいことばっかり言って……」
言葉とは裏腹に、まんざらでもない口ぶりで母親は答えた。天井に半分めりこみながら、山下とサトルにニッコリ微笑みかけて言う。
「まあまあ、何のおかまいもいたしませんで。みのりの母のかおりでございます。これ、みのり。何してるの。お客さまにお茶ぐらいお出ししたらどう。ほんとに、気のきかない娘でして、オホホホホ……」
笑い声の最後の方は、もはや何も見えなくなった天井板の向こう側から、かすかに響いてきただけだった。
今にも泣き出しそうな声で、サトルが言った。

「先輩〜〜〜。帰りましょおよお」

「ば、馬鹿者！　お前それでもジャーナリストのはしくれか！」

山下は大声で怒鳴った。そうでもしないと、自分の足が勝手にまわれ右して駆け出してしまいそうで、不安だったのである。それに、今逃げて帰ったら、口の悪いヤブ編集長に何を言われるか、わかったものじゃない。——いや、おおよその見当はつく。

ごくりとひとつ唾を呑みこんで、山下はメモを取り直した。

「す、すると、あ、あなたは、おじい様の手ひとつで、育てられたというわけなんですね？」

「そう。篤胤おじいちゃんと、あとアレックスの二人……」

「アレックス？」

「研究所に古くからいる助手のロボットなの。今、呼ぶわね。アレックス！　お茶をいれてちょうだい」

どこか遠くの方で、何か金属のきしるような音が、したようだった。

突然、マホガニー製の扉をぶち破って、アレックスが応接間に入ってきた。ひとかかえほどのG　E（グランド・イフェクト）スカートの上に、ずん胴のボディが乗り、透明な頭部カバーを通してLEDがチカチカ光っているのが見えた。ティ・セットを乗せたワゴンを引っぱっている。

DNAをちょう結びにすることだってできる、六本の細いマニピュレーターを自在にあやつって、アレックスはさっそく三人に紅茶を給仕し始めた。——クイーン・メリーが香った。

「部屋に入る前には、扉を開けなさいって、何度言ったらわかるの？」

みのりが苦々しい口調で言った。
「今度やったら、分解しちゃうから。——いい？」
『ハイ。ミノリオ嬢サマ』
「みのり博士！　でしょ」
『ハイ。ミノリ博士。——キュルキュルキュルキュルッ！』
アレックスは、しゅうしゅうというGEMの静かな音をさせながら、部屋から出て行った。扉の鏡板にあいた大きな穴を通って。
「時々、電子アイがX線モードから切り替わらなくなっちゃうらしいの。もうポンコツだから」
みのりが、ティ・カップをふうふう吹きながら言った。ひどい猫舌なのだ。ひと口すすって顔をしかめる。
「あの、最後のキュルキュルって音は、何なんですか？」
紅茶に何杯も何杯も砂糖を入れながら、サトルが訊ねた。その様子を山下が、今にも吐きそうな顔で見つめている。
「あのロボット、時々、早送りで文句を言うくせがあるの。ひとり言みたいなもんね」
みのりが肩をすくめながら言った。
「あたしに内容を知られたくないもんだから、速度を十倍にして喋るわけ。——きっと何かすごく皮肉なこと言ったにちがいないわ」
「なるほど」

しかつめらしくサトルがうなずいた。かきまぜていたスプーンを止めて、一口紅茶を飲み、ちょっと首をかしげながら切り出す。

「すみませんけど、もう一杯砂糖をいただけませんか？」

となりで山下が口をおさえた。

「ええ、どうぞご遠慮なく」

みのりはクスクス笑いながら答えた。

「紅茶って、砂糖がききにくいんですもの」

「いっそのこと、砂糖壺の方に紅茶を入れて飲んだらどうだい」

山下が刺すような口調で言った。

「後で、実験室の方を案内してあげるわ。おじい様やパパの新発明とか、あたしが今研究している題材も、いっぱいあるのよ」

「そりゃあおもしろそうですねえ」

勢いこんでサトルがうなずいた。

「確かに、おもしろいだろうよ」

山下が、ぶつくさとつぶやいた。

「もう一杯、お紅茶どお？」

ティ・ポットを片手に、みのりは二人にのんびりと微笑みかけた。

午後の日ざしが応接間いっぱいにあふれ、三人の姿を後期印象派風に浮かびあがらせていた。

4

「んと、次はこれね。えっとお、これはパパの開発した、ゼロ・メタボライザー・コントロール・スリーピング・ポッドなの」

やたらとコードやらパイプのくっついた金属製の棺桶を指さして、みのりが言った。

親子三代にわたるマッドサイエンティストの家系である、豪田家の実験室には、ほこりをかぶったわけのわからない発明品やら、奇々怪々な形をしたメカなどが、足のふみ場もないくらいころがっている。みのりは二人を案内して、それらの品々を一つ一つ丁寧に説明して回っていたのだ。

「眠っている間のメタボリズムをゼロにとどめておけるわけ。すごいでしょ?」

「はあ。――で、それは一体どういう風に役に立つわけですか? つまり……」

山下がメモをとりながら熱心に訊ねる。やっと本来の調子をとり戻したらしい。そのとなりでは、サトルが3Dカメラの操作に没頭していた。

「人生の三分の一は眠ってるわけじゃない? 人間って。だから、これを使えば、実効寿命が結果として三十パーセント延びるのと同じ効果が得られる――筈だったの」

「筈だった?」

「そう。でも、ダメだったの」
「装置がうまく働かなかったんですか？」
「あら、ちがうわよ」
ちょっと傷つけられたような表情で、みのりは憤然と答えた。
「パパの作った機械は、いつだってちゃんと動いたわ」
「じゃあ、どうして」
「眠ることにならないのよ」
「は？」
「にぶいわね、もう！　眠っている間の代謝を停めちゃったら、疲労も回復しないわけじゃない。全然、眠ったことにならないの！　ポッドに八時間入った後で、また八時間、今度は外のベッドで眠んなきゃならないわけよ」
　みのりは、ちょっと笑って肩をすくめた。
「パパの発明って、アイデアはいいんだけど、いつもあまり実用的じゃないの」
「しかし、これは冷凍睡眠（コールド・スリープ）に替る、新しい方式じゃないんですか。画期的だ」
　山下が言った。
「たとえば、恒星間旅行なんかの……」
「今時、どこのだれが、冷凍睡眠（コールド・スリープ）なんかで宇宙を旅するっていうの？」
「な・る・ほ・ど……」

山下はうなずいた。
「わかったでしょ」
みのりもうなずいた。
「だけど、このポッド動いてますよ」
サトルが、点灯しているグリーンのパイロット・ランプを指さして言った。
「冷蔵庫がいっぱいになっちゃったから、かわりに使ってるの。お肉や、お魚が腐らないでしょう？」
そう言って、みのりはポッドのふたを開けてみせた。中には生鮮食料品がぎっしりとつまっていた。
「これなんか、三年前のしめサバだけど、まだ平気よ。食べてみる？」
山下とサトルは、口元に妙なうす笑いを浮かべながら、そろって一歩後ろに退がった。
「そお？」
みのりは軽く眉をあげ、ポッドのふたをバタンと閉めた。
再び先に立って歩き始める。
「こっちに置いてあるのは、おじい様晩年の作品で、どこにも行けないどこでもドア。その向こっ側が、一秒間につき一秒だけ過去へ戻るタイムマシン。それから……と。あっ。そのドア開けない方がいいわよ」
わく組みだけのドアのノブに手をかけているサトルに、みのりが声をかけた。しかし、その時

はすでに遅かった。
ガチャ……。
まだ開けていない筈のドアが開く音がした。
そして山下は見た。ドアからサトルが歩み出てくるのを。
「あれ？」
目をぱちくりさせて、サトルは囲りを見回した。元の実験室であることが、意外らしかった。
一方、山下は気が狂いそうだった。
ドアをはさんで、サトルが二人存在しているのだ！
出てきた方のサトルは山下を見て言った。
「どうなってんですか？」
その時になって、これから入る方のサトルが、ようやくドアを開けて中に足を踏み入れた。チラリと見えた内部には、暗黒の大宇宙がはてしなく広がっていた。山下は目まいを感じた。
ドアはいつの間にか締まっていた。
「このワープ・ドアの実用最短跳躍距離は二百億光年なの。
おまけにタージオン＝タキオン変換方式を使ってるもんだから、ドアに入った人は超光速で時間を逆のぼりながら宇宙を一周して、こっち側から出てくるってわけ。——要するに、入る前にはもう出てる、変てこりんなところてんドアってところね。でも、その点をのぞけば普通のドアと、ちっとも変わらないの。馬鹿みたいでしょ。あは♡」

そう言って、みのりはほがらかに笑ってみせたが、もとより山下に笑い返す気力が残っていよう筈はなかった。

手の中のメモ用紙が、やたらと重く感じられ、山下はため息をついた。

しばらくの間、うす気味悪そうにドアを見つめていたサトルが、わりかしまともなことを言った。

「じゃあ……、ドアからぼくが出てきた時に、もしぼくが急にドアに入るのをやめちゃったら……、一体ぼくはどうなってたんです？」

「そんなことは、ありえないのよ。と言うより、できないの」

みのりは軽く笑った。

「現象としては時間的に逆の現われ方をしても、因果関係の順序は変わらないものなの。出てきた以上あなたは入ったのだし、入るのよ。入らないというわけにはいかないの。わかるでしょ。最初っから入らないつもりなら、出てきっこないもん」

「で、でもですよ。万一、途中で気が変わったら？」

「いや、それより、出てきたとたんにもう一度ドアを開けて、元に戻ろうとしたら、どういうことになるんです？　どこかではち合わせするんですかね？　それとも……」

山下が言葉を受けついだ。

「あるいは、それを何度もくり返したら？」

サトルがつけ加えた。

「さあ……？」
みのりのつぶらな瞳が、再びまん中に寄った。うで組みをし小首をかしげて一生懸命考えている姿は、一種のひたむきさが感じられて、妙に可愛かった。
「やってみるしかないわね」
長いこと考えた後で、みのりはきっぱりと言った。ワープ・ドアに歩み寄る。
とたんに、ドアの両側に無数のみのりが出現した。
ドアが目に見えないほどの早さで開閉され、そのたびに、みのりが一組ずつ現われた。もちろん、その一人一人が確固とした存在であるわけではない。シャボン玉が消えるように、みのりの三次元的残像は次々と消えていったが、増加のスピードの方がわずかに上回っているらしく、着実にみのりたちの数は増えていった。
みのりたちは、きゃあきゃあ言いながらお互いを指さし、笑いころげ、腕を組んでダンスを始め、追いかけっこに興じ、あるいは取っ組み合いをしたりして、さんざんはしゃぎまくった。
あちこちで、物のこわれる音がし、山下とサトルもみのりの人波にのまれて、もみくちゃにされた。
「たったっ、たすけてくれえ！」
山下は声を限りにわめいた。サトルも叫んだ。
「みのりさぁん。わかりました。よぉくわかりましたから、もうやめて下さい。お願いですぅ。あんなこと訊いたぼくがみんな悪いんです。ごめんなさい。お母さ〜〜〜ん」

唐突にみのりの増加が止まった。こま落としのフィルムを見るような調子で、みのりたちは次々と消えていった。
まばたき一つか二つするうちに、全てのみのりたちは、ドアの出口側に立っているみのり一人に収斂した。
「あー、おもしろかった！」
そのみのりが、声を弾ませながら言った。
両手を膝に、肩で息をしていた山下が、床でのびているサトルに向かって、小声で一語一語区切るように言った。
「今度から、お前は、黙ってろ。いいか。二度と、余計な口を、出すんじゃない。——わかったな」
「だけど、先輩だって……」
「二度と、と言った筈だぞ」
口応えするサトルを、山下がギロリと睨んだ。
「さあ、お二人さん。次、行きましょうか」
みのりがニコニコしながら近寄って来た。
「いや、もう十分ですよ、みのり博士」
山下はあわてて両手をふった。
「いやいや。もう十分見学させていただきました。これ以上、ご迷惑を、おかけするわけには……

……」

「あら、迷惑だなんて。あたし、ちっともかまわないわ。毎日アレックスを相手で、退屈してたとこだし。

それに、あたしの発明も見て下さらなきゃ。さ、こっちの部屋よ」

みのりは、はずむような足取りで、るんるんしながら次の部屋に姿を消した。

山下とサトルは、顔を見合わせてじっとしていた。

二人の胸の内を、共通のある想いが同時に去来した。二人はお互いの目の中に、〝逃げよう〟というサインを、それぞれ見い出していたのだ。あとは、どちらが先にそれを口に出すかという問題だけだった。

——一瞬のためらい。それが命取りだった。

「何してるの。早くいらっしゃいな」

戸口のところに半身を現わしたみのりが、手まねきしながら叫んだ。

山下は大きなため息をつき、重い足をひきずって歩き出した。あたかも、と所に引きずられていく仔山羊のように、ふらふらと。

近くまでやって来た山下に、みのりが無邪気な笑顔を向けて言った。

「山下さんて、おかしな人ね。どうしてさっきから、ため息ばっかりついてるの？」

山下が再び大きく嘆息したことは言うまでもない。

5

典型的なマッドサイエンティストの実験室だった。

いくつものバーナーの上でフラスコが泡立っており、長く複雑なガラス管が、空中に奇妙な文字を描き出していた。ひっきりなしに煙を吐き出しているビーカーがあり、二つの金属球の間で火花がとびかっていた。

みのりは、いつのまにか白い実験着を着こんでいる。だぶだぶのそれを、威勢よく腕まくりしている姿は、何か血筋というものを感じさせた。

「いったい、これは何です?」

片手をぐるりと回して部屋の中のガラクタを漠然とさし示しながら、山下が訊ねた。

「この時代がかった実験器具には、何か意味があるんですかね」

「なんにも」

みのりは平然と答えた。

「まあ、強いて言うなら雰囲気作りね、インテリアとしてはちょっと風変わりだとは思うけど、でも、こういう写真を撮りたいんじゃないかって思って」

「そいつは、どうも」

苦笑しながら、山下は軽く頭を下げた。改めて実験室を見回してみるが、ひと目で正体のわか

りそうなものは何もない。大小さまざまの金属パイプを、小さい子供がでたらめにおし固め、くっつけ合わせたようなメカニズムが、床の上にいくつも無造作にころがされている。
山下は手近かのひとつを手にとって調べてみた。サッカーボールほどの大きさ。何に使うものかどころか、そもそもどっちが上になるのかすらわからない。出来損ないのウニみたいな形だ。
山下が首をひねっていると、みのりが横から言った。
「それはね、コンピュータ付きの鉛筆けずり。フル・オートマチックだけど、我ながら愚作だなあって、呆れてるとこなの」
「鉛筆けずり？　これが？」
「ほら、ここに穴があるでしょ？」
なるほど、鉛筆の太さの穴が、銀色のパイプが六本組み合わさっている、そのちょうどまん中にポツンと口をあけていた。
「カスはどこから出るんです？」
「カスは出ないの」
みのりは言った。
「実を言うと、削るわけでもないの。単に鉛筆の芯をとんがらせるだけ」
「どこがちがうんですか？」
こらえきれなくなったサトルが口を出して、山下に睨まれる。
「空中の炭素を固定して、すりへった分を再構成する仕組みなのよね」

「素晴らしいじゃないですか」

山下が感嘆の声をあげた。

「それがちっとも素晴らしくないのよねー。だって一本の鉛筆を削るのに、一時間もかかるんですもの」

なさけなさそうな声で、みのりはつけ加えた。

「あたしって、ダメなマッドサイエンティスト」

「そんなことありませんよ！」

サトルが急に大きな声を張りあげた。頬を紅潮させて言う。

「みのりさんは立派なマッドサイエンティストです！　きっと今に、おじい様やお父上以上の、超一流のマッドサイエンティストになれますよ！　それに、とてもきれいだし……」

「まあ！」

みのりは小さく叫んで、両手で頬をおさえた。見る間に真っ赤になっていく。完熟トマトの高速度フィルムを見ているようだった。

照れて頭をかいているサトルに、山下が口の端っこから声を出して、鋭く警告した。

「口を出すなって、言っといた筈だぞ。お前が何か言い出すと、きまってロクでもないことが起こるんだ」

「そいつは誤解ですよ、先輩」

サトルもまた、口の端っこで答えた。それに対して何か言い返そうと、山下が向き直った時、

サトルは不意に、
「あれ……？」
そして、ぐちゃぐちゃからみ合ったメカニズムの陰から、一本の金属製の筒をとり出してきた。
「これくらいは、ぼくにもわかりますよ。──懐中電灯でしょ、これ」
「馬鹿。そりゃライト・セーバーだ。そんなことも知らんのか。こっちへ貸してみい！」
つや消しの黒に塗られた三十センチほどの長さの円筒を、山下はサトルの手からひったくった。
その山下の手からさらに、ひょいと円筒を取りあげながら、
「ざあんねんでした。ライト・セーバーでもありません。これはね、次元カッターなの」
そう言って、みのりは握り部分についた赤いボタンを、カチリと押した。
ずみょ！
とかいうような妙な音をたてて、紫色をした光の束が、一メートルほどほとばしる。
「やっぱりライト・セーバーじゃないですか」
「ちがうってば。──ほら！」
みのりは、ほんとうに何気ない調子で、紫色の光を動かして、サトルの首すじを横なぐりにした。
「うわ！」
反射的にサトルが身を引いた。
「うわわっ！」

山下が絶叫した。身体の方の急激な動きについていけず、サトルの首だけが、今まであった空間にとり残されていたのだ。

首は一瞬、空中に浮かんだまま、目をパチパチさせ、それからストンと床に落っこちた。

「痛ッ！」

首が言い、体の方が頭をおさえようとして両手をあげ、空しく宙をつかんだ。

「ど、ど、どうなってるんだ。どうしてぼくは床の上なんかに寝てるんだ？　ぼ、ぼくの体はどこへ行ったんだ？――みのりさあん」

サトルは悲鳴をあげた。

「落ち着いて、サトルさん。ただ首を落っことしただけなんだから」

みのりの声が上からふってきた。視線をあげると、みのりと山下が心配そうに自分を見下ろしていた。可愛いフリルのついた、花柄のパンティも見えたが、今はそれどころじゃなかった。

「く、首を、落っことしたあ？」

サトルは発狂しそうな目をして叫んだ。

「ひろって下さい！　すぐひろって下さい！　誰かに猫ババされたら、どうするんです。先輩、早くひろって、ぼくの体の上に、くっつけて下さいよお。お願いですう」

サトルの体が手足をバタバタさせた。

「絶対いやだ」

山下が蒼白な顔をして言った。

「誰が、そんな生首なんかに、さわるもんか」
「そんなあ」
「あたしが誘導してあげるわ。はい向きを左に変えて。あっと行きすぎ。そうそう、そのまま真っすぐ歩いて来るの。一歩、二歩、三歩。はーい、ストップ。そのまま両腕を伸ばして、ゆっくり前かがみになるの……」
「うひょっ」
自分の指先が自分の頭に触れ、サトルは妙な声を出した。二、三回、手さぐりした後で、しっかりとつかみ、持ちあげる。
「何か変な気分です」
自分の首を、みぞおちのあたりで両手で支えたまま、サトルが言った。
「早くそれを元の所に戻せ！」
山下がわめいた。
「見てるだけで気持ちが悪くなってくる。自分が、どれくらい不気味な格好をしているのか、自覚しとらんのか！」
「そんなに不気味ですかあ?」
そう言いながらサトルは、自分の首を山下の方へつき出した。
ぎゃっと叫んで、山下は気を失った。
「あっ、先輩。あっ、痙攣してる。気の毒なことしちゃったなあ。おどかすつもりはなかったん



だけど……。しかし、おもしろいなあ。一体これはどういう仕掛けになってるんです？」

「だから言ったでしょ。次元カッターなの。三次元的には切断されたように見えるけど、四次元的な連接はそのままだから、こうやっても血も出ないし神経も通じてるってわけ」

みのりは、紫色の光束を再び、ずみょっと伸ばしてみせた。

「おもしろいなあ。ちょっとぼくにも見せて下さい」

「その前に、その首をどうにかしなきゃ。両手がふさがってるじゃない」

「あ、そうか。じゃあ、体の動きがよく見えるように、こうして机の上に置いてと……」

みのりから次元カッターを受け取った体(サトル)は、光束を出したりひっこめたりして遊びながら歓声をあげた。もっとも、実際に喋ったのは、机の上に鎮座した首(サトル)の方だが。

「わーい、おもしろいなあ。凄いじゃあないですか、みのりさん。——天才ですよ！」

「ほんとにそう思う？」

みのりは、ぱっと顔を輝かせた。

「もちろんですとも。こりゃあ素晴らしい発明だ。

例えば、旅行する時なんか、頭を四つ割りにして、左目と右目に別行動させるとか、あるいは、フランスに行く友人に、口だけを連れて行ってもらえば、日本に居ながら、本場のフォアグラだって味わえる！　もちろん、味覚だけじゃなくて、別の物を持って行ってもらえば、これも本場のコールガールを……、あわわわ。いや、これはこっちの話ですけどね。ふーむ、しかし、すごいなあ！」

サトルは何度も感嘆の声をあげた。――もしもこれが大量生産されて、世の中に出まわったら、おもしろいことになるぞ。サトルは考えた。

誰も体ひとまとめじゃ行動しなくなる。会議のある日は、首だけで会社へ来て、体はゴルフとか。いや、それだけじゃない。

サトルは熱っぽく主張した。

「次元カッターの利用法をね、さっきから色々と考えてるんですけど、これには無限の可能性がありますね、ホント！」

「もっと言って」

「例えば……、そう！　医学の分野です。ウオの目をとってもらう時は、足だけ病院にあずけて買物でもしてればいい。腹が痛いとかいう患者は、実際にスライスして調べてみることもできる。CTスキャンなんか目じゃないですよ」

「そうねえ」

「もっとすごいのは、高い所の物を取る時。ほら、あそこの棚――」

体が、実験室の天井近くに作られた棚を指さす。

「あの棚のものを取るのに、もう踏み台なんかいりません。こうして……」

と、体は自分の左腕をつけ根からスッパリと切りおとした。その腕を右手でつかみ、棚の上の箱を左手でひとつ持ちあげてみせた。

「ほら、ごらんの通り」

「すごいわ！」
「なーに。たいしたことありませんよ」
体（サトル）は、右手で握った左手で、そこにはない頭をかく格好をしてみせた、切り取られた腕が、わさわさと指先を動かしているさまは、相当に気色の悪い眺めだった。
ところが、みのりはいっこうに平気らしい。
「もう他には何かない？」
「そうですねえ」
首（サトル）は、下唇をつき出して考えていたが、やがてにたりと笑って、こう言った。
「人間ジグソーパズルなんてのは、どうです？」
「わあ、おもしろそう！」
みのりが手を打ってとびあがった。

6

みのりの歓声と、サトルの馬鹿笑いで、山下は目が醒めた。倒れた時に、どこかにぶつけたらしい。頭がズキズキと痛んだ。
「う〜〜〜ん」

片手で後頭部をおさえながら、山下は半身を起こした。
「なんだ、これ?」
目の前にころがっている、赤黒いブロックを手にとる。十センチ四方の大きさで、鮮紅色の丸い穴が、いくつか空いており、それらは規則的に収縮をくり返していた。
いくら眺めていてもわからない。
山下はそのブロックを片手に立ちあがり、みのりやサトルの声のする方をふり向いた。
「あら、お目醒め? 山下さん。大丈夫でしたー?」
床に座りこんでいたみのりが、肩のへんで小さく手をふりながら言った。
「先輩も一緒にやりませんか。おもしろいですよー」
首が机の上から笑いかけた。
じわ〜〜〜っと気が遠くなりかけ、山下はぶるんと頭をふった。
「まだその格好でいたのか。いいかげんに元に戻ったらどうだ」
できるだけ、そっちを見ないようにしながら、山下は言った。
「それに、もうそろそろ社に帰らなきゃならん時間だ」
「わかってますよ。だから今、一生懸命、組み立てているんじゃないですか」
「組み立てて、いる?――一体、何をだ?」
山下は首を見、みのりを見、そしてみのりのまわりに散らばっている物を見た。
がく、と山下の膝から力が脱けた。手からブロックがころげ落ちる。それが何なのか、今よう

やくわかったのだ。
「あら、こんなとこにあったの。いくらさがしても見つからない筈だわ」
みのりが言った。
「心臓がなきゃ、やっぱ不便ですものねえ。よかったわねえ、見つかって」
「一時はどうなるかと思いましたよ」
首（サトル）が笑った。
「だけど、腸の輪切りってグロねー」
「あっ。それで次元カッターのもう一つの利用法思いついた。もうこれからは、人類は便秘や下痢でアセることはなくなるんですよ。だって、いつでもトイレに置いて来ることができるんだから——お尻を！」
「やーねえ」
みのりがケラケラと笑った。
「やめんか〜〜〜ッ!!」
突然、山下が大声で怒鳴った。首（サトル）につきつけた人差し指が、ぶるぶる震えていた。
「さっさと元に戻るんだ！　今すぐにだ！——サトルッ!!」
「はいっ！」
床の上で、体（サトル）の部品（パーツ）がごそっと動いた。本人は直立不動の姿勢になったつもりらしい。
「みのりさん。どうやら遊び時間は終ったようです。仕方ありません。元に戻して下さい」

「だから、今組み立てているじゃない」
「いや、冗談を言ってる場合じゃないんです。先輩を怒らすと怖いんですから。早くこの、ぼくの体をバラバラにしている〝次元境界面〟とかいうシロモノを、解除して下さいよ」
「……え？」
みのりは、鳩が豆鉄砲をくらったような表情になった。いかにも、意外なことを聞くという口ぶり。——素直に、驚いていた。
びしっ！
首の笑顔にひびが入った。
（恐ろしい予感）
「えっ……て、まさか……」
声をふるわせて、サトルは言った。
「まさか、みのりさん……」
張り裂けんばかりの目で、みのりを見つめる。
（恐ろしい予感）
きょとんとして、首を見つめ返すみのり。
無邪気で、可愛い、驚きの表情。
（恐ろしい予感）
見つめ合う二人。

凍りつく時間。長い長い一秒。

サトルの心に、それがいい沁み込んで来る。

ゆっくりと。しかし、確実に。

恐ろしい事実が……！

サトルの顔から、すうっと血の気が引いた。

唇がわなわなと震え出す。

と、不意に、瞳がひっくり返って、まぶたの裏にかくれてしまった。

白目、である。

声ひとつ立てずに失神してしまったらしい。まあ、無理もないが。

「お嬢さん？」

すっかり十八歳の少女の顔に戻ってしまったみのりに、山下は優しく声をかけた。

「あたし、どうしましょう」

今にも泣き出しそうな声で言う。

「元に戻すなんて、考えてみたこともなかったわ」

「なーに。どうってことありませんよ。それより、お手数ですけど、何か大きな風呂敷のようなものでもありましたら、貸していただけませんか？」

「風呂敷はないけど、キャスターのついた大っきなトランクがあるわ。海外旅行に持ってくやつ」

「それは結構――」
「ちょっと待ってて。今、アレックスに持ってこさせるから。――アレックス！」
みのりは、パタパタと実験室から駆け出して行った。
すぐに、アレックスを従えて帰ってくる。アレックスはトランクをカラカラと引っぱっていた。
その場の惨状を電子アイがぐるりと見わたし、この皮肉屋のロボットは、例の早送りで感想をのべた。
『キュルッ、キュルキュルキュルキュル。キュルッ！』
人間どもの阿呆さかげんについて、二、三辛辣な警句を、ショーペンハウエルかニーチェあたりから引用し、さらにその上に、これまたとびきりシニカルな独自の解釈をひとつふたつ――多分、そんなところだろう。

豪田邸を辞する時、みのりは目にいっぱい涙をためて言ったものだ。
「ほんとうにごめんなさい。あたし大急ぎで、元に戻れる方法見つけ出しますから」
「なーになに。そんなに気に病むことはありません。自分の馬鹿でこんな破目になったんですから。自業自得ですよ」
山下は鷹揚にうなずきながら言った。
「でっかい樽か何かに入れて、重しをのせて一晩おいときゃ、元に戻ってますよ。トカゲの尻尾みたいに生命力の強いやつですから。平気平気。心配いりません」

山下はトランクを軽く蹴とばしてみせた。中からモゴモゴいう声が聞こえてきた。
「じゃあ、私はこれで。また何か記事になりそうな発明でもしたら、電話して下さい。今日は本当にどうも、ごやっかいをおかけして。きっと、素晴らしくおもしろいルポが書けると思いますよ」
「きっと見つけ出します」
半ベソのみのりが、また言った。
「あなたなら、絶対に見つけられますとも。みのり博士」
山下はうけ合った。
「そうかしら」
「そうですとも！　私がこんなでっかい太鼓判を押しますよ。だから、もう涙をふいて」
「うん」
童女のようにあどけない仕草で、みのりはこっくりとうなずいた。手の甲で涙をぬぐって、ちょっぴり恥かしそうに微笑んだ。
「その方がいい」
山下は、とっておきの笑顔を見せて言った。
「ところで、最後にひとつお願いがあるんだけど、きいてもらえるかな」
「あたしにできることなら」
「実は、あのコンピュータ付き鉛筆けずりを、記念にもらえないかな、と思って」

みのりは、ぱっと瞳を輝かせて室内にかけ戻り、あっという間に帰ってきた。

「はい！」

銀色のサッカー・ボールを両手で差し出す。

「本当にいいの？」

「貰ってもらえて、とってもうれしいわ」

「じゃ、ありがたく」

山下は、それをトランクの上に置いて、みのりに笑いかけた。

「じゃあ、また」

「はい」

「元気でね」

「はい。山下さんも」

「うん。じゃ」

「はい」

夕陽の中を、大きなトランクをひきずりながら、山下は去っていった。一度だけふり返ってみると、はるか遠くなった猫ヶ丘の長い長い坂の上で、みのりがまだ手をふっていた。大きく手をふり返して、山下は私鉄の駅へと通じる角を曲がって、見えなくなった。

＊

記事(ルポ)は大評判だった。
なにしろ、あのヤブ編集長が、わざわざ彼をデスクまで呼んで、こう言ったくらいだから。
「ご苦労さんだったな」
その月の号も出て、売れ行きも順調ということで、『猫又ジャーナル』編集部に、一時の安らぎの期間が訪れた。
山下は自分のデスクに頬杖をついて、ぼんやりと鉛筆が削れるのを待っていた。となりの机の上には、サトルが乱雑に積みあげられ、気持ちよさそうに居眠りしていた。たしかにもう春なのだ。
空気を吸いこむかすかな音をたてていた、コンピュータ付き鉛筆けずりのパイロット・ランプが、パチンと赤から青に変わった。
きれいに修復された鉛筆の芯を見つめ、次号の企画を考えなきゃいかんなと、山下は思った。
その時、手元の電話のベルが鳴った。
「はい?」
「山下さん? 外線から電話よ。女の子」
ふくみ笑いをしながら、社の交換嬢が電話を切り替えた。
「もしもし?」
「あ、山下さん? あたし、豪田みのりです」
息せき切ったみのりの声が、受話器からとび出してきた。

「大変なんです！」
「どうしたんだい。サトルを元に戻す方法が見つかったのかい」
「ううん。残念だけど、それはまだ……」
「じゃあ、一体……？」
「実は、実はうちのドア・ベルが、また故障しちゃったの。ねえ、お願いだから山下さん、直しに来てちょうだい。お願いー。——聞いてるの？　山下さん」
山下は聞いていなかった。
山下は黙って電話を切り、静かに頭をかかえこんだ。人生、という言葉をふと思った。
机の上では、電話がまた鳴り始めていた。

第二話　タイムトンネルを掘る

1

「どうやって……？」
と、山下が訊ねた。
「スコップで……」
と、みのりは答えた。
山下は絶句した。
『特ダネを取ってくるか、窓からほうり出されて、お前が特ダネになるか』
鬼のような微笑を浮かべた編集長の、妙に優し気な声が山下の脳裏をふとよぎった。参考までにつけ加えるならば、彼が勤めているタウン情報誌『猫又ジャーナル』の編集部は、ビルの六階にあるのだ。
山下は無意識の内に、ごくりと唾を飲みこんだ。
『猫ヶ丘――現在・過去・未来――』

それが山下のでっちあげた次号のテーマだった。近々行なわれる市政二十五周年の式典をあてこんだ、十六ページのグラフ記事である。『ぼくたちの街・猫ヶ丘の歴史を知っておくのも悪くない』とか言う、妙なサブタイトルもくっついていたが、これだけではいかにも平凡だ。決め手に欠ける。六階からダイビングさせられかねない。そこで――

「二十五年前の猫ヶ丘に、連れてってほしいんですって？」

山下たちが相談に現われた時、豪田篤胤科学研究所所長であり、仮免許中のマッドサイエンティストであり、なおかつモーレツなカワイコちゃんでもある豪田みのりは、目をパチパチさせながら訊き返したものだ。

「そう。できれば二十五年後の猫ヶ丘の様子も取材したいんですが」

「二十五年後……。ああ。それで現在過去未来なのね。ふーん」

「できる……？」

少し心配そうな声で、山下は言った。

「できますよね？」

助手兼カメラマンのサトルが、信頼しきった笑顔を向ける。

「そうねー」

みのりは腕組みをして考えこんだ。首をかしげ、右手でふっくらした頬を押さえている。例によって、目がまん中に寄っていた。

「どう……？」

山下がうながした。アスファルトの上でぺちゃんこになっている自分の姿が、目の前にチラつき始めた頃——

「やっぱ、あれしかないわね。うん」

みのりが、自分自身でこくんとうなずきながら言った。

「じゃあ、できるんですね!」

「もち。——でも、ちょっと疲れるわよ」

「疲れる? どうして?」

「だって……」

みのりは、ニッコリ笑って答えた。

「タイムトンネルを掘らなきゃいけないんですもの」

ここで冒頭の山下のセリフに戻るわけだ。

茫然としている山下たちをよそに、みのりは一人でかけ回って準備を始めた。

皮肉屋ロボットのアレックスが、GEMの静かな音をさせながらやって来た。二人分のシャベルとライト付きヘルメットをテーブルの上に置き、ジロリと電子アイで山下たちを一瞥して応接室を出て行く。後ろ姿が何かを語っていた。

山下とサトルは、それぞれシャベルとヘルメットを手にとって眺めた。

「おまたせー」

半袖のピンクのジャンプスーツに着替えたみのりが、るんるんしながら戻ってきた。手に小さ

な園芸用のスコップを持っている。お砂場遊びに行く子供みたいに、はしゃいでいた。
「ねえ、みのりさん……」
サトルが言った。
「どうして、これ、シャベルにメーターがついているんですか？」
シャベルの先端、土をすくう部分に直径二十センチほどもある、大きなメーターが取り付けてあった。何を表示しているのか、メーターの針はゆらゆらと動いている。不思議なことに、奥行きのあるメーターが付いているにもかかわらず、横から見るとその部分はただの薄い鉄板でしかないのだ。
「ああ、それ？」
みのりは手にしていたスコップを、ちょっと振ってみせた。それにもやはり、小ぶりのメーターが、二つ並んでついていた。
「これはねー、〝量子シャベル〟なの。本当に土を掘るんじゃなくて、時間量子を掘り抜くわけ。メーターが何のためについているかって言うと、普通のシャベルと区別するため。だって、うっかり庭いじりしてて他の時代に行ったりしたら大変でしょう」
「はあ」
気抜けした表情で、二人はうなずいた。
「ぬわんちって」
みのりは笑い出した。

「冗談よ。本当は次元羅針盤らしいんだけど、なにしろ篤胤おじい様が作った物だから、あたしにはよくわからないの」

「はあ」

ぐったりと疲れた様子で、二人は機械的にうなずいた。

アレックスが、大きなバスケットをかかえて入ってきた。スヌーピーのエプロンをしている。

「さあ、お弁当もできたことだし。二十五年前へ、しゅっぱあ〜〜〜つ！」

みのりが右手のスコップをふりあげて、高らかに宣言した。

山下とサトルは、のろのろとヘルメットをかぶり、シャベルをかつぐと、みのりの後について足どり重く部屋を出ていった。アレックスが無言で見送った。

2

「こっちへ掘ると過去で、こっちは未来」

みのりが自信たっぷりに断言した。

山下たちは豪田家の庭先に、まず深さ三メートルほどのたて穴をこしらえた。量子シャベルの作用フィールドのおかげで、さして力を入れなくても、穴は面白いように掘れていった。ちょうどプリンをスプーンですくっているような手ごたえだ。

穴の底から青空を見あげ、額の汗をぬぐっていたサトルが、みのりをふり返って言った。
「どうして、そうなるんです？」
みのりはすまして答えた。
「カンよ」
「帰りたくなってきた」
山下が口の中で呟いた。
「さあ、掘って掘って！」
手をぽんぽん叩きながら、みのりが言った。
二人は、せっせと横穴を掘り始めた。
その後ろ姿を見守りながら、みのりはしきりと首をひねっていた。
『一メートルが一年だったかしら、それとも一世紀だったかしら……。確か角度とか方向も何か関係していたような気がするんだけど……。うーん』
二十分ほども掘り進んだところで、唐突にトンネルは向こう側につき抜けた。まばゆい光がシャベルの作った小さな穴からさしこんできて、山下は目をしばたたいた。
穴を広げて、まっ先に外に顔を出したサトルが、素っ頓狂な声で叫んだ。
「あれれ。こりゃあ一体どうなってるんだ⁈」
山下もその隣に顔をのぞかせる。穴の外には、見渡すかぎり赤茶けた荒野が続いていた。どこかで見たことのあるような岩山が、あちこちにそびえている。

「どう見ても、ここが猫ヶ丘とは思えないな」

山下が言った。

「それより、どうしてですかねえ。ぼくたちは横穴を掘ってたのに、ほら……」

言われてみれば、今みのりたちが顔を出している穴は、地面に垂直に口を開いている。横穴を掘っていたら、どこかの土地へ真下から出てしまったというわけだ。山下とサトルは何らかの説明を期待して、みのりをふり返った。

みのりは、きょろきょろとあたりを見回し、あっけらかんと言った。

「ほんとに不思議ね！」

山下はため息をついた。

「だけど、ここはどこなんですかね」

穴からはい出したサトルが、額に手をかざしながら言った。地平線がかげろうでゆらめいてみえる。日ざしが強い。

「いつなのか、という問題もあるな」

山下が続いた。穴の表面を通過する時、引力の方向が九十度変化するので、くすぐったいような変な気分だった。

「きゃっ……」

小さな悲鳴をあげながら、みのりもはいあがってきた。山下は手を持って立たせてやった。

「何か近づいてきますよ」

地平線の向こうに立ちのぼる土煙りを指さしながら、サトルが言った。
「なんですかね？」
三人はじっとつっ立ったまま、その方向を見つめていた。
土煙りの原因は、たちまち接近してきた。数十頭の馬が走るひづめの音が、遠雷のように大地を揺がして響きわたり、それにまじって、怪鳥の叫びにも似た喚声が、切れ切れに聞こえてくる。
「どうやら……」
口を開きかけた山下のすぐそばを、ひゅんと風を切って何かが、かすめ飛んでいった。今や裸馬にまたがった、半裸の男たちの姿がはっきりと見てとれた。羽根飾りが風になびいている。
ぐさっ！
三人の足元に、深々と矢がつき刺さった。
「ひえ！」
三人は抱き合って同時にとびあがった。
そのまわりを、数十人のアメリカ・インディアンたちが、口々に奇声をあげ、叫び交わしながらかけ回った。
——もうだめだ！
山下はぎゅっと目を閉じた。〝殉職〟という文字が、まぶたの裏のスクリーンに大写しになった。
と、不意に、一切の騒ぎがおさまった。

死のような静寂に、山下はおそるおそる目を開いた。インディアンたちは、皆一様に真剣な面持ちで、ひとつの方向を見つめていた。
「ほら、あそこ。岩山の上から煙が……」
みのりが小声で囁いた。
族長らしい大きな羽根飾りをつけた男が、右手をさっとふると、インディアンたちは再び奇声をあげながら、馬を駆ってたちまち走り去ってしまった。
「どうなってんだろう」
茫然と見送っていたサトルが口を開いた。
「こっちが聞きたいね」
砂ぼこりにセキこみながら、山下が答えた。
「何か、ずいぶん急いでいるみたいだったわね」
みのりが言った。
「また何か来ますよ」
サトルが、逆の方向を指さして言った。
同じような砂煙り。同じようなひづめの響き。ちがっているのは、進軍ラッパの音くらいなものだった。
青い制服の一行は、三人のそばまで来るといっせいに馬を停めた。大将らしい、えらそーな口ひげを生やした男が、なまりの強い英語で言った。

「インディアンを見なかったか」
「見たわよ」
「どっちへ行った」
「あっち」
みのりが答えた。
「どうやらスー族の連中は、リトル・ビッグ・ホーンに向かったようですな。――カスター将軍」
副官らしい男が、横から口を出した。
「うむ」
ロヒゲ男はサーベルを引き抜くと、後ろをふり返って、大声をはりあげた。
「ものども、わしに続け！　インディアンを皆殺しにするのだ！」
三人が大口を開けて見守る中、騎兵隊の一行は、これまたすさまじい勢いで地平線の彼方へと走り去っていった。大量の砂煙りだけが残った。
「ごほっ、ごほっ」
「とめてあげた方が、よかったかしら」
みのりが言った。
「ごほっ、ごほっ」
山下は、答えるかわりに、いつまでもセキこみ続けた。

3

「多分、方向がまちがってたんだと思うわ」
みのりが、いささかあやふやな口調で言いわけした。
「それとも角度かしら。とにかく、行きすぎちゃったことは確かだから、少し後戻りすればいいわけよ」
開拓者時代のアメリカに通じている時穴を塞ぐと、山下たちは角度を変えて、逆方向に掘り進んだ。小一時間も掘ったころ、
「出た！」
サトルが叫んだ。
血のような色をした空が一面に広がり、地表はガレキの山に覆われていた。
「ここ、どこ？」
みのりが言った。サトルが答えた。
「今度は、ちょっと未来に来すぎたらしいですね」
「ちょ、っ、と……?!」
山下が目をむいて叫んだ。

「とにかく、今が一体いつなのか、あそこの人に聞いてみましょ」
「人？　人がいるんですか？」
「どこに？」
「ほら、あそこ」
　みのりが指さす方向を、山下とサトルは見た。二人の顎が落っこちる音が、十キロ先まで聞こえただろう。
「あのー、すいませんけど、今は西暦何年でしょうか」
　穴からスタスタと出て行ったみのりが、しきりと話しかけている。崩れ落ちたビルの破片の一つに腰をかけ、右足首を軽くひざの上に組んだその人物は、口元に淡い微笑をたたえたまま、何も言わずにじっと赤色巨星と化した太陽を見つめ続けていた。どうやら瞑想の最中らしい。軽く、頤を支えた右手の指先すら、びくりとも動かない。
「あのー、お昼寝の最中を大変申し訳ないんですけどー」
　みのりは、まだ話しかけていた。
「みのりさん、みのりさん」
　山下は押し殺した声で、みのりを呼んだ。なんとなく大声を出すのが、はばかられるような気がしたのだ。
「え？」
「いいから、こっち」

山下は必死で手まねきした。

「こっち!」

不審そうな顔をしてみのりが戻ってきた。

「顔もあげないのよ。失礼だと思うわ」

ぷりぷりしている。

「いいんですよ。さあ戻りましょう」

「あら、だって……」

「いいんですってば!」

大急ぎで穴を埋めながら、山下が言った。教えられなくても、今が何年かはわかっていた。——なにしろ、兜率天から弥勒菩薩が地上に降りてきているくらいだから……。

山下はぶるっと首をふって、また別の横穴を掘り始めた。

タイムトンネルは際限なく伸びていき、彼らをさまざまな歴史へと導いた。今まさに沈まんとするタイタニック号の甲板上にも現われた。幼いワシントンが桜の木を切っている現場も目撃した。シーザーの演説を聞き、武蔵を待ちかねてイライラしている小次郎を、ものかげから見つめた。ピラミッドの工事現場では、あやうく石運びを手伝わされそうにもなった。ジンギス汗の軍隊が、殺戮を思うままにしている場面にも行き会った。空襲で火の海と化した東京に出現した時は、みのりがうれしそうに『少し近づいてきたみたいね』と言ったものだが、それとて、たいして近いというわけではなかった。

三人はありとあらゆる国の、ありとあらゆる時代を訪れた。ただ、二十五年前の猫ヶ丘だけには、どうしても行き着けなかったのである。

いいかげんくたびれ果てた三人は、ホモ・ハビリスが立った瞬間を目撃した後、トンネルの中でお弁当を広げることにした。

アレックス手作りのお弁当をパクつきながら、山下たちは善後策を協議した。

「困ったわね」

さして困った風でもない口調で、みのりが言った。

「そうですね」

口のまわりをごはん粒だらけにしたサトルが、十一個目のオニギリをほおばりながらうなずいた。

その様子を横目で眺めながら、山下は水筒のお茶を、渋い顔してすすっていた。編集長の、血も凍るような微笑が思い出された。胃がキリキリと痛んだ。

「あんまり食欲がないみたいですね、先輩」

サトルが言った。

何か辛辣な皮肉でも言い返してやろうと向き直った山下が、サトルの背後に視線を移して、目を見開いた。

ぼこっ。ぼこぼこぼこ。

トンネルの壁があっという間に切り崩されて、その奥から一人の男が出現した。



細いストライプの入った紺のスリーピースをぴしっと着こみ、頭には山下たちと同じようなランプ付きヘルメット。手には量子シャベル、背中には量子ツルハシも背負っていた。なかなかの二枚目だった。
「これは、お食事中のところ、どうも失礼しました」
座りこんだまま、茫然と男を見あげている三人に向かって、男は丁寧に頭を下げた。
「は。あ、いえ。ども。あの、こちらこそ、何のおかまいも致しませんで……」
顔を赤らめながら、みのりがとんちんかんな受け応えをした。
「お嬢さん方も、やはり時穴掘りを……？」
「ええ、はい」
「そうですか。私はもう三年間も掘り続けていますが、まだ目的地が見つかりません。しかし、私は決して諦めない。いつかきっとたどり着ける日が来るにちがいない。そう信じて、今日もトンネルを掘り続けているのです！」
男はどこかあさっての方向を見つめながら、きっぱりと断言した。気のせいかもしれないが、瞳の中で炎が燃えているように見えた。
「あの〜〜〜」
自己陶酔しきっている男に、みのりがこわごわと声をかけた。
「はっ！　いけない！　こんな所でのんびりしている暇は私にはないのだ！」
男は急に改まった口調になると、みのりを真っすぐに見つめ、

「つかぬことを、うかがいますが」
「はい」
みのりは、相手のあまりの真剣さに、ごくんと唾を飲みこんだ。
男が言った。
「明日はどっちでしょう?」
「さあ……」
みのりは首をひねった。
「多分、あっちじゃないかと……」
「そうですか。どうもありがとう」
男は再び一礼すると、みのりの指さしたいいかげんな方向めざして、量子シャベルをふるい始めた。コマ落としを見ているようなスピードで穴を掘っていく。
「あっ、ちょっと待って。えーと、なんて名前なのかしら」
「私ですか?」
すでに二十メートル以上掘り進んでいた男は、風を切って戻ってきた。
「私、ヤブキと申しますが、何か?」
「ヤブキさん?」
「はい」
「あのォ、二十五年前の猫ヶ丘って、どっちだか、ご存知ありません?」

「二十五年前の猫ヶ丘……確か一度そこへ出たことがあるぞ」
ヤブキは額に指をあてて考えこんだ。
「うん。思い出した!」
「どこ?」
「確かこの先をまっすぐ百五十メートルくらい掘って、右へ曲がったつきあたりだったと記憶していますが」
「わあ♡ どうもありがとお」
みのりはぴょこんとお辞儀をした。
「いや、なんのなんの。では、私はこれで」
ヤブキは穴掘りに戻った。
『明日はどっちだ〜〜〜ッ』
横穴の奥から、エコーのかかったヤブキの叫び声が、かすかに聞こえてきた。
「さあ、お二人さん」
みのりは、間抜け面をして座りこんでいる山下とサトルをふり返って言った。
「聞いた通りよ。さあ、掘って掘って!」

4

「これでちょうど百五十メートルですね」
息を切らしながら、サトルが言った。
「ここを右へ曲がればいいわけだ」
山下が、横穴をつけながら応えた。
例によって、いきなりポカッと青空が見えた。同時に、濃密な緑の匂いが、山下たちの鼻をついた。
——いやな予感がする。
穴を広げながら、山下は眉をひそめた。そして、こういう場合の山下の予感というのは、外れたためしがないのだ。
三人は穴の外へ首を出した。
そこは、うっそうと生い茂る木生シダのジャングルと、際限なく焔を噴きあげている火山群の世界だった。気色の悪い鳴き声をあげながら、上空を旋回しているのが、ただの鳥などではないことは確かだった。第一この時代に、鳥らしい鳥なぞ一羽もいなかった筈だ。
サトルは山下を見た。
山下はみのりに視線を移した。
みのりは、少し照れくさそうに、にっと笑って言った。
「はずれ」

その時、ふっと陽がかげった。考えられる可能性は三つあった。一つは太陽が雲に入ったため。もう一つは、三人の視力が突然低下したため。そして三つめは……。

そっと上を見あげた山下は、彼らをじいっと見おろしている、ひとかかえもありそうな血走った目玉と、いきなり対面した。

のどの奥にこみあげてきた丸い玉のようなものを、山下は懸命にのみ下した。膝頭がガクガク震え始めた。有体に言って、小便をちびりそうだった。

『ぐわ？』

そいつが何か言った。

「きゃあ〜〜〜っ」

みのりが悲鳴をあげ、三人はいっせいに穴の奥へと逃げ出した。

パニックに陥った三人は今や迷路のようなタイムトンネルの中を、盲めっぽう逃げ回った。

「行き止まりだ！」

妙な脇道に迷いこんでしまったらしい。山下が悲痛な声で叫んだ。後ろからは、せまい時穴をくぐりぬけようとあばれまわっている、ティラノサウルスの咆哮が追いかけてくる。

「掘るのよ！」

みのりが叫び返した。

「掘って掘って！」

山下は、とても人間業とは思えないスピードで穴を掘り始めた。みのりも全速力で走っていた

が、それにもかかわらず、山下の方が彼女よりわずかに早く進んでいた。ジェット・モグラなみのパワーだった。死にもの狂いになると、人間思いがけない力を発揮するものだ。そして、後ろからティラノサウルスに追いかけられること以上に、人を死にもの狂いにさせる状況もまたなかった。

山下は掘った。

掘って掘って掘りぬいた。

突然、出口が開いた。

勢いあまった山下は、その世界にもんどりうってころげ込んだ。その後をみのりが続いた。

二人とも口もきけないほど、息を切らしていた。

しばらくたって、山下があえぎあえぎ言った。

「どうやら、恐竜は、まいたみたい、だな。声が聞こえない」

「ええ、そうね」

ふーふー言いながら、みのりが答えた。

「だけど、サトルさんどうしたのかしら」

「サトル……？」

そう言われて初めて気がついたみたいに、山下はあたりを見回した。首をかしげて、

「確か、途中までは一緒に横穴を掘ってたんだが……」

「じゃあ、どこかでトンネルが二つに別れちゃったのね」

「あるいは、恐竜の餌食になり果てたか」
山下が無責任な顔で十字を切った。
「まあ、かわいそうに……」
みのりが、両のこぶしを口にあてた。
「まあ、それはともかく、一体ここはどこなんですかね」
これでもう数十ぺん目の問いを、山下は発した。立ちあがって周囲を見わたす。
「それと、いつなのかってことでしょ?」
くすっと笑って、みのりも立ちあがった。
未来なのか過去なのかもよくわからなかったが、それまで訪れた世界とは、どこか決定的にちがっていた。それが何なのか、具体的に言葉にすることはできなかったが、二人ともはっきりと感じていた。
どこまでも続くゆるやかな緑の丘。足元の芝生は、絨毯のように柔かい。その上、まるで誰かが絵画的効果を計算して植えたみたいに、茂みや林が点在していた。
陽光は肌にあたたかく、そよ風がどこからともなくいい香りを運んできた。自分たちがいつも吸っている空気とは、分子構造からしてちがうのではないか。そう思わせるほど、ここの大気は芳醇だった。
天に地に、とにかく平和的で牧歌的で、なんともいえず優しい雰囲気が、満ち満ちていたのである。

「すっごく、いいところねえ」
深呼吸していたみのりが、ため息と共に言葉を吐き出した。
一方、山下の方は、彼女ほど楽しい気分ではないらしい。しかつめらしい表情で、何事かを思い悩んでいる様子だった。
「まさか、とは思うけど……」
山下は小声で呟いた。
「ね。ちょっと、そのへんを歩いてみない」
みのりが、ぼんやりしている山下に呼びかけた。踊るような足どりで、どんどん先へ行く。
その後を追って歩き始めた山下は、ふと足元に目をやって、死ぬほど驚いた。
穴が消えている！
それまで、淡い螢光を放っていた量子シャベルのメーターも、今はまっ暗で、針も動いていない。

エネルギーが切れたんだ。
山下は慄然として立ちすくんだ。みのりは例の小っちゃなスコップを、とうにほうり出していたし……。

もう、帰れない。
自分の立っている場所が、足元から崩れ去っていくような、手ひどい絶望感に山下は襲われた。
「早くいらっしゃいよ、山下さあん」

みのりが、少しむこうで手を振っていた。山下は機械的に足を運びながら、熱病にうかされたような頭で考えた。

——ここは、エデンだ。まちがいない。そして、おれたちは……。

「さっきねえ、大っきなリンゴの木から蛇がぶら下がってたのよ。見た？　山下さん。その蛇、あたしにウィンクしたわ。でも、目の錯覚だったのかしら。んねっ、山下さん？」

無邪気にきゃらきゃらと笑いながら、みのりが話しかけてきた。

——彼女が、イヴ。

山下の頭の中で、みのりの笑顔が何重にもだぶって、ぐるぐる回り始めた。心なしか、画面がソフトフォーカスになったようだった。

「み、みのりさん！」

ひきつったような声で、山下が言った。

「え？」

笑顔のまま、みのりがふり返った。

「い、いいですか。落ち着いて、ぼくの話をよく聞いて下さい」

「なあに、山下さん。深刻な顔しちゃって」

山下はひとつ大きく深呼吸して、言った。

「びっくりしないで下さいよ。実は、ここは、**エデンの園**なんです」

「エデンって、あのエデン？」



「そう！　まちがいありません。ぼくたちは少しばかりタイムトンネルを長く掘りすぎてしまったんです」

「でも、エデンなら、アダムとイヴがいる筈でしょ？　どこかのゴルフ場じゃないの？」

無邪気な顔でみのりが言った。

「いや。いなくてあたりまえなんです。そうでなきゃいかんのです。な、なぜならば、ぼ、ぼくがア、アダ……」

口の中がカラカラに干上って、山下はしきりにどもった。

小首をちょっとかしげた格好のまま、みのりは次の言葉を待っている。

その時だ。

ガサッ。

二人のそばの茂みが音をたてた。

「きゃっ……！」

みのりが、まっ赤になって両手で顔を覆った。

素っ裸の男女が、手をとり合って茂みから出てきた。

当然のことながら、彼らにはへそがなかった。

5

「いいこと？　この木の実を食べちゃダメよ！」
みのりが言った。
「無駄ですよ、みのりさん。言葉だってわかりゃしないんだから」
うんざりしたような声で、山下が言った。山下の上着とシャツを腰にまきつけられたアダムとイヴは、意味もわからず、きょとんとみのりを見つめている。純粋無垢という形容がぴったりの笑顔だった。
「だけど、ここから人類の不幸が始まったんだって、あたし聞いたことがあるわ」
みのりが口をとがらせた。
「ええ、まあ、そりゃそうですけどね」
山下はガリガリと頭をかいた。
「だけど、今はここからどうやって帰るかを考えた方が……」
「どうやってって、タイムトンネルは？」
「消えちゃいましたよ。エネルギーが切れたんじゃないんですか？」
「え〜〜〜ッ！」
みのりは一声叫んで、あたふたと時穴のあった場所へかけ戻った。何もない地面を見て、へたへたと尻もちをつく。
「いや〜〜〜ん」

みのりの瞳が、みるみるうるんできた。
──アダムとイヴは一組しかいなかった、とは聖書のどこにも書いてなかった筈だ。
みのりの後ろ姿を見つめながら、山下はうすらぼんやりともの想いにふけっていた。
その足元が、いきなり陥没した。
「うわっ！」
山下は、突如出現した穴に落っこちて、したたか腰を打った。
「明日はどっちだ〜〜〜ッ！」
山下と入れ替りに、大声でわめきながらヤブキがエデンの園にとび出してきた。みのりは目を丸くして叫んだ。
「ヤブキさん！」
「おや、あの時のお嬢さん」
ヤブキはニコリともせずに言った。あたりを見回しながら、
「どうやら、また見当ちがいの場所へ出てしまったようです」
「でも、おかげで助かったわ」
みのりがニッコリ微笑んだ。
「あんたの方向音痴に感謝するよ」
ずりずりと穴からはい出しながら、山下が言った。疲れ果てた声だった。
「さあ、みのりさん。いい機会だ。もう帰りましょう」

「でも、特ダネは？」
山下はぶるぶるっと体をふるわせた。
「六階から飛びおりた方がましですよ」
「おかしい。どこでまちがったのだろうか」
ヤブキはしきりと首をひねっていた。
これら一連の馬鹿騒ぎを、ポカンとして眺めているアダムとイヴに、みのりが呼びかけた。
「じゃ、あたしたちは帰るけど、さっきも言ったように、そのリンゴだけは食べちゃダメよ。いいわね？ わかったわね？」
と、念を押して、時穴にもぐりこむ。その後に、ヤブキが口の中でブツブツ言いながら続いた。
時穴が閉じた。
アダムとイヴは、しばらくの間（人間の感覚にして十日近く）その場に立ちつくしていた。覚えていられないくらい昔から、ここに住んでいるが、あんなおかしな生き物は初めて見た。体のまわりに妙なものをまきつけて。
それに、小鳥のようにさえずっていたピンクの色の方は、一体何を言っていたのだろう。しきりとこの木を指さしていたが。
アダムは、背後のリンゴの木をふり返った。赤い果実が枝をたわませるほど実っていた。——そういえば、この木の実は、まだ食べたことがなかったな。と、アダムは思った。いつも蛇がいたし、食べるものなら他にいくらでもあったからだ。

アダムはリンゴの木から、かたわらのイヴへと目を移した。イヴも同じことを考えているらしい。

二人はしばらく見つめ合った。（人間の感覚で、ひと月がすぎ去った）。

好奇心のまさったイヴが、まずリンゴに手を伸ばした。そして、アダムも……。

かくして人類は、不幸への坂をころげ落ち始めたのである。

＊

「とにかく、くたびれましたね」

豪田家の応接室のソファに、ぐてーと座りこんだ山下が、半ば天井にむかって言った。

「でも、とっても楽しかったわ」

みのりが答えた。

「まあ、ある意味では楽しかったと言ってもかまわないような気がしないでもありませんがねえ」

山下は、これ以上はないというくらい、あいまいにうなずいた。

ヤブキの掘ったタイムトンネルを通って、二人が無事、元の猫ヶ丘に戻って来た時には、すでに夕方近かった。ヤブキは、すぐにまた別のトンネル掘りへと邁進していった。

「今、お夕飯の用意をさせるから、ちょっと待っててね。――アレックス！」

みのりが応接室を出て行った。

「ふう……」
なんとはなしにため息をついて、山下は煙草を取り出し、口にくわえた。
「火、火……」
あちこちのポケットをさぐっていた山下が、ふと手を止めて虚空を見つめた。
——何かを忘れているような気がする。何だろう……？
しばらくそのままの姿勢で考えていたが、どうしても思い出せない。山下は肩をすくめ、ジーンズの尻ポケットからくちゃくちゃの紙マッチを取り出し、たった一本残ったそれで煙草に火をつけた。
煙を吹き出しながら、山下は部屋のすみに置いてあるスリー・ヴィジョンのスイッチをほとんど無意識の内にひねっていた。——夕方のニュース帯。長年しみこんだ記者根性がそうさせたのだ。
画面の中で、アナウンサーが興奮しきった声で、いきなり喋り始めた。マイクに食いつきそうな形相をしていた。
『——ました。現在、自衛隊の出動が待たれておりますが、ＴＯＫＩＯメガロポリス中心部は、未曾有の大混乱に陥っております。ごらん下さい！』
画面が切り替った。山下はあんぐりと口を開けて、３・Ｖに見入った。煙草が下唇にはりついて、だらりとたれ下がる。
映っているのは銀座だった。四丁目の交差点だ。いつもならたくさんの人でにぎわっていると

ころだが、今日はちがった。人っ子ひとりいない。そのかわりといってはなんだが、ティラノサウルスとトリケラトプスとアロサウルスが、派手な叫び声をあげながら三つ巴の死闘を演じていた。

『——した原因は、全く不明ですが、現在なおも恐竜たちは、ぞくぞく出現しており……』

画面は次々と切り替った。

皇居前広場をブロントサウルスが、悠然と歩いていた。その前景を、カンガルーに似たオルニトレステスの群れが、かけ足で横切っていった。東京タワーのまわりを、数匹のテラノドンが旋回していた。神宮の森では、数頭のブラキオサウルスが、のんびりと草を嚙んでいた。そのうちの一頭の首っ玉に、何かがしっかりとしがみついているのが見えた。

「サ・ト・ル……！」

発狂しそうな目をした山下が、のどの奥からきしるような声を出した。

「あら。サトルさん、見つかったの？」

いつのまにか戻ってきていたみのりが、山下の背中に声をかけた。

「東京が……」

山下は、3・Vを指さしながら、やっとそれだけ言った。

「大変ねー」

みのりは、あっさりとうなずき、そして言った。

「でも、よかったじゃない、山下さん。——特ダネができて。うふ♡」

みのりは、にっこりと、それは可愛らしく微笑んだ。

TOKIOメガロポリスの機能マヒは、その後約一ヶ月間続いた。死者二百八名、重軽傷者約一千名。有形無形の被害総額は一兆クレジットにのぼり、その年の日本のGNPは〇・三パーセント下降した。

第三話　とっても素敵な電送人間

1

「なるほど」
WMA（世界マッドサイエンティスト協会）の特別試験官、J・D・マクドナルド博士は、にこりともせずにうなずいた。TV電話の画面の中で、細い銀ぶちの眼鏡がキラリと光る。生まれてから一度も笑ったことがないような顔つきは、どこかの国の警察長官を連想させた。
「すると、電送装置の準備はできたわけだね、ミス・みのり」
「はい。マクドナルド博士」
「規定によって、一級電送試験の対象は〝人間〟と決められておるが、そっちの方は大丈夫なのかね？」
「えっと……」
みのりはちょっと考えこんだ。人間の電送。これはマッドサイエンティストになるための必修課題の一つである。未だ仮免許のみのりとしては、何としても合格したいところだ。――誰

か協力してくれそうな人は……？

「あっ、いまナ！」

みのりは明るい顔になって言った。

「まかしといて下さい。二人ほど心あたりがありますから」

「それは結構」

＊

翌日――

「へえ、これが物質電送装置ですか」

心あたりの内の一人が、のんびりした声で言った。

「全部みのりさんが作ったんでしょ？　いやー、たいしたもんだなあ。ねっ、先輩？」

「う？　ああ……」

山下が生返事をした。どこか不安気な様子で、みのりの電送装置を眺めている。

五メートルほどの間隔をおいて並んでいる、二つの円形ステージ。天井にもそれぞれに対応するグリッドが取り付けられている。両方のステージからは、おびただしい数のケーブルが流れ出し、ガラクタをよせ集めて作ったような手前の制御卓に、ごちゃごちゃと接続されている。お世辞にも、洗練された造りとは言えない。

みのりは最終チェックでとび回っている。

山下のとなりで、その姿を黙って見守っていたマクドナルド博士が、不意に口を開いた。
「電送装置の実験というのは、いつでもスリルに富んでいる」
まるでひとり言のように、マクドナルド博士は前を向いたままで言葉を続けた。山下は首を回して、博士の厳粛な横顔を見つめた。
「試験官として十六年間、私はこれまでに三百件以上の電送実験に立ち会ってきたが、その一つ一つを今でも克明に思い出せるほどだ。人間がすっかり裏返しになって電送されてしまったスコットランドでの事件。一見正常に見えたが、よく調べてみると左右が逆になっていたアトランタでの例。その他にも上下が逆になっていたり、手足の位置がずれていたり、数がちがっていたり……。どういうわけか、耳の数だけが増えて、頭の両側に木くらげみたいに六つずつくっつけて出てきた例もあった。これはなかなか不気味だった」
マクドナルド博士は、表情を全く変えずに淡々と言った。一様に白茶けた顔をして博士の言葉に聞き入っていた山下とサトルは、ごくりと唾をのみこみ、お互いの顔を見合わせた。二人はそれぞれ頭の中で、相手の顔に五組の余分な耳をつけ加え、身ぶるいした。
「これが動物を使う二級試験となると、枚挙にいとまがないほどだ。——体の両端がどちらも首というダックスフントがいた。今でもモスクワにまだいると思うが、二匹のダックスフントを電送したら、まぜこぜになって上半身同士がくっついてしまったのだ。ずいぶん歩きにくそうだったが、それでも、下半身同士の組よりは、いくぶん幸せだったろうと、私は思う」
相変わらず前を向いた格好のまま、マクドナルド博士は、深くうなずいた。山下とサトルもう

なずいた。
「こういうこともあった。ある初心者マーク付きのマッドサイエンティストが、トラ猫を電送した。猫は無事生還したが、どこかへ縞模様だけを、すっかり置き忘れてきていた。次に彼はウサギを使った」
マクドナルド博士は言葉を切り、ふっと息を吐き出して言った。
「見事なトラ縞のウサギができあがった。——同じ試験官の友人は、電送されたワニが、ハンドバッグになって出てくるところを、目撃したこともあるそうだ」
サトルが山下の耳に囁いた。
「ぼくは、人皮のハンドバッグにだけは、なりたくないですよ、先輩」
「そりゃあそうだろう」
山下が囁き返した。
「お前なら、十分ボストンバッグになれる」
そう言って、山下はマクドナルド博士の方へ向き直った。何かを訊こうとして口を開きかけ、もう一度サトルに視線を戻す。そして、サトルの全身を上から下までじろじろ眺めまわし、つけ加えた。
「それに、ショルダーバッグがあと三つは作れる」
「冗談じゃないですよ三つだなんて。いくらぼくだって、せいぜい二つがいいとこですよ！」
口をふくらませて抗議するサトルを完全に無視して、山下はマクドナルド博士に問いかけた。

「だけど、そのう、そういうことは、めったにないんでしょ？　ドクター・マクドナルド」
「確かに」
「それに、みのりさんは、優秀なマッドサイエンティストだ。電送なんて、もう何度もやってお手のものですよね？　ほら、その二級試験とか？」
マクドナルド博士はゆっくり首を回して、すがりつくような表情の山下とサトルの顔を、じっと見つめた。博士の瞳の中には、心なしか憐れみの色が浮かんでいるようだった。
「いいや」
と、博士はかぶりをふった。
「彼女はこれが初めてだ」

2

「お待たせ——」
顔青ざめている山下たちのところへ、にこにこしながらみのりが戻ってきた。最終チェックは終ったらしい。
「ごめんなさいね、せっかくの日曜だっていうのに」
「いや、そんなことはどうでもいいんですけどね……」

山下が答えた。

「それよりも、あの、みのりさん……？」

「ほんっと、助かるわ」

みのりは山下の言葉に、おっかぶせるように、うれしそうな声で言った。

「じゃ、二人ともこれ持って」

みのりはスプレー缶を二人に手渡した。自分も一箇持ち、マクドナルド博士もいつのまにか、同じものを手にしている。

「なんスか、これ？」

サトルが、目を丸くして訊ねた。

「殺虫剤」

みのりが簡潔に答えた。

「殺虫剤？　いったい殺虫剤なんかをどうしようっていうんです？」

「今にわかるわ」

みのりは、くすっと笑って言った。

「あー、ところで、みのりさん？」

山下が、ためらいがちに声をかけた。

「この物質電送装置なんですけどね、あー、気を悪くしないで下さいよ。いや、もちろんぼくはみのりさんの腕を、心から信用していますけどね」

地獄に落ちたら、きっと鬼に舌を抜かれるだろうなと思いながら、山下は言った。
「そのー、つまりー、大丈夫なんですか？　だってほら、初めてなんでしょ？」
「そうよ。誰だって二回目から始めることなんて、できない相談でしょ？」
みのりがすまして答えた。
「それに、おとついやった予備実験では、ちゃんとうまくいったんだもん。何も心配することないわよ」
「予備実験？　何を電送したんですか？」
「これ」
みのりは、すぐそばのイスの上に置いてある物を指さした。
「これって……ぬいぐるみ？」
「どこもおかしいとこないでしょ？」
大きなチャウチャウのぬいぐるみを手にとって、山下は仔細に調べてみた。確かにどこもおかしくない。
「ただ、ぬいぐるみと人間じゃ、扱う原子の数が全然ちがうのよ。複雑さだってそう。人間の体ってねー、だいたい五十兆くらい細胞があって、その細胞の一つ一つが、これまた百兆個くらいの原子でできてるわけ。手持ちのコンピュータじゃ、容量が足んなくって、とにかくもう家中からコンピュータの付いてる物ならなんでも集めてきて、徹夜で接続したんだからあ」
苦労したのよお、と言わんばかりの目で、みのりは山下を見あげた。

制御卓の足元付近にごちゃごちゃとかたまっているガラクタが、どうやらその苦労のあとらしかった。――あそこに見えるのはどうやらシンセのキーボードらしいし、レジスターとワープロの陰に半分かくれているのは、(なんてこった)TVゲームだ。

やれやれと山下は首をふった。

「じゃあ、そろそろ始めるかね」

マクドナルド博士が、みのりに言った。

「そうですね」

みのりは、山下にうなずきかけた。

山下はサトルに視線を移した。

サトルも同じようにして、後ろをふり向いた。しかしそこには、当然のことながら、誰一人いなかった。

「えーと」

サトルはとぼけることにした。

「サトル……?」

山下が静かに呼びかけた。

サトルは、サトルってのは一体どこのどいつだという顔をして、あたりをきょろきょろと見回した。

「おれは、やさしく言ってるんだよ?」

山下は、すっと目を細めて、サトルを睨みつけた。みのりとマクドナルド博士も、彼を無表情に見つめている。

合計六本の視線の圧力に耐えかねたように、サトルは二、三歩あとずさった。両方の掌をこちらに向け、丸顔の右半分と左半分を、別々に痙攣させる。――笑っているらしい。

「で、で、でも――」

サトルは、しきりと唾をのみこみながら言った。

「ま、万一、失敗したら……？」

「一番大きな花輪を贈ってやるよ」

山下がきっぱりと言った。同時に、みのりとマクドナルド博士も深くうなずいた。サトルの顔がさらにゆがんだ。

「く、郷里の母が……」

「その点は心配するな」

山下は、どこか芝居がかった仕草で片手をつき出し、サトルの言葉をさえぎって言った。

「見舞金がたっぷりつくように、おれが会社にかけあってやろう。それにな……」

山下はサトルに近づくと肩に手を回し、彼の耳に何事か囁きかけた。サトルの目が大きく見開かれる。

「本当ですか？」

「おれが一度でも、嘘を言ったことがあるか？」

サトルは山下の顔をじっと見つめ、それからくるりとふり返って、みのりに元気よく声をかけた。
「さあ。始めましょうか。ぐずぐずしてたら日が暮れちゃいますよ」
一人ですたすた電送ステージの方へ歩いていくサトルの後ろ姿を、あきれたような顔で見送っていたみのりが、山下をふり返って訊ねた。
「いったい何て言ったの?」
「サトルはぼくに昼飯代をずいぶん借りてましてね」
山下は軽く肩をすくめてみせた。
「そいつを棒引きしてやるって言ったんですよ」
「よっぽどたくさん借りてたのね」
みのりが、こくんとうなずいて言った。　　そう。自分からすすんで電送実験の一番手を引き受けようとするくらい、たくさんね。山下は胸の中で、そっとつぶやいた。
右側のステージに、緊張感で顔をこわばらせたサトルが、直立不動の姿勢で立った。ちょっとでも動いたら最後、命はないと思いこんでいるような格好だった。
みのりがマスタースイッチを入れ、装置が生き返った。ハム音が次第に高まり、コントロールパネルのライトが、めまぐるしく明滅した。マルチディスプレイが、さまざまのデータを映し出す。
「パワー、OK、同調(シンクロ)、OK」

みのりが、計器を一つ一つ確認する。
「じゃあ、行くわよ。準備はいい？　サトルさん」
「は、はいっ」
ぎゅっと目を閉じて、サトルが叫んだ。――準備というよりは、覚悟はいいかと聞くべきだろうな。山下はふと思った。その時、マクドナルド博士がいきなり前へとび出して、ステージの上のサトルめがけて、殺虫剤を思いきりスプレーした。
「な、なにをするんですか！」
ゴホゴホとセキこみながら、サトルが抗議した。博士は空中を指さした。
「見たまえ、ハエだ」
「あら大変」
みのりも制御卓をはなれ、スプレーでくだんのハエを追いまわした。実験室の中は、殺虫剤の甘ったるいような匂いで、むせかえるほどになった。
「危ないところだったわ」
ハエ退治を終えたみのりが戻ってきて、真剣な表情で山下にうなずきかけた。念のためといった感じで、時々空中に殺虫剤をまき散らしながら、制御卓の前に座る。
「もう少しで、サトルさんが〝怪奇ハエ人間〟になるところだったのよ」
「ハエ人間……」
サトルが小声でつぶやき、世にもなさけない顔つきになった。

「さっきは言い忘れていたが、電送実験で最も多いのがこの種の事故でね。昔からの伝統なのだよ」

マクドナルド博士が、横からつけ加えた。

「どういうわけか、人間を電送しようとすると、必ずどこからかハエだの、蚊だの、ネズミだのが現われる。そして、そのたびごとに、この世に怪奇蚊人間だの怪奇ネズミ人間だの、怪奇ゲジゲジ人間だの怪奇ナメクジ人間だのが一人ふえる勘定だ。——ひょっとしたら、電送装置が発する何らかの超音波のようなものに、ひかれるのかもしれないが……」

マクドナルド博士は、ファーストに牽制球を送るピッチャーよろしく、ふり返りざま手にしていたスプレー缶を投げつけた。電送ステージにはいのぼろうとしていたゴキブリが一匹昇天した。

博士は、落ち着き払って、こちらに向き直ると、鯖目になっている山下に二、三度うなずきながら、言った。

「どういうわけか、現われるんだ」

3

「いいですかー。いきますよー」

みのりが声をかけた。サトルがぎくしゃくとうなずき、マクドナルド博士はスプレー缶を構え

直した。
「三。二。一……はいっ！」
スイッチ・オンと同時に、うにょ〜〜〜んというような、奇妙な音が装置全体からわき起こった。体の床と天井のグリッドが淡いオレンジ色に輝き、サトルの全身がチカチカとまたたき始めた。サトルの輪郭がぼやけ、音楽がフェイド・アウトするように、サトルの姿は台上から消え失せた。サトルのいた空間に、金色のわずかなきらめきが少しの間残っていたが、それもすぐに消え、グリッドが暗くなった。
「今、あの若者はどこでもない場所にいるのだ。原子に分解され、電子的なパターンとなってコンピュータの内部で、再構成されるのを待っている」
重々しい口調で、マクドナルド博士が言った。
——今、コンセントを引っこぬいたら、いったいどういうことになるんだろう？　山下は疑問に思った。
みのりは、びっくりするくらい真剣な表情で、マルチディスプレイを見つめ、微調整レバーをあやつっている。
山下は小声でマクドナルド博士に訊ねた。
「うまくいってるんですか？」
「装置の設計はまちがってないようだし、ゴキブリもカマドウマもまじらなかった。今のところはね」

「受容完了。これより反転に移ります」
うにょお〜〜〜。再び例の音が始まった。もう一方のグリッドが輝き、空中に金色のきらめきが現われる。そして――
電送は完了した。
グリッドが暗くなり、電子音も消えた。
今は物音ひとつしない。
耳の奥が痛くなるほどの静寂が、実験室をずっしりとおおっていた。
三人の視線は、台上に出現したそれに釘付けになったままだ。
誰も最初に口を切る勇気を持たなかった。
それは、しばらくの間、とまどったように目をパチパチさせていたが、山下の姿を見つけると、うれしそうに歯をむき出した。
そして馬が口をきいた。
「やあ、先輩。どうやらうまくいったみたいですね？」

*

「鍵はちゃんとかけておいたのよ」
みのりは、いく分か言い訳がましい声で訴えた。
「いくらなんでも、ドアのすき間から馬が入ってくることなんて、考えられないわ！」

「ぼくも、馬が入ってくるとこは見なかったな」
山下がうなずいた。
「だけど、ひょっとしたらこの部屋には百年くらい前から馬が住んでて、ぼくたちがそれに気づいてなかっただけなのかも知れないな」
「そういう冗談は北千住で言ってくれ」
マクドナルド博士が、苦々しげにさえぎった。そしてみのりを冷たい目で見つめた。
「これはどういうことなのだろうね、ミス・みのり?」
「えと、あの……。たぶん、どこかこの近所で誰かが馬を電送してて、その信号を偶然あたしの装置がひろっちゃったんじゃないかと……」
「どこの誰が、馬なんか電送するんだ?」
山下が素っ頓狂な声をはりあげたが、マクドナルド博士に睨みつけられて、あわてて首をすくめた。
「じゃあこれは、ただの事故だというんだね?」
「ええ。だって装置は完全に作動してたんですもの。もう一度、逆に電送し直せば、フィルターが夾雑因子をとりのぞいて、きっと元に戻るはずです」
「よろしい。やりたまえ」
マクドナルド博士は、チラリと電送装置の方へ視線を走らせて言った。
「あれをなんとかできれば、合格ということにしよう」

部屋のすみっこにかたまって、小声で話し合っていた三人は、いっせいにふり向いて元サトルだったものを見つめた。
ステージの下では〝怪奇馬人間〟が、よよと泣き崩れていた。
三人が近づいて来る気配に首をあげた丸顔のサラブレッドは、茶色の大きな瞳を向け、いささか明瞭さを欠く発音で言った。
「どうなんですか、先輩〰〰。ぼくは元に戻れるんですか？」
「大丈夫。あたしにまかせといて」
みのりが代わって答えた。どんと胸を叩いてみせる。山下が気楽な調子で言った。
「そんなに心配することはないさ。元に戻れなかったら、ダービーで稼げるじゃないか。総大理石張りの豪勢な厩舎に住み、クリスチャン・ディオールの鞍をつけ、毎日ワラを腹いっぱい食うんだ」
「そうなったら、あたしうんと応援するわ。馬券だって、お小遣いはたいて買っちゃう！」
みのりがはしゃいだ声で言った。どうやらサトルをはげまそうとしたらしい。馬は大きなため息をつき、よけいにうなだれた。
それを見て、みのりは台所から山ほど野菜をかかえてきた。
「元気だしなさいよ。ほら、にんじんあげるから」
「にんじんは嫌いなんです」
馬は首をふった。

「できればそっちのレタスを……。あっ、ドレッシングかマヨネーズ、ありますか？」
いかなる情況においても、食うことに関しては熱心なサトルであった。
大きなザルに山盛りの野菜を、きらいなはずのにんじんまでも一本残さず、ぺろりとたいらげてしまうと、サトルは少し元気をとり戻した。
カッカッと床を鳴らしながら、実験室の中を右に左に歩き回る。
「気分はどうかね？」
マクドナルド博上が、専門家の口調で訊ねた。
「上々とは言えませんけどね。でも思ったほど悪くはないです。なんか力がみなぎってる感じで、どこまでも走って行けそうな……」
サトルは急にさお立ちになると、かき足をしながら、ぶひひひひといななないた。
「どうどうどう」
山下が鼻面をおさえる。みのりが何気なさそーに呟いた。
「そう言えば、あたし前からいっぺん馬に乗ってみたかったのよねー」
「あっ、いいですよ。みのりさんなら喜んでお乗せします。そのへんをひとっ走りしてきましょうか？」
マクドナルド博士が、さりげなくセキ払いをした。
「えーと……、それはやっぱり、またこの次にしましょ。今はほら……ね？」
博士の方を横目でうかがいながら、みのりが言った。

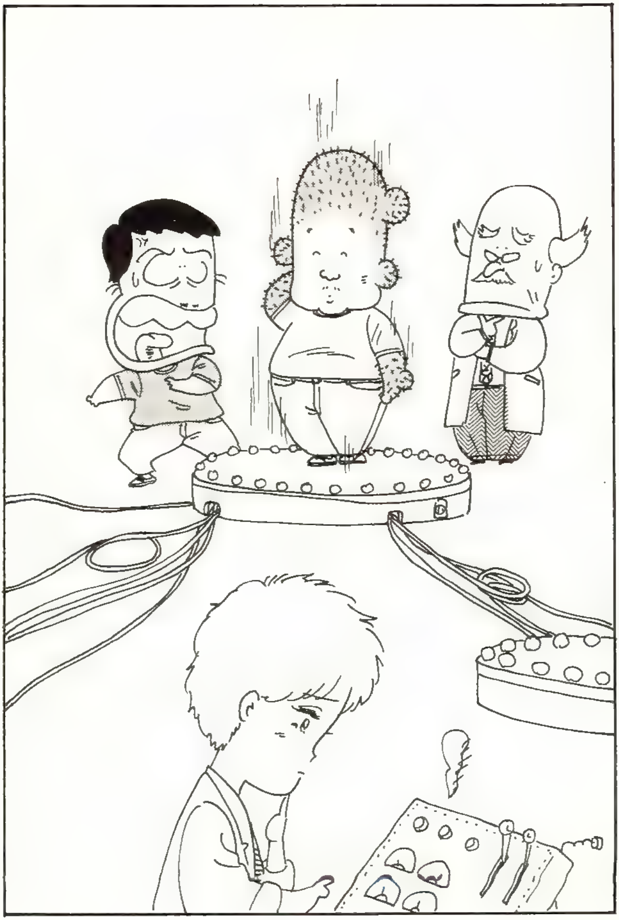
「そうですね」
いささか残念そうに、サトルもうなずいた。
——あいつはいったい〝この次〟って言葉の意味がわかってるのだろうか。と、山下は思った。
その時サトルが妙な声を出した。
「あれあれー。こいつは弱ったぞ」
「どうした?」
「いや。なんて言うか、この馬の考えてることが、ぼくにはわかるんですよね。そのお、ぼくたちはつまり、重なり合って存在してるわけですから」
「それがどうした」
「ちょっと、トイレ……」
「それは大変だ!」
三人はいっせいに叫んだ。
みのりは大あわてで制御卓にむかい、装置の再調整を始める。
「落ち着け!」
「がまんするんだ!」
山下とマクドナルド博士は、口々に叫びながら、馬を電送ステージの上へ押しあげた。
「は、早く!」
ひきつったサトルの声が、馬の口からとび出してくる。

「まだうまくコントロールできないんだ。このままじゃ馬が勝手にしちゃうよオ」
「パワー・オン！」
うにょ〜〜〜と電送装置が作動を開始した。高々と尻尾をあげたままの格好で凍りついた馬の姿が、金色の光のシルエットと化し、……消えた。実にきわどいタイミングだった。
「ふう……」
三人の口から同時に、ため息がもれた。
システムが反転した。
もう一方のステージに光が現われた。徐々に輪郭がはっきりしてくる。ちゃんと人の形をしているようだ。山下が言った。
「よし。今度はうまくいったみたいだぞ」
三人の顔が期待に輝いた。
電送が終了した。
実験室は再び、しんと静まり返った。
長い長い沈黙のあとで、何かをとりなすような口調で、山下が言った。
「まあ、とにかく、馬はとりのぞけたんだから、半分は成功と言ってもいいんじゃないですかねえ」
苦虫をかみつぶしたような顔で、マクドナルド博士はしぶしぶうなずいた。
「その点は評価しよう」

ちらとみのりを見る。みのりは首をすくめた。博士はほとんど叫ぶような声で言った。
「だが、あれは一体何なんだ？　あの化け物は？」
「ぼくの考えでは」
と、山下が静かに答えた。
「たぶんサボテンだと思います」

4

ごつごつした緑色の膚、鋭いトゲ。サトルは〝怪奇サボテン人間〟そのものだった。
「馬の次はサボテン」
マクドナルド博士が、ゆっくりと左右に首をふりながら言った。あきれはてたような口ぶりだった。
「さすがの私も、こんな経験は初めてだ。いったい、どうやったらこんなことが出来るのか、後学のために、ぜひうかがいたいもんだね」
「えと、あのその……、通りがかりのサボテンがァ、きっと鍵穴か何かから入ってきてェ……」
しどろもどろになって、みのりが言った。
「サボテンというものはね、ミス・みのり」



マクドナルド博士は、気味の悪いくらいおだやかな声で言った。
「普通、通りがかったりはしないものなんだよ」
「えーと、それじゃ、あの、あの……」
「ぼくは、サボテンの呪いだと思いますね」
山下が新説をとなえた。
「サトルの実家は園芸屋をやってましてね、ひいじいさんか何かが、その昔虐待したサボテンの恨みが、今頃んなって現われたんじゃないかと」
「本当かね？」
と、マクドナルド博士。サトルは、とげだらけの顔をうなずかせた。口を開くと、中はぞっとするような真緑色だ。
「ええ。でも、うちはバラが専門ですからねえ。その前は、もっぱら菊でしたし……」
と、考えこむ。
右の頬に、綿毛につつまれた小さなつぼみが、ひとつ芽を出していた。腕組みをしたサトルが、うーんと唸ると、つぼみは目に見えて大きくなった。
「あっ……」
みのりが小さく叫んだ。
三人がじっと見守る中、サトルの額の上でつぼみはぐんぐん成長し、やがてぽっかりと花を開いた。闇の底に咲くような白く大きな花で、黄色い花芯から、なんともいえぬよい香りが漂って

くる。

「やっぱり、どう考えてもサボテンの恨みをかうような覚えはありませんねえ」

顔をあげて、サトルが言った。額の花が、ゆらゆらと揺れた。

「とっても、すてき……♡」

みのりが、うっとりとつぶやいた。

「は？」

二人の視線にとまどったように、あいまいな笑いを口元にへばりつけ、サトルが訊き返した。

「すてきって、ひょっとしてぼくのことですか？」

「ううん」

みのりが、あっさりとかぶりをふる。

「その花……」

「花？――ありゃ。いつのまに」

サトルは、上目遣いに額の花を見て言った。

「だけど、こんなしろものならいくらでも咲かせられますよ。見てて下さい」

サトルは頬をふくらませ、うんと力を入れた。顔の緑色が濃くなる。

と見る間に、頭のてっぺんとか鼻の先からつぼみがふくらみ、ぱかぱかと花が開いた。十箇以上あった。

「ふう。どんなもんです」

花だらけになった顔で、サトルはにこにこ笑った。
みのりが、きゃっきゃ言って喜んだ。
「こんなこともできますよ」
調子に乗ったサトルは、右腕をぐいと折りまげた。力コブのできるあたりに、花が二、三箇まとめて出現した。
「いっそのこと、ずっとそのままでいるか？」
山下が冷たく言った。
「飯を食うこともいらないし、喫茶店あたりにレンタルに出れば、けっこう人気も出るぜ」
「そんなあ、先輩〜〜〜」
サトルが、あわれっぽい声を出した。とたんに花もしおたれて、茶色く縮んでしまった。
「とにかく、もう一度電送し直してみるしかないだろうな」
マクドナルド博士が、渋い顔で言った。
「外からの影響を受けないように、部屋のシールドを二重にしてやってみるんだ。考えにくいことだが、また近所で誰かが、偶然サボテンを電送していたのかもしれんし……」
自分でもあまり信じていない口ぶりだった。
「じゃ、行きまーす」
みのりが声をかけた。
三たび電送ステージに立ったサトルは、山下たちに手をふってみせる余裕さえあった。

電送が終った。
実験室に、強い硫黄の匂いがたちこめた。
「あ、悪夢だ……」
山下がつぶやいた。
マクドナルド博士が、目をつりあげて怒鳴った。
「いかん！　すぐに反送しろ。ステージがこわれるぞ！」
「はいっ！」
ステージの上から、その巨大なものが消えていった。
「あれは何だったと思うね」
マクドナルド博士の問いかけに、山下はうつろな笑いを返し、肩をすくめた。博士は髪の毛をかきむしって叫んだ。
「畜生(クライスト)！　まちがいない！　さっきのは〝竜〟だった。しかも、西洋のおとぎ話にしか出てこない、ウロコだらけで背中に小さな羽根の生えた、あのドラゴンだ。馬やサボテンならまだしも、どうして架空の生物でしかない物までが……」
博士は、勢いよくみのりに向き直った。
「ミス・みのり。どうやらこの装置には、致命的な欠陥があるようだ。それがどんな欠陥なのかは見当もつかんが、とにかく、残念だが君の成績は……」
「ちょっと待って下さい。マクドナルド博士。なんだか、あたしこの全ての原因がわかるような

気がするんです」
「ほう。いったい……？」
マクドナルド博士が眉をつりあげた。その時、山下がとんでもない大声で叫んだ。
「うわ〜〜〜！　なんだなんだ、あれはなんだ！」
電送ステージの上に、直径二メートルほどもある、アドバルーンのようなものが出現していた。色はまっ黄色だ。中央付近に横一直線の口が、まるでスイカを一片だけ切り取ったみたいに開いており、その上に目玉が二つ。馬鹿げた姿をしているだけに、よけいに薄気味の悪い存在だった。
——だけど、おれはどこかで、これと同じものを見たぞ。山下は考えた。つい最近だ。
その黄色い球体は、ステージの上からふわふわと漂いおりてきて、三人の目の前でぴたりと止まった。
「今度は、ぼく一体何とまじっちゃったんですか？」
「思い出した！」
「わかったわ！」
山下とみのりが、同時に叫んだ。
「パ、ッ、ク、マン！」
「スーパー・8（エイト）！」
わけがわからんという顔つきのマクドナルド博士に、みのりが早口で説明した。
「スーパー・8（エイト）なんです。八種類のシミュレーション・ゲームが楽しめるパソコンで、確か電送

装置のシルエット・コントロールに代用したと……、ああ、やっぱりそうだわ！」
みのりは回路をチェックし直して歓声をあげた。
「ほら見て下さい。ここんとこ。ね？　配線がメビウスしているわ！　だからゲーム機のおかしな情報が、再構成の時にまぎれこんじゃったのよ。こうして、元に戻せば、もう大丈夫。ねっ。マクドナルド博士。もう一度だけチャンスを下さい。今度こそサトルさんを、まともな姿に電送してみせますから」
みのりは瞳を輝かせ、熱心に言った。口を半開きにして説明を聞いていた博士が、かろうじてうなずいた。
「あ、ああ。いいだろう」
「わい♡」
みのりは手を打ち合わせてぴょんと飛びあがった。
「よかったですね、みのりさん」
巨大なパックマンが、空中でこくこくとうなずきながら言った。
「すると最初の馬ってのは、ゲーム1『スーパー・ダービー』の馬だな。しかし、次のサボテンが理解できない」
山下が、スーパー・8（エイト）の表示カードを見ながら、ぶつぶつと呟いた。みのりが言った。
「ゲーム2の『ガンファイト』よ、きっと。サボテンのかげから悪役ガンマンと射ち合いをするの。もち3Dの実写シミュレーション。すごい迫力よ。その後がゲーム3の『ドラゴン・スレイ

ヤー』ね。で、ゲーム4が三次元走路を使う『パックマン・II』。あとは『プラネット・アタック』『スペース・ファイター』『ジャングル・キッド』、最後が『麻雀』。実験が終ったらみんなでやりましょうよ。一人でも四人でもできるの」

「あっ、いいですね！」

元に戻れることがわかったサトルが、安心してバカ陽気な声を出す。

「それじゃ、サトルさん。スタンバって下さーい」

巨大なパックマンは、ぴょんぴょんとびはねるようにして、ステージにあがっていった。

「行きまーす。はいっ！」

うにょ〰〰んと電送装置がうなった。

5

結論から言ってしまおう。

サトルは元の姿に戻った。幸いにもと言うべきか、不運にもと言うべきかは、未だによくわからない。

とにかく、こういうことだったのだ。

ステージ上に実体化したサトルは、感激のあまり涙さえ浮かべながら、両手を拡げて叫んだ。

「先輩！　みのりさん！　ぼく帰ってきましたよ！　元に戻ったんです！」
その時、彼の背後で、何かがはじけた。
そして、山下は見た。
十二頭のサラブレッドが、大手を拡げたサトルを蹴り倒して、何もない空間から走り出してくるのを！　続いて二人のガンマンが、コルト・ピースメーカーを乱射しながら現われ、天井と壁を穴だらけにした。白騎士に追われたドラゴンが、一撃で実験室の壁をつき破って表へ逃げ出していった。点線をひいて空中を飛ぶターゲットの後を、パックマンが妙な音をたてながら追いかけてきた。『プラネット・アタック』の重爆撃機が、猫ヶ丘を絨毯爆撃し始めた。『スペース・ファイター』の敵味方合わせて十六機の戦闘宇宙船は超低空で激しいドグファイトを行ない、そこらじゅうにソニックブームをまき散らした。アフリカ象にまたがったジャングル・キッドがライオンやサイなどの猛獣軍団を引きつれて行進していき、最後に巨大な麻雀牌が現われ、役満の編隊を組んで飛び去っていった。
実験室はひどいありさまだった。天井も壁も、あらかた崩れ落ち、青空が見えていた。爆撃機も、戦闘宇宙船も、とっくにどこかへ飛び去ってしまい、上空を飛んでいるのはパックマンだけだ。
山下は、みのりと一緒にもぐりこんでいた大きなテーブルの下から、ごそごそとはい出してきた。
「やれやれ」

体についたほこりを払いながら、山下はあたりの惨状をながめ回し、ため息をついた。
「まさか、こうなるとは思わなかったわ」
みのりが言った。
「失敗、失敗」
自分の頭を自分でこつんとやって、照れくさそうに笑ってみせる。
二人の足元のガレキが動き、その下からマクドナルド博士が顔をのぞかせた。
博士は、口から大量の煙を吐き出すと、みのりをジロッと見て、言った。
「落第!」

*

事件から三ヶ月たち、ひづめでぺちゃんこにされたサトルも、松葉杖にすがれば、なんとか歩けるほどに回復した。
みのりは、まだ一級電送試験を、あきらめていない。

第四話　いつかアルキメデスが……

アルキメデス *Archimedes* 前二八七頃~前二一二。

ギリシアの数学者、物理学者。入浴中にアルキメデスの原理を発見したことで有名。その他にも、円、球、楕円などの求積法、梃の原理等を発見。——シラクサの戦いにおいて、ローマ兵に刺殺された。

1

「エウレカ（見つけた）！」
ひげもじゃの大男が、素っ裸で湯船から飛び出した。
「きゃっ」
みのりは思わず両手で顔を覆った。
指と指の間から、そうっと片目だけをのぞかせて、3D−TVの画面に視線を戻す。
「エウレカ、エウレカ、エウレカ！」
裸のアルキメデスは、ぴょんぴょんとびはねるように、シラクサの大通りを研究所へと走っていった。トーガ姿の人々が、あきれたような面持ちで、その後ろ姿を見送っている。
「こうして、アルキメデスの原理が発見されたのです！」
と、ナレーターの声。
「なるほどねえ」

馬鹿に感心した様子で、みのりはうなずいた。

金曜夜八時からの『実録・世界の偉人伝』は、タイムカメラによる歴史的名場面の生中継が呼び物の、人気番組だ。みのりも毎週欠かさず見るようにしている。

「アレックス！」

みのりは画面を見つめたまま叫んだ。助手ロボットのアレックスが、六本のマニピュレーターをエプロンでふきながら、居間に入ってきた。

『何カゴ用デスカ、オ嬢サマ』

「すぐにお風呂の用意をしてちょうだい」

みのりはふり返りもせずに言った。

「あたしも、みのりの原理を発見するんだから！」

実におそるべき短絡思考であった。

＊

「それで、三日間もお湯につかってたってわけですか。やれやれ」

山下は、ゆっくりと首をふりながら言った。みのりは、ベッドの上に半身を起こし、大きな枕を背もたれにしていた。ぶかぶかの青いしましまのパジャマを着ている。

「あら、何か言いたそうね、山下さん」

「いや、別に」

と、山下はとぼけた。
「それより、お風呂の効果のほどはどうだったんです？　何か収穫でもありましたか？　あー、その、ふやける事以外に」
「もちろん」
みのりは胸をはって答えた。
「いいおダシが、たっぷりとれたわ」
つんとすまして山下を見あげる。二人はほんの一瞬そうやって見つめ合い、それから同時にふき出した。
笑っているみのりのパジャマの襟元から、胸の曲線がちらりとのぞき、山下は大いにうろたえて視線をそらした。――意外とグラマーなんだな。壁紙の模様を仔細に点検するふりをしながら、山下はひそかに考えた。それとも、ふやけたところが、まだ元に戻ってないんだろうか。
「でも、たいしたことなくて、本当によかったですね！」
花瓶に花をいけていたサトルが、にこにことふり返って言った。
「倒れたって聞いた時は、びっくりしましたよ」
「アレックスったら大げさなのよ。ちょっと湯あたりしただけなのに、すっかり病人あつかいしちゃって……」
みのりはぷっと頬をふくらませた。それからにっこりと微笑んで、
「だけど、とってもうれしかったわ。わざわざお見舞いに来て下さるなんて。お仕事中なんでし

よ？」
「いや、仕事なんて……」
と、山下は鷹揚に手をふった。
「どうだっていいんです」
と、サトルがきっぱり断言した。その晴ればれとした表情には、一点の曇りさえなかった。心の底からどうでもいいと思いこんでいる顔つきだ。
——困ったもんだね。
山下は先輩としての義務感から、いちおう困った顔をしてみせた。
しかし、サトルはいっこうに平気で、山下が買ってきたチョコタルトの箱を開け、勝手にパクつき始めた。指についたチョコクリームをなめながら、
「ところでみのりさん。最近なんかおもしろい発明しました？」
「そうねえ……」
みのりが、片手を頬にあてて考えこんだ。
「あんまりおもしろすぎるのは願いさげですけどね」
過去の苦い経験を思い出しながら、山下が横から口をはさむ。
「そう言えば、一日中ベッドに寝てて思いついたことがあるわ。うん、そうよ」
みのりは、ひとりでこくんとうなずいた。
「何です？」

と、サトル。

「完璧な看護装置」

と、みのり。

山下とサトルが顔を見合わす。みのりが説明を加えた。

「だからね、ほら、何かと不自由じゃない、寝たきりって。そりゃあ、うちにはアレックスがいるけど、いちいちあれしてくれ、これしてくれって言わなきゃなんないし、第一すっごく退屈なのよ、こうしているのも。わかるでしょ?」

「だから?」

「だからァ……」

みのりは思わせぶりに言葉を切り、山下とサトルの顔を順々に見回した。そして、うふ♡と笑って、

「明日またいらっしゃいよ。それまでに作っておくから」

ベッドからおりようとするみのりに、サトルが心配そうな声をかけた。

「あっ。起きちゃって大丈夫なんですか?」

「へーきへーき。そうと決まったら、寝てなんかいられないわよ。——ううっ、マッドサイエンティストの血が騒ぐわ」

オーバーサイズ・パジャマの上だけという、色っぽいスタイルのみのりは、両腕を折りまげて、ガッツポーズをしてみせた。

山下はその瞬間、たとえ編集長をたたっ殺してでも、明日はここに来ようと、固く決心した。

2

翌日——

豪田家の玄関の前に立った二人の耳に、何やら奇っ怪なかけ声が、遠くから響いてきた。

「えい♡」

「やあ♡」

「とお♡」

二人は、しばらくその場に立ちつくしていた。

「なんか聞こえませんか、先輩」

サトルがようやく口を開いた。

「聞こえる」

山下がうなずいた。残念ながら、というニュアンスがたっぷりとこめられたうなずき方だった。

「どうも、みのりさんの声みたいですね」

サトルが言った。山下とサトルは、お互いの顔を、うすぼんやりと見つめ合った。

「とりゃ♡」

また聞こえた。
ようやく意を決した二人は、玄関を開け、勝手知ったる実験室への廊下を、足音を忍ばせて進んでいった。
扉のすき間から、中をのぞきこむ。
「こりゃ♡」
実験室の中央では、奇妙な形をしたヘルメットをかぶったみのりが、かけ声に合わせて何やらカンフーの型のようなポーズをとっていた。右手をつき出したり、片脚をけりあげたり、両手を体の前で直角に交差させて「しゅわっち♡」と言ったり。
「何やってんですかね」
サトルが首をひねりながら言った。
「おれが知るかよ」
山下が鋭く囁いた。
「そりゃ♡」
みのりがまたポーズを変えた。片ひざをつき、ぴんとのばした両方の人さし指と中指を、額のところにかざすというポーズだったが、それに一体どんな意味があるのか、山下にはさっぱりわからなかった。
「もう！」
ひと声叫ぶや、みのりはいきなり床に四つんばいになった。そして、腹を立てた猫みたいな格

好で、お尻をあげ「う〰〰っ」と唸りはじめたのである。
「うっう〰〰」
その鼻先に、小さなくまのぬいぐるみが置いてあることに、山下たちは初めて気がついた。
「ぬいぐるみのくまに、けんか売ってんですかね」
サトルが言った。山下は黙っていた。あえて否定するだけの自信は、彼にもなかったのだ。たしかに、みのりならそれくらいのことはやりかねない。それも、本気で。
一種の宿命論的な諦観に沈みこんでいた山下の耳に、突然、みのりのヒス声がとびこんできた。
「あったまくるわねー！」
と、彼女はわめいた。立ちあがり、ぬいぐるみのまわりをぐるぐる回りながら、お説教を始める。
「あんたねー、少しはやる気があるの？　あたしがこんなに一生懸命なのに、なんだってそういつまでもじっとしてるのよ！　どうして言うとおりできないの、この子は！　ほんとに聞きわけがないったら。――いいこと？」
みのりは、くまのぬいぐるみに、びしっと人さし指をつきつけた。くまは知らん顔をして座っている。みのりは言った。
「これが最後のチャンスよ。今度言うこときかなかったら、逆さ磔だからね。わかった？　わかったわね？」
と、念を押す。しかし、山下の見たところでは、くまのぬいぐるみは、あまりわかったような

顔はしていなかった。
　みのりは両手を腰にあて、大声で命令した。
「さあ、立ちなさい！」
　扉のところで中腰になって、室内をのぞいていたサトルが、思わず「はいっ」と返事をして立ちあがった。
　サトルの頭が山下のアゴを直撃した。

*

「やだ。ずっと見てたんですか？」
　みのりは、ぽっと頬を染めた。
「とりゃ♡ってところからですけどね」
　紅茶をかき回しながらサトルがうなずいた。山下はそのとなりでアゴをおさえている。
　応接間のテーブルの上には、ティ・セットと例のヘルメット。それに、みのりに言わせると〝強情な〟くまのぬいぐるみが置かれていた。
　下アゴを左右に動かして具合いを調べていた山下が、ヘルメットを手にとって言った。
「すると、これが完璧（くわんぺき）な看護装置ってわけですね」
　まだちょっと発音がおかしい。
「そ」

みのりがうなずいた。

「どういう仕組みになってるんです？」

「ようするに、ＰＫ増幅器（アンプリファイヤ）よ」

「ＰＫ？　ペナルティ・キック？」

サトルがクッキーの皿から顔をあげて訊ねた。

「阿呆。念動力（サイコキネシス）のことだ」

山下が言った。みのりに向き直って、

「なるほどね。これなら寝っころがったままで、何でもできる」

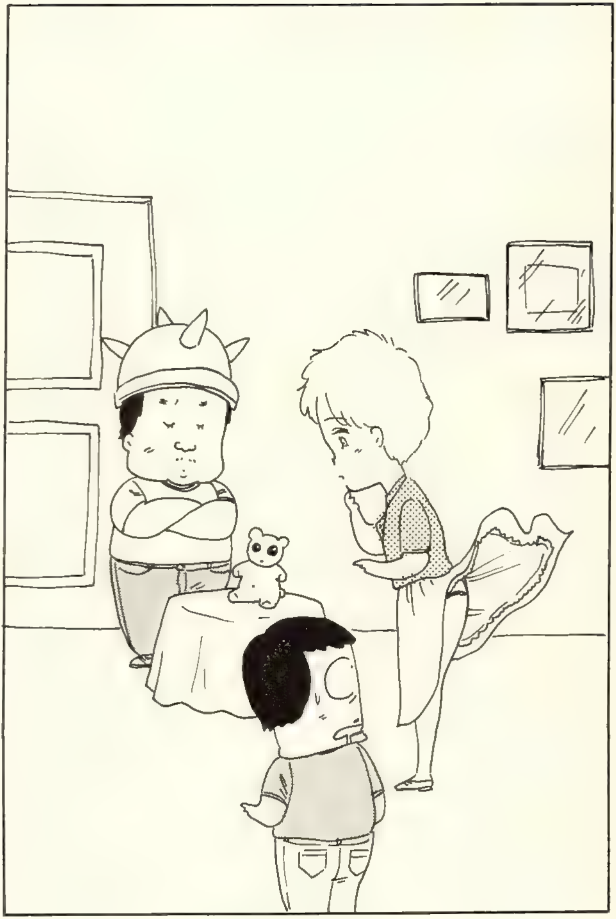
「でしょ？――人間って誰でも超能力を持ってるのよ。エスパーも普通の人も、潜在的な力の量は同じなの。ただ、うまく使えるかどうかのちがいがあるだけよ。生まれつき器用な人と不器用な人がいるのと、たいしてちがいはないわ。どっちも手は二本だし、指は五本、ちゃあんとそろってるわけ。超能力も同じこと。――この装置は、そうした人間が基本的に持っている潜在能力を、フルに引き出す、言わば一種の触媒みたいなもんなのよ。だから、どんな人がつけても、ちゃんと働く、はずなんだけど……」

お前が悪い！　というような眼で、みのりはテーブルの上のくまのぬいぐるみを睨みつけた。

「ふむ」

山下は手の中のヘルメットを、あちこちから眺めまわし、それからすっぽりと自分の頭にかぶせた。腕組みをして、ぬいぐるみを見つめ始める。息を止め、額のあたりに意識を集中して、ひ

たすら〝動け〟と念じる。だんだん顔に血がのぼってきて……。
「ぷは〜〜〜っ」
山下は一気に息を吐き出した。まるで長いこと水にもぐっていたみたいに、肩をあえがせながら言う。
「だ、だめだ。ぴくりとも動かない」
「へんねえ」
みのりは顔をしかめた。
「ちょっと叩いてみようかしら」
山下から受け取ったヘルメットの横っ腹を、みのりは二、三度ひっぱたいた。
「TVだと、これでうまく直るのよ」
その時、二杯目の紅茶に砂糖を山もりに入れていたサトルが、思いきりもったいぶった声を出した。
「先輩。みのりさん。そういうことは、ぼくにまかせておいて下さいよ」
受け皿ごと山下の手にティ・カップをおしつけると、サトルはみのりからヘルメットを受け取り、軽くうなずいてから自分の頭にかぶせた。
「どうも」
と、ティ・カップをとりもどす。おもむろにひと口すすり、おつに気取った講釈口調になって言った。



「こういうことは、気をらくーに持ってやらないと成功しないんですよ。何も考えないことが肝心なんです。雑念をはさんじゃ、うまくいきっこありません」
「なるほど」
山下とみのりが感心したようにうなずいた。サトルは気をよくして言葉を続けた。
「無念無想。この心境ですよ。おわかりですか？ 妙なポーズをとったり、白目を真っ赤にしていきんだりする必要はないんです。ただ、心を空にして、こうやって……」
サトルは不意に放心したような表情になった。まあ、元からそんな顔をしてはいたが……。
山下とみのりは、ごくりと唾をのみこんで、テーブルの上のぬいぐるみを見つめた。
ぬいぐるみは今にも動き出しそうな雰囲気だった。
応接間の空気が、急にその密度を増したように思えた。山下は、ズボンのひざで、両手の汗をそっとぬぐった。
目に見えぬ緊張感が次第に高まっていき、ぴんと張りつめた瞬間――
「きゃあ！」
みのりが突然悲鳴をあげた。山下は、はっとした。
ぬいぐるみは一ミリも動いていなかった。そのかわりに、みのりのスカートが空中高く派手にまいあがっていたのである。可愛らしい花柄のパンティが、山下の脳裏にくっきりと焼きついた。
みのりは大あわてで、スカートをおさえた。見とれていた山下も我にかえり、大声でサトルを怒鳴りつけた。

「ばっ、馬鹿者！　なんてことをするんだ、お前は！　無念無想が聞いてあきれる。この雑念のかたまり人間め！」

「いや。ぼくはそんなことしちゃいけないって、必死で拒否しようとしたんですけどね、どういうわけか潜在意識のやつが勝手に……」

「嘘をつけ、このォ。お前は根っから助平なんだ。いやらしいやつめ」

「だって、本当に成功するとは思ってなかったんだから、しょうがないじゃないですか」

言いながら、チラリとみのりの様子を横目でうかがう。みのりは真っ赤な顔をうつむかせて、紅茶をかき回していた。

サトルは急に声を落とすと、山下の耳にこっそりと囁きかけた。

「先輩先輩」

「なんだよ」

「さっきの花柄ですけどね。あれはチューリップだと思いますか、それともスズラン……？」

山下はテーブルの下で、サトルの向こうずねを思いきり蹴とばした。

3

「まあ、でも、よかったわ。とにかくちゃんと作動するって、わかったことだし」

若干ひきつり気味にみのりが微笑んだ。まだ少し頬が赤い。
「あたしの設計に、ミスはなかったのよ」
「そう！　そうですよ、みのりさん。いやー、おめでとうございます」
ヘルメットをかぶったままのサトルが、調子よくうなずいた。その拍子に——
カチン……
サトルの持っていたティ・スプーンの先っぽが、首のところからちぎれて、テーブルの上に落っこちた。二人の視線がそれに釘づけになる。部屋が、しん、と静まり返った。
小きざみに揺れていたスプーンが静止し、山下は顔をあげてサトルを見た。じっと見た。
「ぼ、ぼく、何もしてないよ！」
サトルが、あわてて言い訳した。
みのりが、新しいスプーンをサトルに手渡した。
「スプーンなら予備があるわ。はい」
「あ。どうもすいません」
しかし、そのスプーンも、サトルの手に触れるやいなや、くたっと首を垂れてしまった。自分の指先で、ゴム製のオモチャみたいにぶらぶらしているスプーンを、目をまん丸にして見つめていたサトルは、急に「わっ」と叫んで、それをほうり出した。
「念力が強くなってるのね」
みのりが落ち着いた声で言った。

「サトルさんが、PK増幅器の扱い方を覚え始めている証拠よ。もうすぐ能力一杯まで使えるようになるわ」

「冗談じゃない」

山下が悲鳴をあげた。みのりが言った。

「大丈夫。それにともなって、念力をコントロールする方も、上達してくるはずだから」

「そうですか？」

疑わしそうな目を、サトルに向ける。山下はぎょっとした。

サトルの背後の壁にかかっていた鳩時計の針が、すごい勢いで回っているのだ。と、今度は、テーブルの上のティ・カップが、カチカチと小さな音をたてて震えだし、やがてテーブルそのものが、ガタンガタンとタップダンスを踊り始めた。山下たちが座っているソファも、その例外ではない。花瓶の花が、一本ずつロケット花火のように空中に飛び出し、天井近くでぱんと破裂した。花びらが、三人のまわりでうずまいて飛びかい始める。壁の額縁が外れ、その仲間に加わった。さらにティ・カップが、受け皿が、ポットのふたが、あたかもUFOのように、くるくる回転しながら、空中を飛びまわる。突然、扉が大きな音をたてて開き、また閉じた。

「いいかげんにしろ！　この人間ポルターガイスト！」

小舟のように揺れるソファの上で、山下がわめきちらした。

唐突に、全ての馬鹿騒ぎがおさまった。

宙に浮かんでいたカップや花などが、いっせいに床に落下した。部屋が静まり返る。

「ふう」
山下は、ぐったりとソファの背もたれに体をあずけ、大きなため息を吐き出した。ゴムボートに乗ってコロラド川を下ってきたような心境だった。
ぴっぽー。ぴっぽー。ぴっぽー。
鳩時計が、間の抜けた時を知らせた。
山下は、自分の腕時計をちらりと見て、言った。
「二分遅れてるな」
「今のは、夜中の時報よ」
「じゃあ、十二時間進んでるんだ」
みのりと山下は、顔を見合わせ、力なく笑った。
応接間は、文字通り嵐が吹きあれた後のような惨状を呈していた。山下は、そのありさまをゆっくりと見回し、
「ひどいもんだな」
と呟いた。
「そうね」
まだ半ば夢からさめやらぬといった表情のみのりが、ぼんやりとうなずく。
「ところで」
と、山下が言った。

「サトルのやつがどこへ行ったか、君知らないかい？」
言われて初めて気がついたみたいに、みのりは空っぽのソファを見つめた。サトルはＰＫヘルメットごと、どこかへ消えていた。
「そう言えば、扉が開いた時に何かとび出していったような気が……」
その時、屋敷の外で誰かが悲鳴をあげた。
山下とみのりは、はっとして立ちあがった。いやな予感に、しばし見つめ合う。
「あの馬鹿……」
山下は身をひるがえして、応接間から駆け出していった。
豪田家の前の歩道に、マリリン・モンローそっくりの女性が、スカートをおさえ、ちょっと困ったような顔をして立っていた。何が起こったのかは、聞くまでもなくあきらかだった。またどこか通りの先の方で、悲鳴があがった。
「あ・の・馬鹿！」
山下はもう一度口の中で小さくののしると、大急ぎで屋敷にとって返した。途中でみのりとはち合わせしそうになる。山下はみのりの両肩をつかみ、息を切らせながら言った。
「何か乗り物はありませんか？　すぐに追いかけて連れもどさないと、サトルのやつ猫ヶ丘じゅうの女性のスカートを、まくりかねない。下手をすると警察沙汰ですよ」
「えーっと、そうねえ。乗り物乗り物……」
みのりは、ぱっと顔を輝かせた。

「うん。たしかどこかに、イオン効果バイクがあったと思うわ。ちょっと門のところで待ってて。今さがしてくる」

みのりは実験室の方へ、ぱたぱたとかけ出していった。

山下は煙草に火をつけると、レンガ塀にもたれて煙を吐き出した。

三本を灰にし、四本目をくわえたところで、警笛が聞こえた。山下はふと目をあげた。

突然、玄関の扉が開いた。

みのりを乗せた真っ赤なイオン効果バイクが、まっすぐに山下めがけて突進してきた。

山下は煙草を投げすて、左右を見回した。どこにも逃げ場はなかった。

「きゃあ〜〜〜っ。停めて停めて〜〜〜」

みのりが悲鳴をあげた。

壁にはりついた山下の瞳の中で、バイクの姿がみるみる内に大きくなる。山下は蒼白な顔をひきつらせながら叫んだ。

「ブレーキレバーを握るんだ！　早く！」

間一髪のところで、バイクはつんのめるようにして停まった。両者の間隔は、十センチもなかった。

山下は背中を壁におしつけたまま、ずるずると地面に座りこんだ。安堵のあまり、とっさには声も出せなかった。

「ごめんなさいね、びっくりさせちゃって」

みのりが申し訳なさそうな顔で謝った。
「しばらく運転してなかったものだから……。大丈夫だった？　山下さん」
「なんとか」
ぎこちない動作で立ちあがりながら、山下はうなずいた。
みのりのイオン効果バイクは、車輪をはずしたスクーターみたいな形をしている。――ヴェスパ型(タイプ)だ。
「さあ。早く乗ってよ、山下さん」
ハンドルを握ったまま、みのりが言った。山下は一瞬立ちすくんだ。
「あ、あのですねえ、みのりさん？」
おずおずした微笑みを浮かべながら、山下は言った。
「なあに」
「そのう。運転はどちらかって言うと、ぼくがした方が、いいんじゃないかと思うんですけど」
「あら、どうして？」
あっかるーい表情で、みのりが訊き返した。山下は言葉につまった。
「いえ、あの、その、つまり……」
口の中でモゴモゴ言ってる山下に、みのりは軽く笑いかけた。
「だあいじょうぶよ。さっきはちょっと慌てただけだってば。さあ、ぐずぐずしてないで早く出発しましょうよ」

山下は古今東西のありとあらゆる神々に祈りを捧げながら、バイクの後席にまたがった。
「行くわよー」
みのりがスロットルをいきなり全開にした。
バイクはフロントを高々と持ちあげると、首が落っこちそうな急加速で、豪田邸をとび出していった。

4

サトルの後を追うのは簡単だった。
赤くなったりびっくりしたり、あるいは道端にぺたんと座りこんで茫然としている女性たちの姿を、たどっていきさえすればいいのだ。もちろん、その他にもサトルは、そこら中にＰＫの痕跡を残していた。
サトルが手を触れたのだろう。街灯や交通標識は一本残らず、シュールリアリスティックな形に、ねじまがっていた。郵便ポスト、消火栓、ガードレール。みんなぐにゃぐにゃだ。
「ダリが通ったあとみたいだな」
山下は呟いた。
みのりが急ブレーキをかけた。

道端の自動販売機の前で、コーラのカンが山になっていた。山下とみのりは黙って顔を見合わせた。

ゆっくり進んでいくと、ソフトクリームに半分埋まったソフトクリームスタンドがあった。店のオヤジはカウンターの中で、首までソフトクリームにつかって、煙草を吸っていた。完全にやけくそになっているらしい。聞くと十分ほど前のことだと言う。製造機のノズルが急に故障して、際限なくソフトクリームを吐き出し始めたのだそうだ。

「どうだね、あんたたち。ソフトクリーム食ってかないか。うまいよ。しかも全部ただだ」

店主の申し出を丁重に断わって、山下たちは先を急いだ。

*

サトルがじっと見つめると、ショーケースの上に置いてあった、直径五十センチほどもあるクリームパイが、ふわりと浮かびあがった。

よく太った店の主人は後ろを向いていて、全く気がついていない。サトルはパイをつかんだまま、店の周囲を見まわした。ひどく若い美人と腕を組んだ、いやらしそうな中年が道の向こうからやってきた。サトルはくすくすと笑った。

パイが中年男の顔を、まっ正面から直撃した。

凍りついたみたいに立ち止まっていた男の顔から、パイがゆっくりとはがれて落ちた。生クリームで真っ白な顔が現われ、二、三度パチパチとまばたきをする。連れの女が吹き出した。男は

ゆっくりと首を回して、ケーキ屋を見た。彼の目に、後ろを向いているケーキ屋の主人の姿がどのように映ったかは、言うまでもないだろう。
笑いころげている女をほうっておいて、中年男はつかつかとケーキ屋に入っていった。ケースの上には、他にいくつもパイが並べてある。男はそのうちの一つを手にとると、店の主人に声をかけた。
「おい」
「はい、いらっしゃい！」
ふり向いた主人の顔を、でっかいチョコレートパイが待ちうけていた。
とたんに、ケーキ屋の店先で、派手なパイ投げ戦争がおっ始まった。それは他の通行人もまきこんで、どんどんエスカレートしていった。
その様子をサトルは、通りの反対側で大笑いしながら眺めていた。
実際、ＰＫ増幅器の偉力はたいしたものだった。
気取って歩いているレストランのウェイターの足を引っぱったり、パチンコ屋のチューリップを開きっぱなしにしたり、まさに食べようとする瞬間に、カレーライスの皿を動かしてスプーンに空を切らせたり、全てのボールをガーターに落として、プロボウラーを人格崩壊に追いこんだり、デパートの更衣室のカーテンをいっせいに開け放ったり、――とにかくサトルは、思いつくかぎりのイタズラを、手あたりしだいにやってのけた。
とは言え、銀行の札束に羽根を生やしたり、宝石店のショーウィンドウを空っぽにすることな

どは、考えもしなかったのだから、根が善良とゆーかアホとゆーか。

山下たちがかけつけた時、サトルはランジェリー・ショップの店先から、大量のパンティを花吹雪のように吹き出させ、店の女主人を半狂乱におとしいれていた。

「サトル！」

特大級の怒鳴り声が聞こえ、サトルはびくっとそちらの方向を見た。

「あっ、先輩！」

サトルは、うれしそうに笑った。

「ほら見て下さいよ。きれいなもんでしょう」

そのとたんに、山下めがけてパンティの大群が、すごい勢いで吹きつけられてきた。山下は両手を前にかざし、その突風をさえぎった。パンティの渦の中心では、サトルが馬鹿のようにケタケタ笑っている。

——あれは、いつものサトルじゃない。

山下は直感した。どうやら、シャレや冗談じゃなく、本当にイドの怪物に意識を乗っ取られてしまったらしい。

山下に吹きつけるＰＫの烈風は、ますます強くなっていき、ついにずるずると足がすべり始めた。

その時——

背後からこっそりと近づいたみのりが、サトルの頭からＰＫヘルメットを、ひょいと外してし

まったのである。——まるであっけなく。
「あれ?」
サトルはきょとんとして、みのりをふり返った。
「あ、みのりさん……。あれっ、先輩も。二人ともどうしたんです? ここはいったい……。あれっ?」
頭の上にはらはらと舞い落ちてくるパンティを一枚つまみあげ、サトルは目を丸くして言った。
「どうなってるんです、これ」
全く表情というものがない山下とみのりの顔を、交互に眺めながら、サトルはなおも、
「ねえ、これ」
と、パンティをひらひらさせてみせた。
山下はため息をつき、
「やれやれ」
と言った。
「やれやれ」
みのりが真似をした。

5

「え〜〜っ！　ぼ、ぼくがそんなことを？」
帰る道々、それまでのいきさつを二人から聞かされたサトルは、さすがにショックを受けたようだった。
「ああ！　なんてことをしてしまったんだろうか！」
と、髪の毛をかきむしる。
「ざーとらしいんだよ、おまえは」
イオン効果バイクを押して歩きながら、山下が冷たくさえぎった。
「いえ！　ぼくは真剣に反省を……」
「そーゆーえらそうな口は、ポケットの中のパンティを全部捨ててから、叩くんだな」
「知ってたんですか？」
山下は、やってられないという表情で、ゆっくりと首をふった。
「超能力を使ってる時ってのは、一種のトランス状態にあるわけだから、どうしても意識下からの干渉が強くなるのよね。ふだん抑圧されてる部分がモロに表面に出てきやすいのよ。失敗だったわ」
ＰＫヘルメットを両手で抱えたみのりが、ちょっぴり沈んだ口調で言った。
「いや。それは使用する人間の側の問題でしょう。あいつはとにかく意志が弱すぎた。これがぼくのような人間なら、なにしろ人格が高潔にできてますから、立派に成功していたと思います

よ」
「ありがと、山下さん」
みのりがにっこりした。
「あーっ、しかし惜しいことしたなあ」
二人の少し先を歩いていたサトルが、大きな声で言った。
「どうして、せっかくの力をあんなつまんないことばかりに、使っちゃったんだろう。大金持ちになれるチャンスだったのに」
「やっと本性を現わしたな」
「だって、そうでしょ、先輩。銀行の金庫を丸ごとかっぱらうことだってできたし、そうだ、カジノへ行けば百戦百勝まちがいなしだったのに」
「やめといた方が無難ね。どこのカジノでもアンチ・エスパーを傭ってるって話だし、第一、金庫を動かすことなんてできないのよ。試してみればわかるわ。念力では自分より重いものは持ちあげられないの」
「へえ、どうしてです?」
山下が訊ねた。
「ほら、あれよ。シーソーと同じ理屈よ」
「シーソー……? ああ、なるほどね」
山下は頭の中で、シーソーの片方に金庫、もう片方にサトルという図を思いうかべ、なんとな

く納得した気になった。
「とすると、無理に重いものを持ちあげようとしたら……」
「逆に自分の方が持ちあがっちゃうわね。当然のごとく」
みのりはうなずいた。そして、どこか上の方を指さしながら、こうつけ加えた。
「例えば、あんなふうに」
「あんなって、一体どんな……」
山下はみのりが指さす方向を見やって、「ぎゃっ」と叫んだ。高さ十メートルほどの空中に、座禅を組んだ格好のサトルが、ふんわりと浮かんでいたのだ。しかも、まぎれもなくサトルは、さらに上昇しつつあった。
「な、なんだって、あいつがあんなところにいるんだ」
山下は茫然と呟いた。
「あたしの話を聞いて、試したらしいのよ」
「試したって、何を？」
「あの銀行」
今度みのりが指さした先には、猫ヶ丘でも一番大きな、猫又第一銀行がどーんと建っていた。
山下は、銀行と空中のサトルを交互に見つめながら言った。
「だけど、あいつはＰＫ増幅器を、着けてない……のに……」
みのりはサトルを見あげたままの姿勢で、妙に淡々と言った。

「どうやらサトルさん、本人は全然自覚してないけど、本物のエスパーだったらしいわね」
「あいつがァ?!」
うそだろお、という声を山下はりあげた。
「要するに、あたしのPK増幅器は、何の役にも立ってなかったんだわ。ただ、これをかぶりさえすれば念動力(サイコキネシス)が使えるんだって、サトルさんが信じこんだもんだから、その結果、今までかくれていたサトルさん本来の力が発現しちゃったのよ。たまたまね」
「あいつあ、根が単純だからなあ」
山下が言った。
二人は道のまん中に並んで、仲よく頭上のサトルを見あげた。
暮れなずむ茜色の空を、サトルはぐんぐん上昇していき、やがて豆粒ほどの大きさになって、見えなくなった。
西の空で一番星が光りはじめた。
「あいつ、どこまで行くつもりなのかな」
山下が言った。
「カゼひかなきゃいいけど」
みのりが呟いた。
二人は、それから暗くなるまでひと言も口をきかずに、ずっと空をながめて佇んでいた。



*

サトルの姿が、全国紙のトップを飾ったのは、それから約一ヶ月後のことだった。

『木星軌道上にUFM?!』

という、ドでかい見出しのついた、一枚の天体写真がそれである。ガニメデの観測基地から送られてきたその写真には、木星の巨大な大赤斑をバックに、座禅を組んでいるサトルの姿がくっきりと映っていた。UFMとは、未確認飛行人間（アンアイデンティファイド・フライング・マン）の略らしい。基地からの報告によれば、そのUFMは一G加速という驚くべきスピードで、あっというまに外宇宙に消えていったそうだ。

「ふーん。サトルさんもいよいよ世界的ね——」

ソファに寝っころがって、夕刊の写真を眺めていたみのりが、ふと顔をくもらせた。何かが心のすみにひっかかったのだ。みのりはソファに座り直して考えこんだ。——何だったかしら？　何かとっても大事なことを忘れているわ。

その時、アレックスが入ってきて、風呂の用意ができたと告げた。

「今いくわ」

みのりは立ちあがり、テーブルの上の夕刊に、もいちど目を落とした。

——そういえば今度の一件も、元はといえばお風呂がきっかけだったのね。で、そのお風呂のきっかけは……。

「アルキメデス！」

みのりは小さく叫んだ。はっと両手で口を覆う。思い出したのだ。あの番組の中で、アルキメデスが言ったある言葉を。

——サトルさんが、あんな遠くまで行っちゃったのも無理はないわ。だって、金庫はビルにくっついてるし、ビルは地球にくっついてるんじゃない。てことは……？

みのりはアルキメデスの言葉を、そっくりそのまま口に出して言ってみた。

「もし私に一本の長い丈夫な棒と、適当な支点を与えてくれたら、指一本で地球を動かしてみせる」

そして、サトルは今や着々と、その長い丈夫な棒を、獲得しつつあるのだ。

みのりは、すとんとソファに尻もちをついた。

夕刊を手にとり、写真をじっと見つめる。

ひとつだけ気になることがあった。

サトルが十分に高く持ちあがった時、地球に一体なにが起こるのか……？

みのりは考えないことにした。

第五話　ちょっと混線

1

「んしょ」
みのりは、顔を真っ赤にして、スパナを握る手に力をこめた。これが最後のボルトを、しっかりと締めつける。
完成だ。
「ばんざーい♡」
メチャはしゃいだ声で、みのりが両手をぶんと振りあげた。
その拍子に、右手のスパナがすっぽぬけて、実験室の窓へ一直線。ガラスが、にぎやかな音をたてて、割れ落ちる（ がらがっしゃ〰〰ん）。
「ありゃ〰〰」
みのりは、バンザイをしたままの格好で、後ろをふり返り、舌を出した。
「またやっちゃった」

待つほどもなく、物音を聴きつけた助手ロボットのアレックスが、ホウキとチリトリ、それに予備の替ガラス持参でやってきた。慣れたものである。
まっすぐ窓のところへ行こうとするアレックスを、みのりが呼びとめた。
「ねえねえ、アレックス。ほら、見て見て。とうとう完成したの。すごいでしょ」
ごきげんな顔つきで、そのシロモノを指さすみのり。
『ソレハ、ドーモオメデトウゴザイマス』
アレックスは、あまり興味のなさそうな声で、そっけなく応じた。赤い電子アイをチラリと動かして、実験室の床から天井近くまでそびえている、シュールリアリズムの化け物じみた、みのりの新発明を一瞥する。
バベルの塔よろしく積みあげられた回路ボックスと、複雑にからみ合ったコードやパイプ類。大小さまざまのメーターが、てんでにバラバラの方向をむいて取り付けられ、てっぺん近くに、いったい何の役に立つのか、水道の蛇口までがつき出している。――美術館あたりに置いてあれば、前衛派の彫刻と言っても十分通用するだろう。
「どお?」
みのりは胸を張ってみせた。
『立派ナモンデスネ』
あっさりとうなずいて、アレックスは床のガラスを片づけ始めた。
「あっ。やっぱりそう思う?」

と、うれしそうにみのり。

「そうよねえ。だって、材料集めだけで三ヶ月もかかったんだもん。でもって、組み立てるのに、また三ヶ月でしょ？　結局、全部で半年よォ、半年！　すっごーい。半年がかりの大作なんだわ。うわー、うわー。これはもう感動ね。そうよ、感動よ。感動しない？　感動するでしょ？」

『ハイハイ』

窓ガラスを取り替えながら、アレックスがてきとーに相づちを打つ。

「でしょお？　当然よねー。なんたって半年よ。六ヶ月よ。百八十日よ。えーと、ひい、ふう……四千三百二十時間よォ！　うわー。我ながらよくやったと思うわ。うん♡　感動」

自分自身でこくんとうなずいているみのりに、片づけを終えたアレックスが、

『感動スルノハ結構デスガネ、今月ニ入ッテ、コレデ十八枚目デスヨ。モット気ヲツケテモラワナイト、がらす代ダケデ破産シテシマイマス』

「半年！」

どこかあさっての方向を見つめながら、みのりはひとりで盛りあがっていた。アレックスのスピーカーから金属的なため息が聞こえた。

『オ嬢サマ？』

「わかったわよ。今度から注意するってば」

みのりが言った。アレックスはホウキとチリトリをさげて、実験室を出ていきかけ、不意に立ち止まった。引き返してくる。

『ヒトツ訊クノヲ忘レテマシタケド……』
「なーに、アレックス」
『ソレハ一体何ナンデス？』
「やーね、アレックスったら」
みのりは軽く笑った。
「見ればわかるでしょ？」
答えるかわりにアレックスは、電子アイをことさらゆっくりと動かして、そのばかでっかいメカニズムのかたまりを、上から下までスキャンしてみせた。最後に、てっぺんからつき出した水道の蛇口に眼をとめ、たっぷり三十秒ほど見つめた後で、再びみのりに視線を戻す。
みのりもまた同じように、アレックスの視線を追い、水道の蛇口を眺め、そして二人はお互いの顔を無言で見つめ合った。
長い長い沈黙の時がすぎ、みのりの表情から、潮が引いていくように笑みが消えていった。目が点になる。
みのりは首を回して、もう一度その巨大なシロモノを、ぼんやりと見あげた。床から天井までゴチャゴチャと積みあげられた、ガラクタのかたまり。
「やだ……」
みのりは両手を口のところへ持っていきながら、小声でつぶやいた。
「あたし、いったい何を作ってたのかしら」

いたのである。

庞大な数の部品を、ひとつに組み立てることにばかり熱中して、肝心の目的をコロッと忘れていたのである。

たしか最初は、痒いところに手が届く〝神経パルス感応式自動マゴの手〟を作るつもりだったのよね。それが途中で、全身マッサージ機になり、万能調理機になり、万能ディスポーザーになり、それから、核力解放型全自動洗濯機に設計を変更したところまでは憶えてるんだけど、そのあとは……。

みのりは半年間の記憶を必死でたどってみたが、一日の内に三回も四回も気が変わり、そのつどあちこちいじくってきたせいで、最終的に何ができあがったのかは、彼女自身にも、まるで見当がつかなかった。

あきらかに何か含むところのありそうな、アレックスの視線が、痛いほど感じられた。

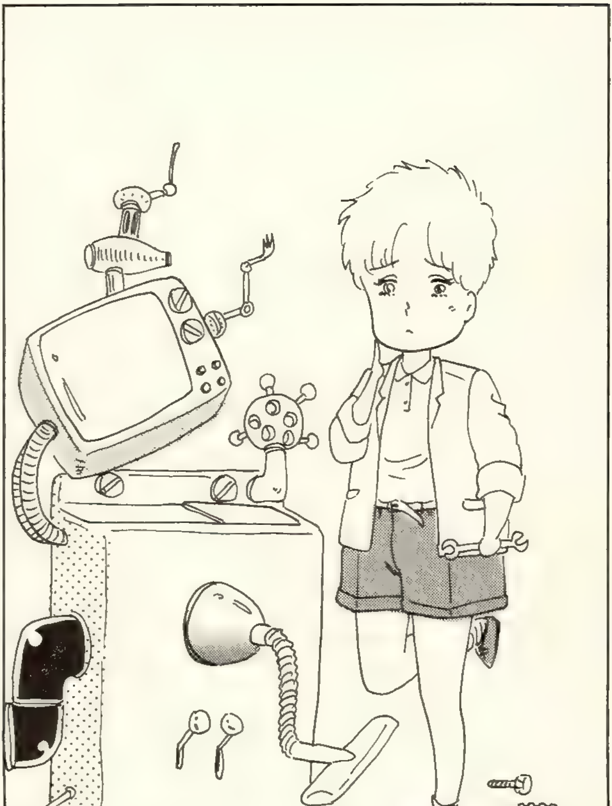
「だから、その、あのね……」

みのりは作り笑いを浮かべながら言った。

「ようするに、この装置はァ、つまりィ……」

言葉が途切れる。みのりは石になりたかった。その時、ある考えが天啓の如くひらめき、みのりは思わずとびあがった。

「そうだわ！　これが何なのか知るには、スイッチを入れてみればいいんじゃない。そうよ。ったまいー。そうすれば、これが洗濯機なのかマゴの手なのか、それとももっと別の何なのか、ハッキリするわ！」



みのりは顔を輝かせてそう言うと、装置にかけより、ONと書いてある赤いボタンを押した。
しばらくは何も起こらなかった。
やがて装置全体が、ガタガタと振動を始めた。
蛇口から大量の白い煙が噴き出した。
そして、装置は爆発した。
BOOOM！

2

もうもうたる白煙がおさまると、実験室の惨状が姿をあらわした。
テーブルの下から、すすだらけの顔をのぞかせたみのりが、「あーあ」と言った。
装置はきれいに吹きとんでいた。
「半年もかかったのにー」
棚のたぐいは全て落っこち、こわれた実験器具などが床に散乱していた。そして、窓ガラスはアレックスが修理した部分も含めて、ことごとく砕け散っていた。みのりの隣からごそごそとはい出してきたアレックスが、どこか悲しそうにそれを見つめた。
アレックスの視線の方向に目をやったみのりが、あわてて取りつくろうように言った。

「で、でもね。まあ、よかったじゃない。あれの正体がわかったんだから。――ようするにあれは、爆発するもの、だったのよ。ね？」

赤い電子アイをふり向かせたアレックスに、みのりは愛想よく微笑んでみせた。

「それに、もひとついいニュースがあるわ。爆発してなくなっちゃったんだもん、あたしたちはこれでもう金輪際、あれが何だったのかって悩まなくてもすむわけよ！　素敵じゃない？　あー、せいせいする」

みのりは、うーんと伸びをした。まだ少し煙を出している残骸をチラリと横目で見て、肩をすくめる。――Ｓｉｇｈ。

それから自分の姿を見おろして、もう一度ため息。ひどい有様だ。

「さ、身づくろい身づくろい」

気をとり直したみのりは、バスルームに通じるドアを開けた。

なぜか、そこに山下がいた。

「あら、山下さん！」

みのりは目をまん丸にして、素頓狂な声をはりあげた。

「なんで、うちのバスルームにいるの？」

もっと驚いたのは山下の方だった。『猫又ジャーナル』編集部の自分のデスクで、校正の仕事をしていたら、いきなり何もない空間を開けて、みのりが現われたのである。

「みっ、みのりさん……！」

山下は、口をパクパクさせた。
「いったい、どこから入ってきたんです?」
「どこって、そこのドアから……」
みのりは無意識に背後をふり返ったが、ドアはすでに閉じたあとだった。雑然とした編集室の光景があるだけだ。もっとも、今はみんな取材に出払ってて、室内には山下ひとりだけだったが。
みのりはきょとんとしてあたりを見回した。
「ここ、どこ?」
「編集室ですよ。猫又ジャーナルの」
「おかしいわねえ。じゃあ、うちのバスルームはどこ行っちゃったのかしら?」
「さあ。とにかくこのへんじゃ見かけませんでしたねえ。まあ、立ってないでかけたらどうです。それからゆっくり事情を聞きましょう」
「ええ。でもその前に、あの、お手洗いをお借りできないかしら」
「ああ、それなら、そこのドアを……」
と、山下が指さしたドアが、突然、バタンと開いた。
「助けてくれ〜〜〜!」
大声で叫びながら、編集長がとび出してきた。その後を追って、大きな黒サイが地響きもすさまじく現われる。
編集長は、自分の後頭部を蹴とばすような走り方で部屋を横切り、掃除用具のロッカーの中に

かけこんでいった。黒サイもそれに続く。地響きが遠のき、聞こえなくなった。
山下とみのりは、同じように口をあんぐりと開けて、その様子を見守っていた。ロッカーの扉が閉まる寸前に、二人はその内部に陽光あふれるアフリカの大サバンナが広がっているのを、はっきりと目にした。
山下とみのりは顔を見合わせた。
「どうも、お手洗いは諦めた方がよさそうね」
みのりが言った。
「同感ですね。まあ、これで鼻の頭についたススを拭いて下さいよ……」
山下は自分のハンカチを取り出そうとして、上着のポケットに手をつっこんだ。指先が空をつかみ、右腕がひじのあたりまで、ずぶずぶとポケットに入ってしまう。山下は、勢いあまって、もう少しで自分のポケットの中に落っこちそうになった。
「ど、どうなってるんだ、こりゃあ!」
あわてて右腕をひっこぬきながら、山下は叫んだ。上着のすそをめくってみる。別に穴があいているわけではない。
「妙だな」
山下はもう一度ポケットを手さぐりしてみた。
「ん?」
手が何かに触れた。山下はさらに深く腕をつっこんだ。

「うひゃあ！」
突然、山下が奇声を発した。
「どうしたの？」
かたずをのんで見守っていたみのりが、いきごんで訊ねた。山下はみのりをふり返り、なんともいえぬ奇妙な表情を作った。ゆっくりと腕を引き抜く。手首のあたりまで水にぬれて、しずくがしたたっていた。
白々とした静寂が、編集室を覆った。
二人は、山下の指先につままれてピンピンはねている、一匹の赤い金魚を、声もなく見つめた。
「まさかとは思うけど……」
みのりがようやく口を開いた。
「山下さんって、いつも上着のポケットの中で、金魚を飼ってらっしゃるわけ？」
「んな馬鹿な。――ポケットの底が、どこかの金魚鉢に通じてるらしいんですよ。ほら」
山下は金魚をポケットの中に落としこんだ。少しタイミングをずらして、ポチャンという水音が聞こえてくる。
みのりは袖口で顔をぬぐいながら、考え深げに呟いた。
「どうやら、空間のつながり方が、しっちゃかめっちゃかになってるみたいね」
「らしいですね。もっとも、一体どうしてそうなったのかは、見当もつきませんが」
山下は肩をすくめた。

「あの……、あのね、山下さん?」
もじもじしながらみのりが言った。
「なんです?」
「あの……、あたしだと思うの」
「何が?」
「しっちゃかめっちゃかの原因」
「はい?」
「うん、だからね……」
みのりは、実験室でのいきさつを説明した。
「じゃあつまり、自分でも知らないうちに〝次元爆弾〟を作っちゃったらしいって言うんですか⁈」
山下が呆れたように叫んだ。みのりは恥かしそうに、小さくうなずいた。
「そうらしいの。多分まちがいないと思うわ。昔、おじいさまが同じ物を作ってらしたのを、見たことがあるもの。あれだけの物が爆発して、ガラスが割れる程度の被害しか出ないのが、その証拠よ。次元爆弾は空間のこっち側じゃなくてあっち側、つまり裏側に向かって爆発するから、そうなるわけ。爆発と同時に、超平面下に無数のマイクロ・ワームホールをまき散らして、通常空間の四次元的連接をズタズタにしちゃうのよ」
「って言われても、さっぱり理解できませんけどね。だけど最初はマゴの手だったんでしょ?

マゴの手がどうやったら、そんなぶっそうなシロモノになるわけですか」
「相乗効果じゃないかしら。色々つけ加えちゃったし」
「助けてくれ〜〜〜！」
編集長がロッカーから走り出てきて、ドタバタと洗面所にかけこんでいった。そのあとを、今度は二頭の黒サイが猛然と追いかけていく。山下が言った。
「その結果が、あれってわけですか。やれやれ」
「ぶ〜〜〜」
みのりは、ほっぺたをふくらませた。山下は思わず吹き出した。笑いながら、
「ま、よろしいんじゃないですか、なっちまったものはしょうがないし。それより問題はこれをどうするかですよ。どうなんです、みのりさん。元に戻す方法はないんですか？　いつまでもポケットの中に金魚を入れとくわけにはいきませんからね」
「研究所へ帰れば、おじいさまの作った中和装置が、まだ残ってると思うけど」
「じゃ、すぐに出発しましょう。早い方がいい」
山下が立ちあがった。そのあとに続きながら、みのりが呟いた。
「でも、ちょっとむつかしいと思うわよ」
「むつかしいって何がです？」
出口のところで山下が、ノブに手をかけながら訊ねた。
「つまりね……」

みのりが口ごもった。山下はそのままドアを開け、外へ足を踏み出そうとして……、凝固した。
ドアの外には、暗黒の大宇宙がひろがっていた。
山下は機械仕掛けの人形みたいに、ぎこちなく首だけをまわして、みのりをふり返った。
「そういうことよ」
みのりが、ゆっくりとうなずいてみせた。

3

「まいったな」
星の海を前に、山下は腕組みをしてため息をついた。
「困ったわね」
みのりも腕を組みながら応える。
無数の星々が、漆黒の闇をバックに、凍りつくような光をたたえて輝き、二人の足元には、巨大な渦状星雲が、悠久の時を感じさせるように横たわっていた。凄絶とさえ言える美しさだった。
「どうしますかね」
山下が言った。
「他をあたってみるしかないでしょうね。ロッカーとか、山下さんのポケットとか。どこかに必

ず、出口があるはずよ」

「なるほどね」

と、山下はうなずいた。

「ところで、みのりさん」

「なーに、山下さん」

「ひょっとしたら、ぼくの目の錯覚かもしれませんけどね……」

みのりは山下の横顔を見つめた。山下は宇宙空間を指さしながら、言った。

「さっきから、あそこで何かが動いてるように見えるんですが、あれは一体なんだと思いますか？」

みのりは山下の指の方向に目をこらした。たしかに何かが、星々の間を動いていた。どうやら、まっすぐこちらに近づいてきているらしい。みのりは首をひねった。

「なにかしら？」

「彗星か……」

「宇宙船か……」

「それとも……？」

豆粒ほどだったものが、次第に大きくなってくる。

二人はごくんと唾を呑みこんだ。

そして、部屋からの光が、それを正面から照らし出した。星の海の中に、結跏趺坐した男の姿

が、くっきりと浮かびあがる。
二人の顎が、同時にがくんと垂れさがった。
「サ・ト・ル……！」
山下が、今にも卒倒しそうな声を出した。
嗚呼！　なんという運命のいたずらであろうくわっっっ‼　それこそは前回において、無意識のうちに念力で地球を持ちあげんと試み、逆に自分が持ちあがって宇宙の彼方へ消えたはずの、サトルその人の姿であったっっ!!!
茫然とつっ立っている二人の間を通り抜けて、サトルは編集室に漂い入ってきた。そのまま空中を横切り、反対側の壁にあたって床に落っこちる。とたんにパチッと目を開き、あたりをきょろきょろ見回して、
「あれ……？」
と、言った。そして、ドアのところで点目になってこちらをふり返っている二人に気づくと、うれしそうな顔で、手をふってみせた。
「やあ、先輩にみのりさんじゃないですか。なんかずいぶん久しぶりみたいな気がしますね！」
立ちあがりながら、編集室をもう一度見回して、首をひねる。
「だけど、どうしてぼく、こんなところにいるんですか？」
「なにも覚えてないの？」
みのりが訊ねた。

「覚えてって、いったい何をです？」

「あのねえ……」

説明しようとするみのりの肩を、山下がチョンチョンとつっついた。『え？』という顔でふり返るみのりを、山下は『無駄無駄』という風に、黙って首を振ってみせた。

「ねえ。ぼくがどうかしたんですか？　ねえ、先輩。みのりさん。ねえ」

サトルは世にもお気楽な表情で、二人を交互に見比べながら言った。二人は、どっと疲れたような気になって、思わずため息をついた。ついていけない脳天気さだった。山下が言った。

「しあわせなやっちゃなー」

「なんです？」

「いや、なんでもない。それよりちょうどいいところへ帰ってきた」

「帰ってきたって、ぼくどこかへ行ってたんですか？」

「気にするな。お前は、な〜〜〜んにも気にする必要はないんだ。それより、ちょっと手伝ってくれ」

「いいですよ。なにするんです？」

「出口を探すんだ」

「へ？」

サトルが妙な顔をした。

「出口って、そこにあるじゃないですか……」

と、ドアを指さし、そして初めてその奥に広がる宇宙の景観に気がついた。丸顔の中で、目と口がさらにまん丸になる。
山下はドアを閉めながら言った。
「これでわかったろう？」

＊

「ここもダメだわ」
戸棚を閉めながら、みのりがため息まじりに言った。
「どこに通じてました？」
「砂漠なの。しかも地球じゃないみたい。なんか変てこな植物が歩いてたもの」
「うひゃあ！　ゴミ箱の中じゃブリザードが吹き荒れてますよ、先輩、――あっ、ペンギンだ。可愛いなあ」
「えっ、ほんと？　どこどこ？」
みのりがゴミ箱を夢中でのぞきこみ始める。
山下は軽く肩をすくめて、耐火金庫に向き直り、電子キーのコードナンバーをインプットした。
ピ、ポ、パ、ペ、ポ。
ウィーンとぶ厚い扉が開く。
とたんに山下は、顔中泡だらけにした下着姿の男と向かい合っていた。その男は、右手に剃刀

を構えたまま、まばたきひとつせずに金庫の中でこちらを見つめ返している。よほど驚いたらしい。今にも目玉が落っこちそうだった。

おそらくは自宅の洗面所で鏡に向かい、今まさにひげを剃ろうとした時に、突然、その鏡が開いて、そこに山下の顔が現われたのだ。驚くなという方が無理だろう。

「あ、こりゃどうも」

山下は愛想笑いを浮かべながら言った。

「ひげ、剃ってらしたんですか?」

男はこくこくとうなずいた。

「そうだと思いましたよ。あははは。ところで、つかぬことをうかがいますが、そこは猫ヶ丘三丁目の近くでしょうか?」

男はのろのろと首をふった。

「ちがう? そうですか。それはどうも。失礼しました」

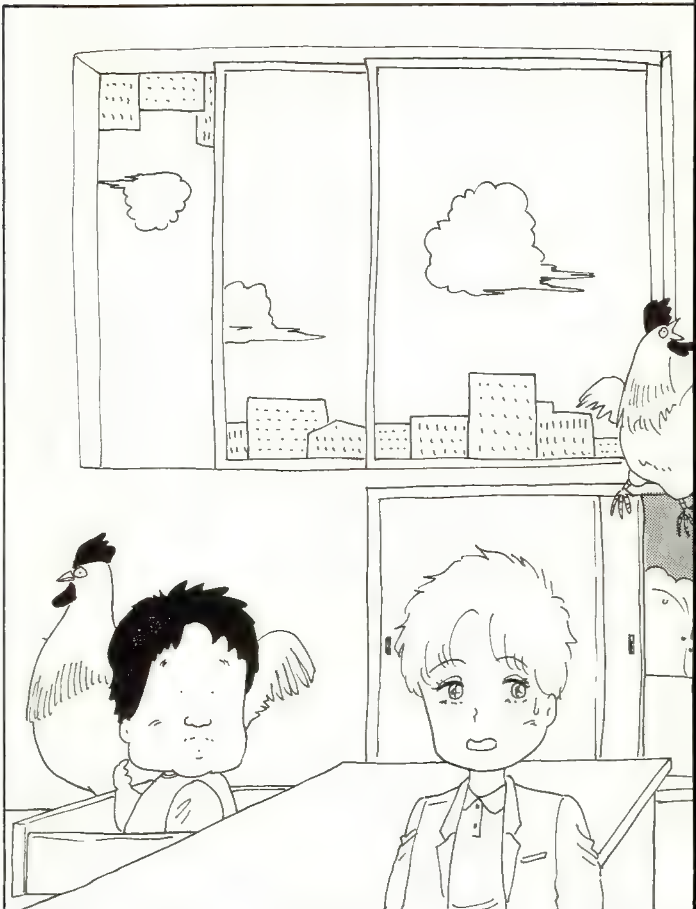
山下は扉を閉めかけ、ふと気づいてもう一度開いた。男はびくっと体を震わせた。

「もう邪魔しませんから、どうぞ続けて下さい。早くしないと泡が消えちゃいますよ。それじゃ」

と手を振って扉を閉める。

山下の耳に、男が調子っぱずれの大声で、♬タラッタラッタラッタ、うっさぎのダンス〜〜〜と唄い始めたのが、かすかに響いてきた。





「気の毒なことをしてしまった」
山下はそっと呟いた。
出口はなかなか見つからなかった。
三人は、戸棚、引き出しのたぐいはおろか、果てはインク瓶の中までのぞいてみたが、たいていはどこかとんでもない所に、つながっているのである。
カナダの大森林、アマゾンのジャングルといったオーソドックスなところから始まって、月の裏側だの、セントラルパークの公衆便所だの、ピラミッドのてっぺんだの、トマトケチャップの缶の中だの、だれかの靴の底だのといった、およそ奇天烈なところまで、きりがなかった。
山下は、ファイルキャビネットの中で、シロナガスクジラが悠々と潮を吹いているところも見たし、自分のデスクの引き出しに、木星の大赤斑を見つけた時は、あやうく腰をぬかしかけた。
一見、何事もなく外の風景を映している窓ガラスも、ひとたび開けてみると、頭上に、天地逆さまになった猫ヶ丘の街並みが広がっていたりするのだ。その他にも、花瓶の中から、いきなり原子力潜水艦の潜望鏡がつき出してきたり、額縁の裏でライオンが昼寝していたり、一度などは、どこかの養鶏場に通じている戸棚から、数十羽のニワトリが編集室になだれこんできて、追い出すのに大汗をかいた事すらある。
ようするに、いささかゲップが出るほど、波乱万丈だったわけだ。
さすがに疲れをおぼえて、山下はぐったりと椅子に座りこんだ。一生分の経験を、ほんの小一時間で味わった思いがした。その時――

「先輩、先輩」
サトルの声にひょいとふり返った山下は、思わずぎくくっと後ずさった。
すぐ横の机の引き出しから、サトルが上半身だけをのぞかせていた。
「お、お前、下半身はどうした」
「あそこです」
指さす方向を見ると、サトルの下半身が換気ダクトの中に頭をつっこんでいた。
「ね、おもしろいでしょ？」
山下は無言で、サトルの顔をじい〜〜〜っと見つめた。
「えーと……」
サトルはきまり悪そうに、もじもじした。
「お前の用というのは、それだけか？」
山下が冷たい声で言った。サトルがあわててかぶりを振った。
「いや、ちがうんです。——とうとう見つけたんですよ！　出口を！」

4

「きゃはは、やっだー。何言ってんのよ、美加。ばっかねー。そんなんじゃないったら。うん。

そーよお。彼ったらねー。えーっ？　うっそー。ほんとーっ。きゃあっ、かっわいい〜〜〜♡」
女子大生らしい若い女がスリップひとつという あられもない格好で、ベッドにひっくり返って電話をしていた。スヌーピーの枕カバーに、うす紫色のカーペット。戸棚にはぬいぐるみが群れをなし、壁や天井には歌手のポスターが、ところかまわず張ってあった。開け放しの窓から、レースのカーテンごしに、研究所の屋根が遠く見えている。
「ねっ。聞いて聞いて。それからねー……」
その時、彼女の頭上をふと影がよぎった。
壁のポスターの中から、ほこりだらけで頭にクモの巣をくっつけた山下が、彼女の体をまたいでベッドの上に現われたのである。彼女の手から、受話器がぽろりと落ちた。半開きの唇の間から、言葉にならない声が洩れる。
「な、な、な……」
「大丈夫ですか、みのりさん。そら、手を貸しましょう」
山下が、後ろをふり返って言った。
「うわーっ、すごいほこり！」
髪の毛をパタパタはたきながら、みのりが現われる。
「な、な、な……！」
「いやあ、ダクトが狭いんで、もう、つっかえちゃって、ひどい目にあいましたよ」
と言いながらサトルが続く。サトルの体型だと、たしかにその通りだろう。シャツのあちこち

に、カギ裂きを作っていた。
「まあ、なんにしても、脱出できてよかった」
「ほんと、一時はどうなることかと思ったわ」
「いや、まったくですね！」
三人はベッドの上に立ち止まって、口々に歓びあった。
「な、な、な……なによっ、あんたたちっっ！」
極度の驚愕による突発性言語障害から、ようやく立ち直った女子大生が、金切り声をはりあげた。毛布を胸のあたりに引き寄せ、ベッドの上を後ずさりしながら、わめきちらす。
「ひ、ひとんちに勝手に入ってきて。いったいどういうつもりなの！」
山下は耳がないような顔で、他の二人に言った。
「そろそろ行きましょうか」
「そうね」
「ここまで来れば、あと一息ですよ」
足元で、ぎゃーぎゃーわめいている女子大生を完全に無視して、三人はうなずきあった。
「なんとか言ったらどうなの！」
女子大生の声は、悲鳴に近かった。窓から出ていこうとする三人の後ろ姿に向かって、なおも半狂乱でわめき続ける。
「あんたたち一体だれなのよ！　だいたい、どっから入ってきたの！　ちょっと待ちなさいよ。

どこへ行くのよ。だれなのよ！　あんたたちだれなの？　だれなの？　だれなの？——お願いだから返事をして！」
　すでに三人の姿はなかった。
　女子大生は、ベッドの上に、わっと泣き伏した。
　表に出た山下たちが最後に聞いたのは、「訴えてやる〜〜〜っ」という、彼女のヒステリックな絶叫だった。
「やれやれ」
　山下は嘆息した。

＊

「たっだいまー♡」
　みのりが元気よく玄関のドアを開けた。
　次の瞬間、三人はどこか暗くて寒い場所に、きゅうくつにつめこまれていた。
「やだ。ここどこよ」
「ひどく寒いですね」
　もそもそと身動きしながら、サトルが言った。自分の体の下から、何か丸っこいものを引っぱり出してくる。手触りと匂いから判断すると、
「こりゃあ、リンゴだ。こんなところにリンゴが落ちてましたよ」

「リンゴ？」

「はい。もっとたくさんあるみたいですよ。それに、こっちにころがっているのは、どうもコーラか何かの缶みたいだし……」

暗闇の中を手さぐりしながら、サトルが答える。

「ひょっとしたら、ここは……」

山下が呟いた。

「ねえ。ちょっと。誰か何か食べてない？」

みのりのいぶかしげな声がした。そういえば、どこからかものを噛む時の咀嚼音が聞こえてくる。

「サトル。お前またつまみ食いしてんじゃないだろうな」

「えっ。やだなー、先輩。ぼく何も食べてませんよ……あっ」

「どうしたの？」

「いや。手に持ってたリンゴを、誰かが取っていっちゃったんですよ」

「おい、ちょっと待て。誰かって、おれたちの他に誰がいるって言うんだ？」

思わず腰を浮かしかける山下のすぐ後ろで、リンゴが噛みつぶされる音が、まるで銃声のように轟いた。三人は一瞬硬直した。

山下はごくりと唾を呑みこんで、そうっと手を後ろに回してみた。指先に、あたたかい毛皮のようなものが触れた。

サトルがマッチをすった。

淡い灯りの中に、パニック一歩手前のような三人の顔と、もうひとつ、毛むくじゃらでいかつい、異形のものの顔が、ぼうっと浮かびあがった。猿やゴリラとはあきらかにちがうその生き物は、リンゴをくちゃくちゃやりながら、黄色い乱杭歯を、にっとむいてみせた。

「きゃ〰〰っ！」

みのりを先頭に、三人は冷蔵庫の中から、大急ぎでとび出した。

背後に、ヒマラヤの雪男の咆哮を聞きながら、研究所の台所を一秒フラットでかけぬける。

夢中で実験室にころげこみ、勢いよくドアを閉めると、雪男の声がぴたっと聞こえなくなった。

山下は、ドアに背中でよりかかったまま、荒い息を吐き続けた。額にびっしょりと浮かんだ冷汗を、手の甲でぬぐう。

「いつものことだけど……」

あたりを見回しながら、山下が言った。

「サトルのやつは、どこへ行ったんだ？」

床にぺたんと座りこんでいたみのりが、顔をあげて、山下を見た。

「まさか、雪男につかまったんじゃ……」

みのりが顔色を変えた。山下は首をふった。

「そいつはわかりませんけどね。とにかく、ここにいないってことは、まだ台所にいるってことだろうな。あの化け物と、二人きりで」

「たいへん！」
みのりがとびあがって叫んだ。
「早く助けにいかなきゃ、サトルさん食い殺されちゃうわ！」
「心配だね」
山下がうなずいた。
「雪男が食あたりするかもしれない」
「のんきに冗談いってる場合じゃないってば。とりあえず中和装置で、このめちゃめちゃを元に戻さなきゃ。それとパラライザーが必要ね」
「だけどね、みのりさん。その前にもうひとつ、やらなきゃいけないことがあるんですよ」
「どういう意味？」
みのりが不思議そうな顔をした。山下は無表情に答えた。
「もう一度、研究所へ戻らないといけないって事ですよ」
「なんですって⁈」
みのりは、あらためて周囲を見回した。
そこは『猫又ジャーナル』の編集室だった。
「たすけてくれ〜〜〜っ」
洗面所から編集長がかけ出してきて、ロッカーの中に消えた。——サイは六頭に増えていた。
「どーしてこうなるのっっ！」

みのりが泣き声を出した。
その時、山下のデスクのそばの空間が、ガチャリと開いた。
『オ嬢サマ。ソロソロオ茶ノ時間デスケド、オ化粧直シハ、マダ、スマナインデスカ？』

5

「アレックス！」
みのりは目を見開いて叫んだ。
「あんた、そんなところで何やってるの？」
『がらすヲ修理シテオリマシタガ、何カ？』
みのりは笑い出した。
「ううん。いいのよ。お願いだから、ちょっとの間、そのドアを閉めないでおいてくれる？　さ、山下さん。早く早く」
はじめにみのりが通って来た四次元通路を逆に渡って、二人はいとも簡単に、実験室に戻った。
「なんてこったい」
気がぬけたような表情で、山下が言った。
「ほんとにね。でも、よくこのドアを開けてくれたわ、アレックス。さもなきゃ、もう一度最初

からやり直さなきゃいけなかったんだもの。感謝♡」
『何カアッタンデスカ？』
アレックスがのんびりと訊ねた。
「いいから、いいから。それより中和装置よ」
みのりは、実験室のあちこちに、乱雑に積みあげられているガラクタの底から、小さい銀色の卵みたいなものを引っぱり出してきた。出ベソのようにくっついている黒いボタンを押して、みのりはそれを床の上にほうり投げた。
「みんな伏せてっ」
とたんに、卵が爆発した。
ガラスが三たび、こっぱみじんに砕け散った（がらがっしゃ〰〰ん）。
中和装置の作用フィールドが、爆風のように超平面下に広がっていき、麻のように乱れた空間軸の相（フェーズ）が、ひとつに収斂した。
茫然と窓ガラスを見つめているアレックスを、白煙の中に残して、山下とみのりはパラライザー片手に、台所へとびこんでいった。
「サトルっ」
「サトルさんっ」
しかし、二人の予想を見事に裏切って、台所には血なまぐさい惨劇の気配など、かけらもなかったのである。

二人は口をあんぐりと開いて、立ちすくんだ。
冷蔵庫の扉が開けっぱなしになっており、床一面に食物が散乱していた。そして、そのまん中で、サトルと雪男が宴会をひらいていたのだ。
「あっ。先輩。みのりさん」
サトルが、大きなボロニアソーセージをくわえたまま、二人をふり返った。
「もう、異変はおさまったんですか？」
「なにをしている」
山下が、悪魔もかくやというほどの、冷たい声で言った。
「え？」
「なにをしていると聞いてるんだ」
「あ、いやー、そのォ、どういうわけかぼく、彼女に気に入られちゃいましてねー。ヒマラヤの洞窟でいっしょに暮らそうって、誘われてるんですよ」
太平楽な顔をして、サトルが頭をかいた。——雪男は実は雪女だったのだ！
「お前、それの言葉がわかるのか」
「まあ、雰囲気で。それに彼女にはちゃんと名前があるんですよ。えーと、なんて言ったっけ？」
「**がるるるる**」
雪女が吼えた。床に座っていてさえ、山下の背たけほどもあった。

「って言うんです」

サトルがニコニコ笑った。

「そうかい。お似合いだな、え？　サトル。お前にはもったいない嫁さんじゃないか。力強く、頼りがいがあり、器量もいい」

山下は、雪女の北京原人に似た顔つきをチラリと見た。そして、突然、大声で怒鳴った。

「だから、ヒマラヤでもエベレストでも、お前の好きなところへ、とっとと行っちまえ！」

山下はくるりと踵を返すと、足音も荒々しく台所を出ていった。

「あっ、そんなに怒んないで下さいよ、先輩〜〜〜」

サトルは雪女をふり返ると、急に二枚目ぶった声になって、言った。

「な？　そんなわけだから、ぼくは君と一緒に行くわけにはいかないんだ。ぼくと君は、生まれも環境もあまりにちがいすぎる。所詮は結ばれない二人だったのさ」

「**ぐるる**（あなた）！」

雪女は、ひしとサトルにしがみついた。サトルのあばら骨が、一本のこらずへし折れたことは、言うまでもない。

その後、雪女は涙ながらにヒマラヤに帰っていったが、編集長はとうとう戻ってこなかった。風の便りによると、ケニヤで数十頭のサイに追いかけられているのを、見たという人もいるらしいが、その後の行方については定かではない。

山下は編集長代理に出世した。

第六話　日曜日には宇宙人とお茶を

異星人(べム)あり、
遠方より来たる。
また、たのしからずや。

1

「不思議な星空……」
秋の夜空を見あげながら、みのりがうっとりとつぶやいた。
ベランダの手すりにひじをついて、両手で小さな頤(おとがい)を支えている。
いいかげん、夜風が肌に冷たい季節だというのに、パジャマの上から赤いカーディガンをはおっただけの姿で、もう小一時間も、そうやって星を眺めているのだ。

『ミノリオ嬢サマ。イツマデモ、ソンナ格好デイルト、風邪ヲヒキマスヨ』

見かねた助手ロボットのアレックスが、部屋の中から呼びかけた。

「う〜〜ん」

ふり向きもせずに、生返事をするみのり。

マッドサイエンティストとはいえ、みのりもお年頃の女の子だ。たまには、星を見つめて、乙女チックな幻想にひたりたくなる時も、あるらしい。

――きっといつか、あの星のどこかから、素敵な男性がやって来るんだわ♡

みのりの瞳の中でも、同じように星がきらめき始めた。その時、

「あら？」

みのりは、星々の中に、何か星とは全く別の輝きを放つものを見つけた。それは猫ヶ丘の中心部の方へ急速に動いていき、一度またたいて、ふっと消えてしまった。

みのりは目をパチパチさせた。

「UFOかしら？」

と、小首をかしげる。

とたんに――

「くしゅんっ」

みのりは、あわててカーディガンのえり元をかき合わせた。

「いっけなーい」

たちどころに現実に引き戻されたみのりは、スリッパをパタパタいわせて、家の中へかけ戻っていった。
『ホラ、ゴランナサイ』
窓を閉めながら、アレックスが小言を言った。
『イマ、卵酒ヲ作ッテアゲマスカラ、ソレ飲ンデ、今夜ハ暖カクシテオ寝ミナサイ』
「わーい、卵酒、卵酒」
カーテンの向こうから、みのりのはしゃぐ声が、かすかに聞こえてきた。
やがて、みのりの部屋の電気も消え、あたりが急に静まり返った。
空は降るような星の海だ。
星の動く音すら聞こえてきそうな夜、というのは、今夜のようなことを言うのだろう。
猫ヶ丘は平和な眠りについている。
その平和を、かき乱そうとする存在が、上空から悪意ある視線をそそいでいることなど、つゆほども知らずに……。

2

その船は、二百万光年の距離をこえて、やってきた。

見るからにいかがわしい形をした船体の中には、十七名の、これまた見るからにいかがわしい連中が乗っていた。
開きっぱなしの口からは、たえずよだれをたらし、緑色ににごった二対の眼と、一対の触手が、頭の上にとび出していた。もっとも、そこが頭だとしての話だが。
地球の生物で一番似ているものを探すとしたら、ひからびたイボトカゲがそれにあたるだろうが、そんなことを言ったら最後、ひからびたイボトカゲから絶交されそうな、まあ、そういったシロモノだ。ひと昔前の怪奇映画で、美女の着ている薄物をはぎとるのが趣味だった（そのくせ、肝腎な時になると、安っぽいヒーローとかに、手もなくやられていた）連中に、この手の顔をよく見かけたものだが、実物の方もそいつらと大差ない精神構造をしているようだった。
『ゲゲ、ゴケケ、グゲ』
『グコ。ゴケゴケ、ケ？』
トカゲたちは、うす暗いブリッジの中で、トカゲ語で喋っている。まあ、だいたい、こんなような意味だ。
「潜入成功。気づかれた様子はありません」
「そうか。耐視フィールドはおろしたな？」
「はい、艦長閣下」
「よしよし」
艦長トカゲは、満足そうに喉を鳴らした。

「地上のモニターを出せ」
「はっ」
ブリッジの中央に、上空から見た猫ヶ丘の映像が映し出される。
「惰眠をむさぼる愚かな原始生物どもめ。すぐにお前たちは、偉大なる我らが皇帝陛下の奴隷となるのだ」
「手はじめに、ひとつふたつ、連中の都市を蒸発させてやりますか？」
副官トカゲが訊ねた。
「いや、まて。その前に、この星の詳しい情報を手に入れるのだ。誰でもいい、地上の生物を標本として、かっさらってこい」
「実は、私めもそう考えまして、つい先ほどこの惑星の支配種と思われる生物を一体、重力ビームでとらえておきました」
「気がきくな。よし、部下その一、さっそく、ここへ連行しろ。心理スキャナーにかけて、この星の情報を洗いざらい、吐き出させるのだ。部下その二は、どこか着陸できる場所を探せ。それから、部下その三からその十六は、変装マシンの用意を急げ！」
「ははっ！」
とたんに、狭いブリッジの中を、十六匹のトカゲたちが右往左往しはじめた。
うんざりするような眺めだった。
数秒ならずして、標本がブリッジ中央に引きずられてきた。ひきずってきたのは、さっきの副

官トカゲらしいが、あまり自信はない。トカゲの人相のちがいなど、トカゲでもないかぎり、わかりっこないからだ。第一、トカゲ自身ですら、はっきりわかっているのかどうか、あやしいものだ。

「こいつか？」

艦長トカゲが言った。

「はい」

「ふーん」

艦長トカゲは、下から上へ閉じる四つのまぶたを半眼にして、その標本を見おろした。ぴくっと触手が動き、鼻先にしわが寄った。

「いかがいたしました？」

「いや。なんとなく、気にくわんやつだな」

「は？」

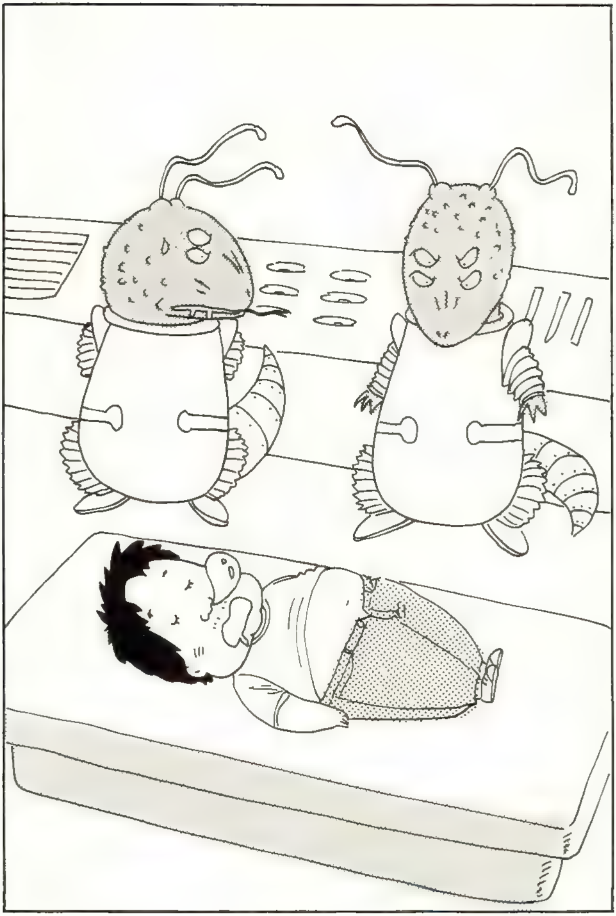
「どことなく虫が好かん」

「はあ」

「この星の生物は、みんなこのような姿をしているのか？　ぶよぶよとふくれてて、目は二つっきりしかないくせに、指は五本もある。それにウロコはどうしたんだ？」

「そう言われましても」

「本当に、こんなやつしかいなかったのか？」



「道を、ひとりでふらふら歩いておりましたので……」
「ふん」
ウロコ顔では、これ以上は無理だというくらい、艦長トカゲは顔をしかめてみせた。彼は、軍人としての本能で、その標本から漂ってくる災厄の匂いを、敏感に感じとっていたのである。
——こいつとかかわると、ロクなことになりそうにない。後で考えてみると、この時が、彼らにとって最後のチャンスだったのだ。
しかし、そのチャンスはすぎ去った。
「まあ、よかろう」
部下の手前もある。艦長トカゲは、おうようにうなずいてみせた。
「ところで、部下その一」
「なんでしょう？」
「こいつは、いつもこうやって寝そべって移動する生物なのか？　だとしたら、あまり役に立ちそうではないが？」
「いえ。捕獲した時は、ちゃんと二本の足で直立歩行しておりました。まあ、その点だけは、我我文明人と同じですな」
「じゃあ、いったい……？」
艦長トカゲが、口を開きかけた時——
ブリッジの中に、異様な音が響き始めた。猛獣のうなり声のようでもあり、間の抜けたサック

ス・ソロのような音でもあった。いずれにしろ、トカゲたちにとっては、生まれて初めて聞く音だ。

十七匹のトカゲたちは、緊張にさっとウロコをこわばらせた。

不安げに、あたりを見回す。

どうやら、その音は、例の標本が発しているらしい。

「な、なんだ、この音は。答えろ。部下その一！」

「はっ。少々お待ち下さい」

副官トカゲは、あわてて心理スキャナーのヘッドセットを、標本の頭にかぶせ、分析を始めた。

重苦しい三十分間が経過した。その間も、謎の大音響は停まらなかった。

「わかりました」

何か気抜けしたような表情で、副官トカゲが言った。

「なんだ？」

「これは、いびきというものらしいです」

「いびき？　なんだ、それは」

「つまり、この標本は、現在、熟睡状態にあるということらしいです」

「熟睡？　寝とるのか？」

「はあ」

「寝くさっとるのか！　この標本は！」

艦長トカゲが、大声でわめいた。
「どうやら」
副官トカゲが、小さくなって答える。
「標本を捕獲した時、こいつに意識はあったのか？」
「はい」
「その時の様子は？」
「笑っておりました」
「笑って……」
艦長トカゲは絶句した。――どういうことだ、これは？　いかに低級の知能しか持たぬ生物とはいえ、今、自分がおかれている状況くらいは、理解できるはずだ。今までに三万ちかい数の星を征服してきたが、こんな反応パターンを示した生物は、一度だってお目にかかったことがない。我々の姿を見たら最後、泣きわめき、命乞いをし、はては絶望のあまり自殺するものすら出る始末だ。それが普通だ。それこそ宇宙の常識だ。それなのに、笑うとは……。
艦長トカゲは、副官と顔を見合わせた。認めたくないことだが、二匹の目の中には、同じ感情が浮かんでいた。鉄壁の軍律と全戦全勝を誇る彼らにとっては、あってはならない感情――すなわち、畏れだった。
「ひょっとしたら、こやつら、とんでもない大物かもしれんぞ」
「はい。明日は、油断ができません」

完璧に勘ちがいをした二匹は、床の上でぐーすか寝ている、脳天気な標本を見つめて、うなずき合った。

3

あけて翌日——
朝からよく晴れた、気持ちのいい日曜日。
山下は、片手に花束、片手にケーキの箱をかかえて、口笛を吹きながら、足どりも軽く歩いていた。
坂道の上に、豪田篤胤科学研究所の建物が見えてくる。
玄関の前で、アレックスがホウキで落ち葉を掃除していた。
「よお、アレックス！」
『ア。コレハ、コレハ。山下サマ』
アレックスは、ホウキの手をとめて丁寧におじぎをした。
「みのりさん、いる？」
『ハイ』
「例によって、実験室の方かい？」

『左様デゴザイマス』
「ふーん」
山下は、左右を見回して、アレックスの聴覚器官に顔を近づけ、小声で囁いた。
「で、今度はみのりさん、何を作ってるんだい？」
『サア』
アレックスは、首をひねった。
『ソコントコハ、ゴ本人モ、ゴ存知ナインジャナイデスカ』
「やっぱり？」
笑いを噛み殺しながら、山下が言った。
「そこで、なにコソコソ話してるの。二人とも」
突然、真うしろで、みのりの声がした。
「や、やあ、みのりさん」
山下は、あわててふり返った。
みのりは、腰に両手をあて、頬をふくらませて、山下とアレックスを睨んでいる。
「えーと、つまり、その……、あれですよ。あれ。そうだよな、アレックス？」
『ソ、ソウ。あれデゴザイマストモ。エエ』
二人は、真面目くさって、こくこくとうなずいてみせた。
「ふーん」

みのりは、思いっきり疑わしそうな声を出して、二人を横目で見つめた。
『エー、私ハ台所ノ片付ケモノガ、残ッテオリマスカラ……』
そそくさと、アレックスが逃げ出す。
「あっ。ちょっ、ちょっと……」
「山下さん？」
アレックスのあとを追おうとした山下の前に、みのりがずいと立ちはだかった。
「あわわ」
山下が、心持ちのけぞる。
みのりが、不意に、にっこりと笑った。
「お久しぶりね、山下さん。元気してたー？」
「あ、ああ、はい」
ようやく息のできるようになった山下が、ほっとした表情で言った。
「ここんとこ、仕事がメチャメチャ忙しくってね。昨日、やっと雑誌が校了したんだ。それに、今日はいい天気だし。まあ、そんなわけで……。えーと、はい、これ」
と、花束とケーキの箱を差し出す。
「わーい。ありがと、山下さん♡」
みのりが無邪気に山下に抱きつき、山下は真っ赤になった。
「アレックスー。お茶と花瓶の用意をしてちょうだい。アレックス、どこにいるの。もう怒って

ないから、出てらっしゃい」
　カチンコチンになっている山下をその場に残して、みのりは家の中へかけこんでいった。
そのあとを、山下がぎくしゃくと続いた。右手と右足が同時に出ていた。

＊

「そういえば、今日はサトルさんいないのね？」
　いつもの応接室で、ケーキと紅茶を前にして、みのりが言った。
「ああ。サトルですか？」
　山下は、顔をしかめた。紅茶をひと口すすって、
「いないんですよ」
「いないってどういうこと？」
「さっきも言ったように、昨日、雑誌の校了で」
「猫又ジャーナル」
「そう。それでまァ、帰りにみんなで酒飲みに行きましてね、三軒くらい回ったかなあ。別れたのは、もう十二時回ってましたね。で、そのあと、どこへ消えたのか……」
　山下は、右手をパッと開いてみせた。
「へーえ」
「馬鹿に酔ってましたからね。たぶん、どこかの公園のベンチででも、寝てんでしょう」

「風邪ひかないかしら？」
「あいつに関するかぎり、その心配はありません」
山下は、きっぱりと言った。
「でも、昨日は、けっこう寒かったわよ。あたしも、星見てて、うっかり風邪ひきそうになったけど」
みのりは、卵酒の味を憶い出して、うふ♡　と笑った。
「はあ」
山下は、ぼんやりとうなずきながら、ティ・カップを口元に運んだ。
そのとたんに、
「あっ!!」
みのりが、突然立ちあがった。
「わち、わちち」
ひざの上に紅茶をこぼして、山下も飛びあがった。
「そうだ！　ねえねえねえ、山下さん。あたし、昨日、UFO見ちゃった」
「UFO？」
「うん！」
元気いっぱいうなずくみのり。
「すごいでしょ？」



「すごいですね」
山下は、一張羅のズボンについた、大きなしみを、なさけなさそうに見おろしながら、相槌を打った。
「それでね、そのUFOってのがね、山下さん……」

*

みのりが、意気込んで話し始めた、ちょうど同じころ。
昨夜のうちに、猫ヶ丘のはずれにある雑木林に着陸した、話題の主たちはというと……。
十七匹ともすっかり人間に化けて、猫ヶ丘の街を、ぞろぞろ歩いていた。
彼らの変装マシンは完璧だ。標本のどんな細かい部分も、完全にコピーできる。その上、彼らには、頭部の主脳の他に、腰のあたり尻尾のつけ根に、もう一つ副脳が備わっていて、標本から採取した、その星の情報(データ)を、そこに貯えておけるのだ。だから、言葉も習慣もその星の原住民そのままに行動できる。決してボロを出すことのないゲリラであり、スパイなのだ。彼らが無敵を自負しているのも、この能力によるところが大きい。
「おい。部下一号」
先頭を歩いている艦長トカゲが、口の端っこから、となりの副官に囁いた。
「なんでありますか、閣下」
まっすぐ前を向いたまま、副官トカゲが、囁き返す。

「我々の変装は、本当に完璧なのか？」
「もちろんです」
と胸を張ってみせる副官。
「眼が二つ、鼻が一つ、口が一つ。頭部に奇妙な体毛が集中的に生え、手の指は五本。——どこもまちがっておりません！」
「確信をもって断言できるか」
「できますとも」
「じゃあ、なんで、やつらは我々の方を、さっきからじろじろ見ておるのか！」
艦長トカゲが、語気鋭くたずねた。
日曜日のことで、人出は多い。その歩行者たちの十人が十人とも、彼らをふり返って通りすぎていくのだ。艦長ならずといえども、気になろうというものだ。
「やつらには、我々のような第六器官は、どこにも見あたりません。絶対にバレるはずはないのです。今まで一度だって、正体を見破られたことはないじゃないですか」
「う……。それはそうだが。しかし、気にいらんな」
「ひょっとしたら、歩き方がぎこちないのかも知れません。もっと何気なく歩くようにしたらいかがでしょう」
「そうか。——よし、全員、何気なく歩け！」
「閣下！」

「なんだ、部下その二」
「何気ない歩き方とは、いったいどういう歩き方でありますか？」
「そんなことは、自分で考えろ！」
部下のトカゲたちは、思い思いに、何気ない歩き方というものを工夫した。すなわち、ある者は、スキップしながら進み、ある者は踊りながら進み、ある者はカニのように横向きに進んだ。
「さっきより、よけいに注目されておるぞ。部下その一！」
よけいに、その一団が目立ちまくったことは、言うまでもない。
「はあ。しかし、目的地はもうすぐですから」
「本当に、この方角でいいんだろうな？　部下その一」
「まちがいありません」
「その、なんとか言う個体は……」
「ヤマシタセンパイです」
「そうだ。ヤマシタセンパイという個体が、この惑星で一番偉いというのは、確かなのか？」
「心理スキャナーで嘘はつけません。ここの住民にとってのヤマシタセンパイという名前が、我我にとっての皇帝陛下と同等か、それ以上の響きをもっていることは、深層意識をサルベージした結果でも、あきらかです」
「ふん」
艦長トカゲは、鼻を鳴らした。

「しかし、皇帝陛下と同等の個体が、なんであんな『あぱぁと』とかいう、小さな部屋(スペース)に住んでいるんだ？」

「さあ。ひょっとしたら、この種は群生生物なのかもしれません。あるいは、人口過密のせいかも」

「納得できる説明とはいえんな、部下その一」

「はあ……」

「部下その四！」

「はっ。何でありますか、閣下」

「飛びはねながら歩くのは、やめろ。そいつを落っことしたら、この惑星そのものが、こっぱみじんだぞ」

「はっ。かしこまりました」

部下その四は、持っていた大きな包みを、しっかりと抱きしめた。水玉の包装紙と赤いリボンで、きれいに包まれた四角い箱。その中に、地球をふっとばせるほどの反陽子爆弾が入っているとなれば、部下その四の顔が少し青ざめているのも、うなずける話だ。

「しかし、変わった作法だな。爆弾を飾りたてて敵におくるのが、宣戦布告とは」

「ぷろぽうず、とか言うそうで」

「わからん」

艦長トカゲは、力なく首をふった。――この星は謎だらけだ。防空システムも、保安システム

も、満足にない未開の惑星だというのに、この不安感は何だ？　我々の不敗の戦争マニュアルが、ミスを犯すはずはない。そんなはずはないのだ。

「閣下！」

「なんだ、部下その七」

「我々の後ろを、小さな個体が、たくさんついてくるのですが……」

艦長トカゲは、後ろをふり向いて、絶望的な気持ちになった。数十体の個体――おそらくこの種の幼生体だろうが、口々にはやしたてながらぞろぞろくっついてくるのだ。

「閣下！」

「なんだ！」

「見えてきました！　あれです。この惑星の中央政庁の建物です。あそこに連邦首席のヤマシタセンパイと、もう一人の最重要人物（MVIP）ミノリサンがいます！」

「よし！　全員、かけ足！」

人間に化けたトカゲたちは、いっせいに、豪田篤胤研究所に向けて、ころがるように走り始めた。

4

「というわけなの」
と、みのりが言った。
「へえ。だけど、そいつは人工衛星か何かじゃなかったんですかねぇ。あるいは、シャトルの航空灯とか」
「そうかしら」
「よく見まちがうんですよ」
「うーん、つまんないの。せっかくUFO見たって思ってたのに」
「まあ、いいじゃないですか。未確認だからUFOって言うんだし。それより、みのりさん、最近はどんな実験やってるんです?」
「それがねぇ……」
みのりは、顔をくもらせた。
「ここんとこ、スランプなのよ」
「それを聞いて、安心しま……、いやいや、そうですか、それはいけませんねぇ。あはは」
山下が、内心ホッとした気持ちを、懸命に笑ってごまかしていると、応接室のドアが開いて、アレックスが入ってきた。
『オ嬢サマ』
「なあに、アレックス?」
『さとるサマガ、十七名オイデニナリマシタガ……?』

「サトルが？」
山下が言った。
『ハイ』
「ははは。ね？　言った通りでしょ。あいつのことなら心配いら……な……」
山下の表情が、突然、凍りついた。首の関節がきしむ音が聞こえそうな感じで、山下はゆっくりとアレックスの方を、ふり向いた。
「ア、レッ、クス？」
『ハイ？』
「いま、なんて言った？」
『さとるサマガ……』
「そのあとだよ」
『十七名オイデニナリマシタ、ト。ソレガ何カ？』
廊下の向こうから、十七人分の足音が近づいてくるのが、山下の耳にも聞こえてきた。
『ア。コチラデス。さとるサマ』
アレックスが、横に動いた。
「あ、悪夢だ……」
山下が、茫然とつぶやいた。
次の瞬間、応接室は、サトルそっくりに化けた十七匹のトカゲたちで、いっぱいになった。

みのりも山下も、しばらくは口をあんぐりと開けて、ずらりと並んだ十七箇のサトルの顔を、ただ見回すだけだった。

*

たしかに、トカゲたちの変装マシンは完璧だった。——完璧すぎた。

寸分たがわぬ同じ顔、同じ体型の人間が、ぞろぞろと歩いてたら、目立たない方がおかしい。人間にトカゲの顔の見わけがつかないように、トカゲたちもまた、人間の顔の微妙なちがいが理解できなかったのである。

そして、もうひとつ、トカゲたちにとって不幸なことがあった。

「おい、部下その一」

一人のサトルが、そのとなりにいたサトルに、小声で耳打ちした。

「どうして、こいつらは、あんなに驚いているんだ?」

「なんでありますか?」

「それとも、この星では、こういう変わった挨拶の仕方をするのか?」

「わかりません」

「いえ。副脳のデータにも、そのような情報は……」

「標本は、この二人と親密な関係にあるんだろう?」

「さきほどの、召使いと思われるロボットの反応も、それを肯定しております。我々のやり方に、

そうだった。ひとつセキばらいをする。それから、副脳にインプットされた情報を素早く検索して、最も正しい対応策を引き出した。第六器官をあやつって、表情筋の人工神経に指令を発する。

サトルの顔に、唐突な笑いの表情が浮かんだ。

そして言った。

「どーも。ヤマシタセンパイ」

山下の顔色が、微妙に変化した。

「こ、こ、こ……」

こぶしをぶるぶる震わせながら、山下は大声で怒鳴った。

「この馬鹿野郎！」

十七人のサトルたちが、一様にとびあがった。

トカゲたちにとって不幸だった、第二のポイントがこれだ。地球に関する（ゆがんだ）情報と共に、サトル本人の条件反射までもが、副脳に刷り込まれてしまったのである。

――ヤマシタセンパイには逆らえない。

副脳が発する悲鳴に似た、おびえの感情が、トカゲたちを圧倒した。

「あ、あの……」

先頭のサトルが、顔をひきつらせながら、言った。自分たちを支配している、このわけのわからない感情をふりほどこうと、艦長トカゲは必死であがいていた。しかし……。

「黙れ！」

「はいっ！」

十七人が、いっせいに直立不動になった。

自分たちが、どうしてそんな行動をとっているのか、トカゲたちの誰一人として、理解している者はいなかった。ただ、そうしなくてはいけないという、なにかやむにやまれぬ感情が、本人たちの意志とは別のところで、働いていた。

山下は、先頭のサトルに、ひとさし指をびっとつきつけながら、言った。

「どういうつもりなんだ、サトル。ひとを、死ぬほどびっくりさせやがって」

「あの、ぼ、ぼくは……、いや、我々は……」

「なにが我々だ。——だいたい、その姿はなんだ。お前いつからアメーバになった。うじゃうじゃ分裂しやがって。また、ひろい食いでもしたのか」

サトルたちは、お互いに目を見かわした。額を寄せ合って、何事かひそひそと相談を始める。

山下とみのりは、なんとなく顔を見合わせた。二人とも頭の上のふき出しに、？マークをいっぱい羅列させながら、成り行きを見守った。

ひとしきり、ひそひそが続いた。それからようやく相談がまとまったらしく、先頭のサトルが、おずおずとした態度で切り出した。

「つかぬことをうかがいますが、我々の姿は、どこかおかしいですか？」
「おかしいですかって……」
山下は、あきれたような口ぶりで言った。
「お前、それでおかしくないとでも思ってるのか？」
「というと、やっぱり……」
「おかしいよ」
山下は、きっぱりとうなずいてみせた。
「十分おかしい。それだけおかしけりゃ、立派なもんだ」
サトルたちの間を、目に見えぬ動揺が走った。
十七人のサトルたちは、部屋のすみっこにかたまって、再び密談をおっ始めた。今度はかなり騒がしかった。
『我々の正体は見抜かれている！』
『なぜだ』
『どこで間違ったんだ』
『うろたえるな。まだ我々には反陽子爆弾がある』
などというような声が、きれぎれに聞こえてくる。
うんざりした顔で、その様子を眺めていた山下が、かたわらのみのりに小声で囁いた。
「みのりさん」

「なーに」
「あいつらが、何を言ってんのか、わかりますか？」
みのりは、肩をすくめた。
「でも、なんだか、いつものサトルさんとは、様子がちがうみたいね」
「まあ、元から人とは様子のちがうやつでしたからね。しかし、十七人に分裂するなんて、これほど非常識なやつだとは思いませんでしたよ」
「ほんとにね」
二人は、深くうなずき合った。
サトルたちは、まだわいわいやっている。
「あ〜〜っ、うるさい」
山下が、聞こえよがしの声で言った。
十七箇のサトルの顔が、いっせいにこちらをふり返った。
なんとなく気圧された感じで、山下は心持ち上体をのけぞらせた。
一人のサトルが歩み出てきて、言った。
「さすがは、ヤマシタセンパイ。我々の正体をひと目で見破るとは、敵ながらあっぱれな眼力」
「お前、熱でもあるのか？　それとも昨日の酒がまだ残ってるのか？」
「こうなったら仕方がない。このような変装も無意味となった以上は、正体を明かそう」
「変装？」

「そうだ。見て驚くな」
そう言って、サトルたちは背中のジッパーを引きおろした。
サトルだったものが、床にばさりと落ちた。
トカゲがあらわれた。
ずらりと並んだ牙の間から、二又にわかれた舌の先が、ぺろっとのぞいた。四つの眼がぎょろりと動いて、山下たちを見つめた。
山下は、あっさりと気を失った。
そしてみのりは……？
両方のこぶしを口元に、目を大きく見開いてトカゲたちを見つめていたみのりは、唐突にこう叫んだ。
「きゃあ♡　かっわいい〜〜〜っ！」

5

さて、ちょうどそのころ、異星人の船の中では――
「ふあ〜〜〜」
大あくびをしながら、サトルが身を起こした。きょろきょろと、あたりを見回す。

「ここ、どこだろう」
サトルは首をひねった。昨夜は、先輩たちと酒を飲んで、それから……？
必死で思い出そうとするのだが、そこだけポッカリと記憶から脱落している。雲の上でトカゲたちが腕を組んで、フレンチカンカンを踊っている夢を見ていたような気もするが、頭にかすみがかかったみたいで、はっきりしない。
おまけに、こめかみがズキズキしている。どうやら、ひどい二日酔いにやられたらしい。
「昨日は、よく飲んだからなあ」
片手を頭にあてて、サトルはつぶやいた。
しばらく、そうやって異星人の船のブリッジで、ぼんやりと座りこんでいたサトルは、突然、はっとなって立ちあがった。
「しまった。今日は、山下先輩とみのりさんちへ行く約束をしてたんだ！」
サトルは、あわてて出口を探した。しかし、その部屋は、壁といわず天井といわず、奇妙な形をしたわけのわからない装置類でうずまっており、扉らしきものはどこにもなかった。それどころか、全ての装置類には、それをコントロールすべき、いかなる形のスイッチもついていなかった。
この船は、全て思念波によって、コントロールされていたのである。
「困ったな」
サトルは腕時計を見ながらつぶやいた。

「約束の時間をとっくにすぎちゃってる。早く行かないと、また先輩に怒鳴られるぞ」

＊

一方、こちらは、豪田邸。
みのりが、いそいそと十七人分のお茶の用意をしながら、楽しげに喋っている。
「まあ、そうなの。アンドロメダからわざわざ？　それは大変だったわねえ」
「はあ」
トカゲたちは、なんとなく勝手がちがうのか、あるいは例の条件反射のためか、妙に固くなっている。
「だけど、なぜ銀河系へ？」
「アンドロメダ星雲は、全て征服してしまいましたから……」
「未知の領域にいどむってわけね。へえ、素敵ねえ」
「素敵……ですか？」
「素敵よお。いろんな星に行けるんでしょ？」
「ええ、まあ……」
「いいわねえ。はい、お茶をどうぞ」
「はあ……」
艦長トカゲは、ティ・カップを三本のカギ爪で、持ちにくそうに支え、ちらっと隣の副官をふ

り返った。
「我々の代謝系に、悪質な影響はないようです」
副官がうなずいてみせる。
「さあ、ケーキもあるわよ」
みのりが、山下の持ってきたストロベリー・タルトを切りわけながら言った。
それを横目に見ながら、艦長は囁いた。
「部下その一。これはどういうことだ？」
「さあ、見たところ、どうも我々を歓迎しているように、私には思われますが」
「ひょっとしたら、罠かもしれません。我々を油断させるための」
「わしもそう思う」
「うむ。はっきりと、我々の意志を伝える必要があるようだ」
艦長トカゲは、ティ・カップをテーブルに戻すと、あらたまった口調で切り出した。
「ミノリサン」
「はい？」
「重大なお話があるのです」
「なに？」
「我々が、この星にやって来た目的は、宣戦布告（よろぼうず）にあるのです」
みのりは目をパチッとさせた。

「そして、これが反陽子爆弾です。おい、部下その四」
「はっ」
部下その四が、リボンで飾られた大きな箱を、みのりに差し出した。
みのりは、きょとんとした表情のままだ。
「降伏か、全滅か。選ぶのはあなたです」
艦長トカゲは、じっとみのりの目を見つめて言った。
「困ったわ」
みのりは、本当に困ったような顔をして言った。
「そうでしょうとも」
「そんなこと言われても、あたし、あなたのことよく知らないし……」
今度は、艦長トカゲの方が黙りこむ番だった。
「生れてくる子供も心配だし」
と、みのりは続けた。
艦長トカゲは、副官と顔を見合わせた。
「それに、お互い生れ育った環境がちがいすぎるって、よくないと思うの」
みのりは、スカートのはしをいじり回しながら言った。トカゲたちの間で、ひそひそ話が始まった。
「なんですって？」

「別に、あなたが嫌いってわけじゃないのよ。だけど、やっぱり、せめて最初の結婚は、同じ種族同士の方が、いいと思うの」
「あのー」
「次元漂流中の両親も、きっとその方がいいって言うわ。最近会ってないけど」
「あのね、ミノリサン?」
「だから、せっかくのお申し出だけど、一応この話はなかったことに……」
トカゲたちの間で、ざわめきが大きくなった。
「断わると言うんですか?」
みのりは、うつむいたままで、小さくうなずいた。
「わかった。それが貴国政府の返答だな」
トカゲは、立ちあがって言った。
「部下その四。反陽子爆弾（ぶれぜんと）をセットしろ。爆発時間は、この星の一自転周期に合わせろ」
「はっ」
部下その四が、包み紙を乱暴にひきはがした。中から、バスケットボールほどの大きさをした黒い球体が現われる。なにか、凶々しい印象だ。トカゲの頭の上についている第六器官（触手）が震え、球体の表面に赤い光が点滅を開始した。
「この反陽子爆弾（ぶれぜんと）は、第六器官のないお前たちでは、絶対に停めることは不可能だ。考え直すなら早い方がいいぞ」

思いきり冷酷な声を出して、トカゲが大見得をきった。
「これ、爆発するの？」
みのりが言った。
「もちろんだ。星をまるごとひとつふき飛ばせるほどの力がある」
トカゲは胸を張った。そのせいかどうか、彼はみのりの瞳がきらきら輝いている事に、気づかなかった。みのりは言った。
「これ、あたし、もらっていいの？」
トカゲは一瞬妙な顔をしたが、すぐに重々しくうなずいた。
「わーい♡」
歓声をあげるなり、みのりはその黒い球体をかかえあげて、ぴょんぴょんとびはねた。
「あっ。ちょ、ちょっと、そんなに乱暴にすると、あっ、爆発する。あっ、やめろ。やめるんだ。やめて下さい、ミノリサン！　それは、時間が来なくてもショックを受けると、反陽子のバランスがくずれて……あっ、あっ」
うろたえて叫ぶトカゲの言うことなど、みのりはまるで聞いていない。爆発するものが生まれつき大好きなのだ。なにしろ、三歳の春に、見ようみまねで最初に作ったのが、一ギガトン水爆だったくらいだから。もっとも、その時は、裏庭で爆発実験をやらかそうとして、父親にこっぴどくしかられたものだが。
「い、いかん。退避しろ。すぐにこの星を離れるんだ！　まきこまれるぞ！」

トカゲたちは、すっかり浮き足だって、ばたばたかけ回り始めた。
その騒ぎで、気絶していた山下が目を覚ました。
とたんに、体の上を走り回っているトカゲが視界に入る。
「ぎゃっ！」
山下は、天井近くまで飛びあがった。山下は子供のころから、カエルとかトカゲとかヘビとかが、大嫌いだった。特に、ぬめっとしたあの白い腹を見ると、じんましんが出るたちだ。
「み、みのりさん！」
「あら。今、お目ざめ、山下さん？」
「こ、これは、どういうことなんです？　あいつらは、一体何者なんですか？」
山下は、マントルピースの上にかけあがって、体中をボリボリかきながら言った。
「アンドロメダから来たんだって」
「アンドロメダ?!」
山下が素頓狂な声をはりあげる。
「じゃ、宇宙人？」
「そう」
「わかった！　やつら地球を侵略に来たんでしょ。どうも兇悪な顔をしていると思ったら」
「やぁねえ。ちがうわよ」
「じゃ、なにしに来たんです？」

「それは、ヒ・ミ・ツ」
みのりは、うふ♡　と笑った。
「でも、これオミヤゲにもらっちゃった」
「なんですか、それ」
「惑星を丸ごとふっとばせるくらいの、爆弾だって話よ。あたしが、こーゆーの大好きだってこと、ちゃんと知ってたのね♡」
山下の顔が、サーッと青ざめた。
みのりの手の中で、もてあそばれている黒い球体から、目が離せなくなる。みのりは、反陽子爆弾を、空中に投げあげては受けとめ、空中に投げあげては受けとめ、空中に投げあげては受けとめ、空中に投げあげては受けとめ……そこなった！
球体の動きにつれて、視線を上へ下へと動かしていた山下と、トカゲたちが、いっせいに悲鳴をあげた。
反陽子爆弾は、床に落っこちた。
山下は、ぎゅっと目を閉じた。
静かだった。あまりにも静かだった。
——おれは、もう死んだんだろうか？
山下は、そっと片目をあけてみた。
「やーね、手がすべっちゃった」

気楽な表情で、みのりが床の上から、反陽子爆弾をひろいあげた。
全員がため息を吐き出した。
次の瞬間――
ぐわっしゃ〰〰ん!!
豪田邸をゆるがす、大音響が鳴りひびいた。
みのりが、爆弾を持ったままかけ出していった。
実験室の天井をぶち抜いて、例の宇宙船が床に半分めりこんでいた。外鈑のところどころが裂けて、白煙が立ちのぼっている。
「実験室の方だわ！」
「なんだ、こりゃあ」
あとからついてきた山下が、思わず大声を出した。それに答えるように、すぐそばで艦長トカゲが、茫然とつぶやいた。
「我々の、宇宙船が……」
山下は、あわててとびのいた。
みのり、山下、十七匹のトカゲたちが見守るなか、宇宙船の残骸から、サトルがすすだらけの顔をのぞかせて、言った。
「やあ、先輩。みのりさん。お茶の時間にはまにあいましたか？」
「サトルさん、無事だったのね？　風邪ひいてない？　卵酒あるわよ」

と、みのりが言った。
「お前、本物のサトルだろうな？」
と、山下が言った。
「我々の船に、なにをした！」
と、トカゲが言った。
「妙なものをつくりましたね、みのりさん。口をきくトカゲなんて、なかなか珍しい」
サトルがのんびりと答えた。
「そんなことを聞いてるんじゃない！　我々の船に、いったいなにをしたのだ！」
「なんにも」
サトルは、首をふった。
「ただ、早くここへ来なくちゃと思ったら、船が勝手に動き出したんだよ。第一、ぼく、これが船だってことすら、今はじめて知ったんだ」
ウロコだらけの顔で、絶望感を表わすのは非常に困難な仕事だ。しかし、艦長トカゲは、かなりうまくやった方だろう。彼は弱々しい声で、部下たちに船の被害調査を命じた。
「メイン推進システム、大破！　出力〇パーセント！」
「サブ・システム。全く作動しません！」
「航法装置も破損しています！」
「生命維持装置、出力三十パーセントに低下！」

部下たちから報告を受けるたびに、艦長トカゲは、百年ずつ年をとっていた。
「艦長！　ダメです。船を修復できる見込みは、全くありません！　我々は……、この星に島流しです！」
「島流し……」
艦長トカゲは、がっくりと肩を落とした。尻尾も元気なくたれ下がる。それから彼は、はっとしたように、顔をあげた。
「反陽子爆弾！」
副官と顔を見合わせる。
「すぐに、作動を停止させるんだ、部下その一！」
「はっ」
副官トカゲは、反陽子爆弾の行方を目でさがした。
「ね？　ほら、すごいでしょ」
「いや〰〰、ほんとですねえ」
みのりとサトルの明るい歓声が聞こえた。
副官は、そっちの方へ首を回し、そして心の底から恐怖の悲鳴をあげた。
みのりの手の中で、反陽子爆弾が、今まさにバラバラにされんとしていた。
「ほら、これがね……」
みのりは、爆弾のケースの中から、たくさんのコードでつながったひとかたまりの装置を引き

ずり出しながら言った。
「爆弾の制御装置なの」
「やめろ！　それを外すと……！」
副官は絶叫した。
しかし、その叫びも空しかった。
ぶちっ。非情な音が、実験室にこだました。
みのりは、制御装置をひきちぎった。
——もう、だめだ。
副官トカゲは、へたへたと座りこんだ。——これでもう信管の活動を停める手段はなくなった。反陽子爆弾は一分後に暴発する。この星も、我々も、道連れだ。こなごなだ。
一方みのりは、トカゲたちの恐怖など、どこ吹く風。平気な顔で、どんどん爆弾を分解した。
「ほらね、で、これとこれを外して、これをこうすると」
十秒がすぎ、二十秒がすぎ、三十秒がすぎた。
「ここんとこが、ポイントなのよ」
みのりは、眉の間にしわをよせ、爆弾の先に、手をつっこんで、米をとぐみたいな格好で、内部をかきまぜた。
四十秒がすぎ、五十秒がすぎ……、
「九、八、七、六、五、四……」

トカゲたちは、全員目をとじて、己れの残り寿命を数えた。
「三!」
「二!」
「一!」
「終ったわ。ね? 簡単なもんでしょ?」
あっけらかんとした、みのりの声が響いた。
「いやあ、見事なもんですねえ」
サトルが、感嘆の声をはりあげた。
山下だけが、そっと額ににじんだ汗を、手の甲でぬぐった。
床に集団でへたりこんでいるトカゲたちに、みのりはにっこりと微笑んだ。
「とーっても、おもしろかったわ。ありがと」
まさに、この瞬間である。
アンドロメダ星人たちの心に地球人類に対する、絶対的な敗北感が決定づけられたのは。

*

みのりが、いとも簡単に直してしまった船で、トカゲたちがアンドロメダ星雲へ帰っていったのは、その三日後。
やがて、アンドロメダ帝国は、一方的に無条件降伏し、三千人近くからなる代表団を、送りこ

んできた。巨大な宇宙船から降り立ったアンドロメダ星人たちは、ひとりのこらず、サトルの姿をしていた。

地球連邦政府は、困惑を隠しきれないでいるという。

第七話　ブラックホールだぜい！

1

「おでかけですか」
カンヅメを百箇も買い込んでいるみのりに、乾物屋の親爺が、いぶかしげな声で訊ねた。
「ええ、ちょっとそこまで……」
みのりは、にっこりと笑って答えた。
「ブラックホールを見物に、ね♡」
山ほどのカンヅメをかかえて、うきうきした足どりで帰っていくみのりの後ろ姿を、親爺は、しばらくの間ぼおっと見送っていた。
角を曲がって、みのりが見えなくなった。
「まさかね……」
どことなく弱々しげな苦笑を口元に浮かべて、親爺は首をふった。うつろな目つきのまま、機械的に商品棚の整理を始める。

彼は知らなかった。

こと、みのりに関しては、『まさか』などという言葉は、一切通用しないということを。そして、世の中には知らない方が幸せだってことも、いくつか存在しており、その内の一つが、みのりの『まさか』だということを。

＊

「まさかねえ……」

サトルが呟いた。

「なんか言ったか？」

山下が、上の空といった口調で、問い返す。

豪田家の、いつもの応接室である。

いつもの二人組である。

ご愁傷さまと言うべきであろう。

テーブルの上には、ついさっきまでは、アレックス手作りのクッキーが盛られていた空っぽの皿と、これまたついさっきまでは香り高いオレンジ・ペコで満たされていた、空っぽのティ・ポットが置いてあった。

『すぐ帰ってくるから、ちょっと待っててね』

そう言って、みのりが外出してから、すでに小一時間たっていた。

世にも不幸なめぐり合わせに生まれついている二人は、手持ちぶさたな様子で、お互いにおもしろくもない顔をつき合わせて、座り続けている。
未練たらしく、紅茶の最後の一滴をすすって、サトルが言った。
「ねえ、先輩」
「なんだ」
手の中で、まだ封を切っていない煙草のパッケージをもてあそびながら、山下がめんどうくさそうに答えた。――禁煙した方がいいだろうか、どうだろうか。山下は、最近、真剣に考えていた。編集長代理となって、急に喫煙量が増えた山下であった。中間管理職の悲哀というやつが、妙に納得できる今日このごろなのだ。
一方、悲哀などという感情とは、およそ縁遠いサトルは、委細かまわず言葉を続ける。
「まさか、とは思うんですけどね」
「なにが、まさか」
「いえ。みのりさんですよ」
サトルは、急に声をひそめた。ぐっと身をのり出して、あたりをはばかるように囁く。
「まさか、みのりさん。ブラックホールを買いに行ったんじゃないでしょうね?」
山下は、煙草のパッケージから目をあげて、テーブルの上につき出された、サトルの真剣そのものの顔を見つめた。無言、である。
露骨に、『お前、アホか』という表情だ。

「いや、その……」
サトルが、もじもじした。
「お前な」
山下は、全く表情を変えずに言った。
「いったい、この世のどこに、ブラックホールを売ってるような店があると思ってるんだ？」
「魚屋……」
サトルが、おずおずと言った。
「には売ってないですよね？」
山下は、うんざりした感じでうなずきながら、言った。
「売ってないだろうな。ついでに言っておくと、肉屋にも売っていない。八百屋にも売っていない。驚くなかれ、二十四時間営業のスーパーマーケットにすら、売って、いないんだ」
「売って、いないんですか」
サトルが、目を丸くする。
「売って、いないんだ」
山下は、これ以上はないというくらい厳粛な顔つきで、きっぱりうなずいてみせた。
「じゃあ……」
と、サトルは眉を寄せた。
「みのりさんは、なにしに出てったんですかね？」

山下は迷った。『おれが知るか！』と怒鳴りつけてやろうか、それともこいつの間抜け面のど真ん中を、ぶん殴ってやろうか。

その時——

「ごめんなさぁい。遅くなっちゃって」

応接室に、みのりがかけこんできた。

息を切らし、両手に持ちきれぬほどの荷物をかかえている。

山下とサトルは、半分ソファから腰を浮かすような格好で、口々に言った。

「なんですか、その大荷物は」

「まさか、それがブラックホールじゃあないでしょうね？」

「よいしょっと♡」

みのりは、二人の問いには答えず、ほとんど投げ出すような感じで、荷物をテーブルの上におろした。

乾物屋の紙袋が破れて、大量のカンヅメが床に散らばった。

足元にころがってきたカンヅメを、ひとつ拾いあげて、サトルが首をかしげた。どうしてもわからないという口調で、サトルは山下の耳に囁いた。

「ねえ、先輩。いったい鯨の大和煮が、ブラックホールと、どんな関係があるんですかね」

山下は、サトルを完全に無視して、みのりに訊ねた。

「みのりさん。なんなんです、このカンヅメの山は？」

「あら、カンヅメだけじゃないわよ」
みのりが、あかるく応える。
「カンパンだってあるし、レトルトのごはんやおみそ汁。NASA印のフルーツ・パックだってあるのよ。すごいでしょ」
「はあ……」
どこがどうすごいのか、さっぱりわからなかったが、山下はとりあえずうなずいてみせた。テーブルの上には、ありとあらゆる種類の、いわゆる非常食がそろっていた。バーゲンができそうな量だ。その意味では、たしかにすごいと言えなくもないが……。
「だけど、こんなにたくさん、どうするつもりなんです？　ぼくたちは、ブラックホールを……」
「あら。わかってるわよ」
みのりが、言った。
「これはね、万一の時の非常食。だってねえ、知ってる、山下さん。ブラックホールって、すっごく遠いところにあるのよ。おなかすくじゃない」
「はあ、それくらいは、ぼくにも見当はつきますけどね。しかし……」
しかし、ブラックホールを見つけにいくのに、こんなハイキングに行くみたいな準備が、いったい何の役に立つのだろう？
そんな山下の疑問にはおかまいなく、みのりが宣言した。

「さあてと。準備もできたことだし、そろそろ、ブラックホールを見物に行きましょ」

2

事の始まりは、こうである。

山下たちは、『猫又ジャーナル』の中で扱う、科学関係の小さなコラムの事で、みのりに相談をもちかけた。

『今度は、天文学あたりを取りあげようと思うんです』

と、山下は言った。

その時、サトルがうっかり口をすべらせてしまったのである。

『ぼく、一度でいいから、ブラックホールってやつを、この目で見てみたいですねえ』

サトルは一応、『猫又ジャーナル』のカメラマンを兼ねていたから、ブラックホールの写真でも撮れれば、特ダネだと考えたらしい。

『お前な、ブラックホールがどんなものなのか、知ってて言ってるのか？』

山下は、呆れたような声で、サトルをふり向いた。

ところが、

『あら、そんなの簡単よ』

と、みのりは軽くうけあってしまったのである。
『ほんとですか？』
サトルが身をのり出した。
『なんなら、今からちょっと見に行ってみる？』
近所の公園に、花見にでも出かけるみたいな口調で、みのりが言った。
『ぜひ！』
と、サトルがいきごんで言った。
そして、『じゃあ、ちょっと待っててね』となったわけだ。が……。
ブラックホールってのは、ちょっと見にいったりできるもんなんだろうか……。山下はみのりが、また何か恐ろしいカンちがいをしてるんじゃないかと思って、内心ひやひやしていたのである。
そこへ、カンヅメの山だ。
「あの、みのりさん……？」
すっかりお出かけ気分ではしゃいでいるみのりに、山下がささやかな疑問を呈しようとしたとしても、それは責められるべきではないだろう。
しかし、山下の思惑とはまるで無関係に、事態の方は、どんどん勝手に進展していたのである。
「装甲板閉鎖！」

みのりが叫んだ。
なにやら重々しげなモーターの音が、遠く聞こえてきた。
美しい庭の風景が見えていた応接間の窓が、鋼鉄のシャッターで徐々にふさがれていく。
「え？」
山下は、そのありさまを、目ン玉を落っことさんばかりにして見つめた。
「全館、外宇宙モード！」
みのりの声に合わせて、応接室の模様がえが、自動的に行なわれた。
天井から、巨大なマルチスクリーンが降りてきた。
マントルピースのあった壁が左右に開いて、いかにもメカメカしい、コンソールパネルが現われる。コンソール上のさまざまの計器やメーター類が、次々と点灯し、巨大なエネルギーの存在を感じさせるハム音が、次第にその高さを加えていく。
「え？　え？」
茫然と立ちつくす山下とサトルの足元で、ソファがくるりとひっくり返って、床下からGシートがせりあがってきた。
「え？」
「各室、隔壁閉鎖！」
廊下の方から、腹にひびくような『ずしん！』という音が、いくつも聞こえてくる。
『モード変換、完了！』

いきなり、コンソールパネルから、コンピュータの合成音が、とび出した。
「OK。二人ともシートについて」
「え？」
「え？」
すっかり様がわりした応接室を、二人はただきょろきょろと見回すばかりだ。
無理もない。
リビング・ブックのグラビアにでも出てきそうな古典的な応接室が、あっという間に、超ハイテックなものに一変してしまったのだ。まるで……そう、まるで宇宙船のコクピットみたいな……。

いや、そんな馬鹿な。
いやな想像を打ち消すように、山下はぶるっと頭をふった。
何度も唾をのみこんで、山下は、おそるおそる訊ねた。
「まさか、とは思うんですが、なんかこれ、宇宙船の操縦室みたいに見えるんですけど……？」
「あら。まさかじゃないわ。宇宙船だもん」
みのりが、あっさりと山下の希望を打ちくだいた。
「え……？」
「宇宙船なの！　この家全体が」
山下の顔から、音を立てて血の気がひいていった。

地の底からわいてくるような、低い震動が、かつて応接室だったその部屋を満たした。
『推力上昇百二十万トン。秒読ミニ入リマス』
合成音が、無慈悲に響く。
『打チ上ゲマデ、Tマイナス六十秒。五十九。五十八……』
それを聞いたとたん、山下は尻尾をふんづけられた猫みたいに、ぎゃっと言って飛びあがった。
扉にとりついて、わめく。
「出してくれ〜〜〜っっ！」
「無駄よ。打ち上げ中は、全ての隔壁は、ロックされてるわ」
さあ、観念しろと言わんばかりのみのりの声。
「あ……」
山下は、ずるずると扉の下にへたりこんだ。
「さあさあ、山下さん。早くシートについて。人間あきらめが肝心よ。ブラックホールを見にいくんですからね。サトルさんをごらんなさいよ」
みのりは、シートに座っているサトルを指さしてみせた。しかし、サトルが単に気を失っているだけだということには、気づかなかった。
遠雷のような低周波音が、徐々にのぼりつめていく。
『Tマイナス、三十秒』
コンピュータが告げた。



山下は、がっくりと肩を落とし、はうようにしてシートに座りこんだ。
全てをあきらめた様子で、両目をしっかりと閉じ、シートのひじかけを力いっぱい握りしめた。
ふと目を開けて、となりの席のみのりをふり返る。
「この家は、昔からこんな仕掛けになってたんですか？」
「まさか」
と、みのりが前を向いたまま答えた。
「あたしが改造したのよ」
「やっぱり、いやだ〜〜〜っっ！」
山下は、悲鳴をあげてシートから飛び出そうとした。しかし、時すでに遅し。
低い雷鳴が、一気に耳をつんざくような轟音と化し、打ち上げ時の加速Gが、山下の体をシートに叩きつけた。

＊

猫ヶ丘の街に住む人々は、子々孫々にまで語り伝えることだろう。
丘のほぼ頂上に位置する豪田篤胤科学研究所の建物そのものが、土台から火を噴いて、ゆっくりと上昇を始め、やがて一本の白い煙を残して、青空のかなたに消え去っていったさまを。

3

「もうすぐ、大気圏を出るわよ」
シートに半ば横たわる格好のみのりが、HUDを見つめながら、言った。
「なるほど」
魂を抜かれたような声で、山下がうなずいた。
――おれの人生。
と、山下は思った。
――おれの編集長代理の椅子。おれの古レコードのコレクション。
地上に残してきた全ての事どもが、今やなつかしかった。
「元気ないわね、山下さん」
みのりが、声をかけた。
「まるで、これが永遠のお別れみたい」
きゃらきゃらと笑う。
山下は、深いため息をついた。
「心配しなくても大丈夫よ。うまくいけば夕食には間に合うように戻ってこれるから」
「ほんとですか？」
山下は、目を輝かせた。わらにもすがりたいという気持ちは、こういうことを言うのだろう。

「ほんとほんと」

みのりは、相変わらずあかるい。

山下は、ほんの少しだが、安心した。しかし、それも長くは続かなかった。

Ｂｅｅｐ！

突然、警報が鳴り響き、山下の心臓をつき刺した。歯医者の使うドリルみたいな、嫌な音だった。

『警告。警告。本館ノ軌道上ニ、障害物』

「なんですって？」

『座標、プラス○度。高速デ接近中！』

「プラス○度ってことは……、真っ正面じゃないの！」

さすがのみのりも、あわてた声を出した。

「すぐ回避するのよ！」

『回避不能。十一秒後ニ接触シマス』

コンピュータが答える。

山下は、口の中で、あわててお祈りの言葉をつぶやいた。——父上、母上、先立つ不孝をおゆるし下さい。

「手動(マニュアル)に切り替えて！」

みのりが叫んだ。

Gシートのひじかけ部分に、コントロールが現われた。
みのりは、その中でもひときわ大きな、赤いボタンを、叩きつけるように押した。
緊急回避用の大出力バーニアが吼えた。
応接室が、激しくゆさぶられる。
ディスプレイの上では、二つの光点が、今にもひとつになろうとしている。
「速すぎるわ！」
みのりが悲鳴をあげた。
「間に合わない！」
両手で顔を覆った。
ディスプレイの上の光点が、ひとつに重なった。
つき上げるような衝撃が来た。
耳を聾する轟音。
そして、死のような静寂が、あたりを支配した。
応接室の灯りが、一瞬ブラックアウトする。
灯りが戻ってくる。
みのりは、指と指のすき間から、そうっとディスプレイをのぞき見た。
二つの光点は、早い動きでお互い逆方向へと離れていく。一方は上へ。一方は下へ。
みのりは、大きなため息をはき出した。そして言った。

「あー、びっくりした」
となりのシートをふり返る。山下が、もうおれは死んだんだと念仏のようにくり返しながら、目をぎゅっとつむって、横たわっていた。
みのりは、くすっと笑って、その肩をゆすぶった。
「山下さん。山下さんってば」
山下が、ぽかっと目を開いた。みのりの顔をじっと見つめ、やがて、しぼり出すようなかすれ声で言った。
「助かったんですか？」
生きているのが信じられないという口ぶりだ。
「間に合ったのよ。なんとかね。どこか接触したみたいだけど」
みのりは、可愛らしく肩をすくめてみせた。
山下は、安堵のあまり、一瞬気が遠くなりそうになった。だから、みのりが小声でこう呟くのを、山下は聞かなかった。
「だけど、どうして間に合ったのかしら？」
その時、
「ふあ〜〜〜」
後ろのシートから、サトルの大あくびが聞こえてきた。どうやら、さっきの衝撃で目がさめたらしい。

シートの背もたれごしに、こっちをのぞきこんでいる、山下とみのりの顔を交互に眺めて、サトルは言った。

「あれ？　ぼく、どうしたんだろう」

二人とも無言のままである。

「あっ、そうか。いつのまにか眠っちゃったんだ。いやー、変てこな夢を見ましたよ、先輩。ぼくと先輩が、みのりさんちの応接室にいるとですね、あっというまに家が宇宙船になって、空へ飛びあがっちゃうんです」

「ほーお。夢、ねえ」

山下が、白けた声で言った。

「だけど、さっきのは何だったんです？　地震ですか？　ばかに揺れたみたいだったけど」

山下とみのりは顔を見合わせた。

『引力圏脱出』

コンピュータが宣言した。

『めいん・えんじん停止。五分間ノ慣性飛行ニ入リマス』

とたんに、重力が消え去った。

「あれ？　あれ？」

サトルが珍妙な声をあげた。ふわふわと自分の体が浮きあがったのだ。

みのりが、黙って窓の外の装甲板を引きあげた。

漆黒の宇宙空間。
窓の半分を、青く輝いている地球のゆるい円弧(カーブ)が横切っていた。
山下が、言った。
「これでも、夢か？」
サトルは、再び気を失った。いともあっさりと。
山下は、ふんと鼻を鳴らして、みのりに向き直った。
「サトルの言い草じゃないんですけど、ほんとに、さっきのは何だったんです？」
「さあ。隕石かしら」
あまり興味のなさそうな声で、みのりが答えた。コンソール上のスイッチを、あれこれいじり回しながら、
「それとも、どこか他の国の宇宙船かもね。このへん、込んでるから。パイロットが居眠りでもしてたんじゃない？」
「あるいは、酔っ払い運転(かいい)か」
「規則を守らない人って、どこにでもいるもんよ」
やーねという感じで、みのりはちょっと顔をしかめてみせた。それから、ぱん、と手を叩いて言った。
「さて、これでよしと」
「何やってたんです、さっきから？」

「軌道の再計算。さっき、ちょっとぶつかっちゃったでしょ？」

『軌道再計算終了。重力場駆動ニ入リマス』

コンピュータの声と同時に、部屋に重力が戻ってきた。

どさっという音と共に、空中を漂っていたサトルが、床に落っこちた。あいててなどという声も聞こえてくる。

「お目ざめかね」

山下が、後ろをふり返って、皮肉っぽく訊ねた。

「ああ、先輩……」

サトルが間の抜けた声を出した。窓の外をゆっくりと遠ざかっていく、地球の姿を見つめながら、

「とても現実のこととは思えませんね」

「実に、当を得た言葉だな」

山下が言った。

「まさか、本当に家が宇宙船になってるとは……」

「そのまさかが、命とりさ」

「なるほどねえ」

「ところでみのりさん、ひとつ聞いてもいいですか？」

「なあに、山下さん」

「重力場エンジンがあるのに、なんで始めから、それを使わなかったんですか？」
「ああ、そのこと」
みのりは、あっさりと答えた。
「劇的な効果を狙ったのよ。——スリル満点だったでしょ？」
山下は、思わず椅子からころげ落ちそうになった。化け物を見るような目で、みのりを見つめる。
「あら、やーねー、本気にしたの？」
と、みのりが笑った。
「本当はね、あたしの作った重力場エンジンって、ちょっと強力すぎるのよ。だって作用フィールドの半径が、十キロメートルもあるんですもの」
「十キロメートル？　つまり、エンジンから十キロ以内にある物が全て、持ちあがっちゃうってことですか？」
「そう。たかがブラックホール一箇見にいくのに、猫ヶ丘じゅうの人たちを連れていっちゃ、やっぱりまずいじゃない？」
「それは、まずいでしょうね」
山下は大きくうなずいた。
「でしょお？」

みのりもうなずいた。

「まあ、ちょっとアクシデントもあったけど、あとはブラックホールに着くまで、のんびりおしゃべりでもしてればいいだけよ」

もちろん、それだけですむはずはなかった。

4

「あのー、みのりさん……？」

まず最初に、サトルが異常に気づいた。

「どうしたの、サトルさん。ぼんやりした顔しちゃって」

『ヴォーグ』から顔をあげて、みのりが訊ねた。サトルは、応接室の戸口につっ立って、茫然としている。

「台所へ行ったはずじゃなかったのか？」

山下が言った。

どんな時でも、食欲だけは忘れないサトルであった。

「いえ、それが……、ないんです」

サトルは、目をうつろに見開いたまま、のろのろと答えた。

「しょうがないやつだな。何度も来てるのに、迷子になったのか」
「いえ、場所は知ってるんですよ」
「じゃあ、なんだっていうんだ」
「つまり……ないんです」
山下はみのりと顔を見合わせた。みのりが言った。
「ないって、どういうこと?」
「台所のとこまで行ったんですよね。そしたら廊下に隔壁がおりてまして、どうしても開かないんですよ」
「おかしいわね」
「ええ。ぼくも、おかしいなと思って、どこか中をのぞける場所はないかなと……」
「モニターがあったでしょ、廊下の壁に」
「ありました。で、のぞいてみるとですね」
「どうしたの?」
「星しか映ってなかったんですよ」
その言葉が、二人の脳髄にしみこむまで、たっぷり三十秒はかかった。
「さっきぶつかった時……」
と、山下が言った。
「アレックス!」

みのりが叫んだ。どたばたとかけ出していく。そのあとを、山下もあわてて追った。
台所は、見事になくなっていた。
マニピュレーター付きの、外部モニターまで使って調べたのだ。まちがいない。
宇宙翔ける豪田邸から、台所のあった一画だけが、この家の主婦がわりと言ってもよい、助手ロボットのアレックスともども、きれいさっぱり削り取られていた。先ほどの、衝突事故のためである。
モニターには、がらんとなった台所の内壁と、それにへばりついている流し台の残骸が映し出されている。その映像を見つめながら、みのりが半べソで言った。
「アレックス、かわいそうに」
「すぐ引き返しましょう、みのりさん」
山下が言った。
「アレックスは死んだわけじゃ、いや、こわれたわけじゃない。多分、空気と一緒に外へ吸い出されただけですよ。うまくすれば衛星軌道に乗って、漂ってるかもしれない」
「そうね！」
みのりが、ぱっと顔を輝かせた。
大急ぎで、応接室へと、とって返す。
「エンジンを停めて！　すぐに地球に引き返すのよ！　それから、レーダーのレンジ・ブースターをONにしてちょうだい。アレックスを見つけなきゃ！」

『了解』
コントロール・パネルのLEDが、チカチカとまたたいた。一瞬の間があって、コンピュータが言った。
『れんじ・ぶーすたあ・ON。すうぃーぷヲ開始シマシタ』
みのりが、きょとんとした表情になった。
「あたしは、エンジンを停めてって言ったのよ！」
ひとしきり、チカチカが続いた。やがて、患者の臨終を告げる医者のような口調で、コンピュータが言った。
『制御不能』
「なんですって⁉」
みのりの声が、一オクターブばかりはねあがった。
みのりは、獲物にとびかかるライオンみたいな勢いで、コンソールにとりついて、あちこちのスイッチを操作し始めた。
事の重大さを感じた山下とサトルは、息を殺して、みのりの後ろ姿を見守った。
時計の秒針がひとまわりした。
みのりの動きが、ぴたっととまった。
重苦しい沈黙が、応接室を支配した。
「ど、どうなんですか、みのりさん」

山下が、こわごわと声をかけた。もちろん本当に答が聞きたかったからではない。聞かなくても、おおよその見当はついていた。単に、沈黙に耐えきれなくなっただけのことだ。

サトルが言った。

「ま」

山下も言った。

「さ」

二人が声を合わせた。

「か?」

みのりは、ふうっと大きなため息をひとつついて、ふり返った。

『不安』という文字が、ゴチック体で浮き出している山下とサトルの顔を、交互に眺め回し、そして、言った。

「困ったわ」

「どうしたんです」

「それがねえ……」

みのりは、言いにくそうな顔をして、もじもじと下を向いた。

山下が、かわりに答を出した。

「エンジンが、停まらないんですね?」

自分の死刑執行令状に、自分でサインするみたいな気分だった。

「実は、そうなの」

みのりが、あっさりと肯定した。山下は全身から、力という力が抜けていくのを感じた。手近かのシートに、がっくりと座りこむ。サトルの方も、ご同様だ。

「停まらないってことは、つまりどうなんです?」

「どうって、何が?」

「まあ、気にかけていただくほどのもんじゃありませんがね」

と、山下は投げやりな声で言った。

「つまり、ぼくたちの運命ってやつのことですよ」

「そうねえ」

みのりは、ちょっと首をかしげた。

「とにかく、ぜーんぜんコントロールできないのよね。どんどん勝手に加速してるのよ」

「ということは、このまま永遠に飛び続けるってことですか?」

サトルが、なさけない声で訊ねた。

「永遠、ってことはないでしょうね」

みのりが、なぐさめ顔で言った。

「いつかは停まるわよ。たとえば、どこかの星にぶつかるとか」

サトルが、わっと泣き伏した。

その様子を、横目に見ながら、山下が言った。

「原因は、やっぱり、さっきの事故ですか?」
「そうとしか考えられないわね。いくらそそっかしいあたしでも、ブレーキをつけ忘れるってことはないもの」
みのりは、胸を張って答えた。
しかし、すぐに気弱な表情になって、小さな声でつけ加えた。
「ない、と思うんだけど……」
山下は、ため息をついた。
「いっそのこと、エンジンをぶっこわしたらどうですか。加速は停まるでしょう」
「だけど、慣性でそのまま飛び続けるわよ。山下さん、今この家が、どれくらいの速度で飛んでるか知らないでしょう? それこそ永遠に戻ってこれないわよ」
そう言いながら、みのりはコンソール上の速度計に、ちらりと目をやった。
針はメーターを振り切っていた。
みのりは、目をパチパチさせた。頭をかいた。腕を組んで、またほどいた。
「どうしたんです?」
いやな予感というやつに、全身をさいなまれながら、山下が訊ねた。その声に含まれている不吉な響きに、サトルも顔をあげた。
みのりは、ひとり言のように言った。
「強力なエンジンだとは思ってたけど、これほど強力だと思ってなかったわ」

「どうしたんですか、いったい」
山下も立ちあがって、速度計をのぞきこんだ。即座に言った。
「計器の故障でしょう」
「そうじゃないと思うわ」
「だって、光速を越えてますよ」
「そうなの。変ねえ」
「しかし、そんな馬鹿な！」
山下だって、相対性理論くらい知っている。通常の方法では、物体は光速を越えられない。ワープ航法は、ここ とあそこを無理矢理くっつけて飛ぶから、一見光速を越えているように見えるが、実は単に空間的な近道を、普通の速度で飛んでいるにすぎないのだ。
「でもね、山下さん。ほら、あそこの時計、あれ船外時間用のクロノメーターなんだけど、見える？」
残念ながら、山下にも見えた。それは、めまぐるしい速度で回転していた。
「目の錯覚かな。逆回りしてるように見えるけど」
「錯覚じゃなくて、本当に逆回りしてるのよ」
みのりが、講義口調になって言った。
「物体が光速をこえるとね、山下さん、時間と空間の役割が逆転しちゃうの。要するに、空間を移動するかわりに、どんどん時間を逆行しはじめるのよ」

「それで、最後にはどうなるんです？」

サトルが口をはさんだ。

「さあ、どうなるのかしら。うん、これは興味深い問題ね」

まるで無責任な口調で、みのりはひとりうなずいている。

山下は泣きたくなった。

「だけど、ひとつだけ確かなことがあるわ。サトルさん、安心していいわよ。こうなったらもう、星にぶつかるなんてことはないから」

「えっ。ほんとですか？」

「ほんとほんと。だって、すでに宇宙空間を飛んでるんじゃなくて、時間の中を飛んでるんだもん。タイムマシンの衝突事故なんて、聞いたことないでしょ？」

「あっ。そうですね！」

とたんに、サトルが元気になった。そして言った。

「安心したら、なんだかおなかがすいちゃったな」

「カンヅメ買っといてよかったでしょう？」

みのりが、先見の明を自慢した。

「いやあ、まったくですね」

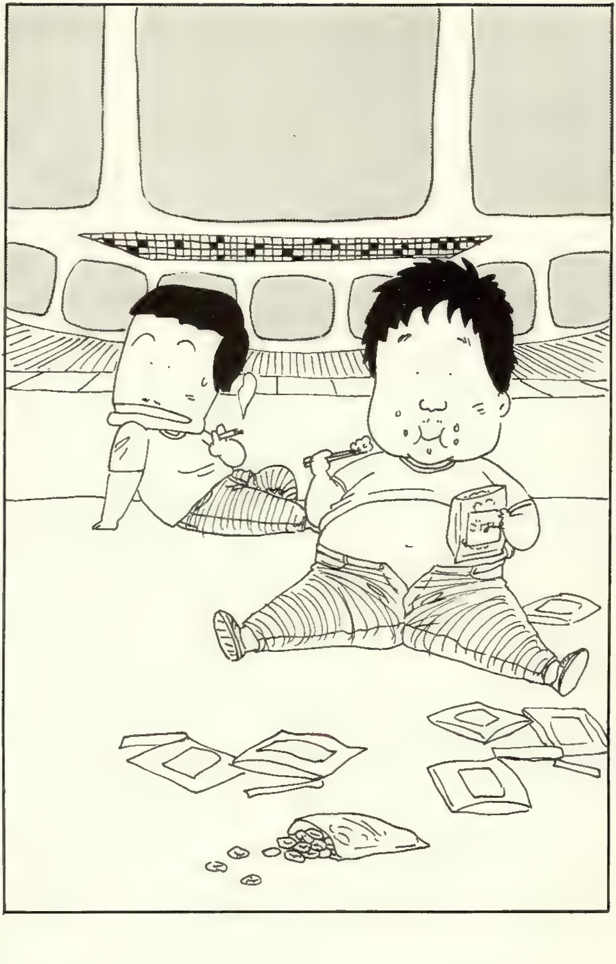
サトルが、ニコニコと笑った。しかし、次の瞬間――

「あっ」

みのりが、小さな叫び声をあげた。
「ど、どうしたんです？　また何かあったんですか？」
「困ったわ」
本当に困ったという表情のみのりを、山下とサトルは、思わず手に汗を握って見つめた。
みのりは、ぺろっと舌を出して、言った。
「カンキリ、忘れちゃった」

5

「しかし、なんですね、先輩」
口をもぐもぐやりながら、サトルが言った。
「この、冷えきったレトルト食品ってのは、信じられないくらいまずいですね」
「そうかい」
山下は、げんなりした表情で、うなずいた。目の前にあるカンパンにも、ほとんど手をつけていない。
「うーん、まずい。次は何かな？　お、五目ごはん。ごはんのレトルトってのは、ひとかたまりになってて、なんか食べにくいんですよねー」



とか何とか言いながら、サトルは嬉々として、パッケージを破り始めている。——これで、たしか八食目のはずだ（うぷ！）。
山下は、口元に運びかけていたカンパンをほうり出して、シートに寝ころんだ。そして、『禁煙なんざ、くそっくらえだ』と呟きながら、煙草のパッケージを乱暴にひきむしって、一本を口にくわえた。火をつける。
「ふーっ」
体の細胞のすみずみにまで、ニコチンが行きわたるようだった。
「ねえ先輩」
「なんだ」
「みのりさん、食べなくて平気なんですかね？　実験室にこもって、かれこれ三時間くらいたちますよ。おなかすかないのかなあ」
「だれかさんとはちがうよ」
天井を見つめたままで、山下が言った。
こわれたものなら、修理すればいい。簡単なことだ。なぜもっと早く、気づかなかったのだろう。なにも、あんなに大騒ぎするほどのことじゃなかったのだ。——ただ、ひとつだけ気がかりなのは、家がとっくに光速をこえて、なおもぐんぐん加速を続けているということだ。どうやら衝突のショックで、制御システムが完璧に狂ってしまったというのが真相らしいが、それにしても無茶苦茶なエンジンだ。このまま、時間を逆のぼり続けたら、いったい……？

山下は、不意に身を起こした。あたりをきょろきょろと見回す。

——なんだ？

山下は首をひねった。今、たしかに、なにか違和感のようなものを感じたのだ。

山下は、二本目の煙草に火をつけて、ふとコンソール上のクロノメーターに目をやった。山下は、もう少しで、火のついた煙草をのみこむところだった。

外部時間の経過を示すその針は、今やぴくりとも動いていない。そういえば、それまでずっと応接室を満たしていた、重力場エンジンのかすかなうなり音も、聞こえない。山下が感じたのは、これだったのだ。

——完全な静寂。

エンジンが停まっている！

山下は、はじかれたように立ちあがると、戸口のところから大声で、みのりを呼んだ。

「みのりさん！　みのりさん！」

「なあに、山下さん。大きな声出して」

実験室から出てきたみのりが、廊下を小走りにやってきた。腕まくりをして、片手にドライバー、片手にモンキーレンチを握っている。鼻の頭が、油で黒く汚れていた。

「制御装置は、直ったんですか⁉」

山下が、つかみかからんばかりに言った。その勢いにおされて、二、三歩後ずさりしながら、みのりは首をふった。

「もう少しよ。あとは配線を、エンジン本体に接続するだけ」
「じゃあ、どうして……？」
山下は、我知らずコンソールのクロノメーターをふり返った。みのりも、山下の視線を追って、事態に気づいた。
「あら。変ねえ。どうしちゃったのかしら、この子。——ちょっと待ってて」
みのりは、再び実験室にかけこんだ。
山下が煙草を一本灰にする間があって、みのりは戻ってきた。コンソールの前に座って、いくつかのスイッチを素早く操る。何の反応もない。みのりは、山下をふり返って、不思議そうな声で言った。
「ねえ、何もかも正常なのに、エンジンが動かないなんてこと、あると思う？」
「さあ」
他に言うべき言葉もないって感じで、山下は、ゆっくりと首をふってみせた。
「さっきまでは停めようとやっきになってたのに、今度は動かない。——なんだかちょっとおもしろいわね？」
「そうですかね」
陰々滅々とした声で、山下が言った。
「どうなっちゃってるんです？」
五目ごはんのレトルト・パックを握りしめたままのサトルが、のんきそうな顔を、二人の間に

つき出して言った。
「お前、今度は、やけに落ち着いてるな？」
「そりゃあもう。——人間、メシさえ腹いっぱい食ってれば、何も心配することはありません」
サトルは、自信たっぷりにうけあった。
案外、その通りなのかもしれない。サトルの丸顔をぼんやり見つめながら、山下がそんなことを考えていると、
「ちょっと、二人とも。窓の外を見て何か気づかない？」
みのりが、山下たちの注意をうながした。
「そう言えば」
と、山下が言った。ついさっきまでは、何やら灰色っぽくもやっていたのが、今はまっ暗だ。
「まっ暗ですね」
サトルが言った。
「これ以上はないってくらい、まっ暗でしょ？」
「それが、なにか？」
「こういうことだと思うの。つまり、あたしたちは、エンジンの異常加速で、時間をどんどん逆行していたわね？　ここまではいい？」
二人は、お行儀のいい小学生みたいに、うなずいた。
「逆行して、逆行して、とうとう着いちゃったのよ」

「どこへ?」

「中国の占い言葉で言うところの『太極』って所。つまり、今はこの宇宙が始まる前の状態なのよ。時間も空間もない。ビッグバン以前の状態ってわけ。エンジンが停まって動かないのは、そのせいだとしか考えられないわ。だって、動きようがないでしょ?」

「要するに、行きつくところまで来たってことですか」

「そういうこと」

山下は、いささかの感慨を胸に、窓の外の暗黒を見つめた。全てはここから始まったのだから、この先には、いかなる道も存在しえない。

「サトルさん、二、三枚写真とっておいたら?」

「え? なぜですか?」

「これはね、一種のブラックホールなの。全宇宙がつめこまれた、宇宙の種子みたいなもんよ。その種子がはじけると、ビッグバンってわけ」

「はあ、そうですか。これもブラックホールねえ」

サトルは、どこか気乗りのしない様子で、窓の外に向けて、数回シャッターを切った。

それから三人は、仲良く窓のそばに腰をおろして、宇宙が始まるのをわくわくしながら待った。ビッグバンが起こりさえすれば、重力場エンジンも息をふき返す。あとは来た時と同じ軌道を、逆になぞっていけばいいわけだ。巻ききったぜんまいを、元に戻すようなものである。そのための準備もできている。

しかし——

いつまでたっても、ビッグバンは始まらなかった。

「どうしたのかしら？」

しびれを切らしたように、みのりが立ちあがった。

「もう、とっくにビッグバンが起こってもいいはずよ。起こってなきゃいけないのよ」

みのりは、コンソールに戻って、再び何か計算をしていたが、

「やっぱり、計算にまちがいないわ。どうして、ビッグバンが始まらないのかしら？」

と、首をかしげた。

それから、急に、何かとびきりのいたずらを思いついた、いたずらっ子のように、くすっと笑った。

「どうしました？」

山下が訊ねた。

「あのね、あのね」

みのりは、くすくす笑いながら、山下に耳うちした。とたんに、山下がひっくり返って笑い始めた。

「なんですか、なんですか」

次はサトルの番だが、これも聞いたとたんに吹き出した。

「んじゃ、やるわよ」

光があった。

「光あれ！　なーんちゃって」

みのりは、ひとつせきばらいをして、言った。

「こほん」

二人は拍手して、この冗談を歓迎した。

「どうぞ、どうぞ」

＊

窓の外の光景が、一気にネガからポジへ変化した。

灼熱の素粒子が、大宇宙を満たし、まずヘリウムが、続いて水素原子が誕生した。原子は、お互いの引力によって引きつけ合い、濃密な宇宙塵のかたまりを、無数に形づくった。やがて、その中から恒星が生まれ、惑星が生まれ、数千億の銀河を構成した。

天地創造。

その全てが、わずかまばたき二、三回するくらいの時間（もちろん、船内時間でだが）で、行なわれた。ぜんまいは、急激に元に戻りつつあった。

そして、豪田邸も、同じスピードで順調に飛行していた。今度は逆行ではなく、時間軸に対してプラスの方向へ。はるか二百億光年のかなた、なつかしい地球に向かって。

「まさか、とは思ってたけど……」

ずいぶん長い間、窓の外を見つめていたみのりが、突然、ぐわしっとこぶしを握りしめて叫んだ。

「この宇宙って、あたしが作ったものだったのね！」（どど〜〜〜ん!!）

「やっぱり、そうだったのか」

山下が頭をかかえた。

「まあ、とにかくこれで、無事地球に帰れることになったわけだし、ひとつぱあっと宴会でもやりましょう」

サトルが、脳天気な声をはりあげた。

「あっ、いいわねー、それ」

のりやすいみのりが、さっそく賛成する。

「サトルさん、うしろのキャビネットを開けて。おじい様のブランデーが、まだずいぶん残ってるはずよ」

というわけで——

豪田邸が地球に近づくころには、三人はすっかりできあがっていたのである。

どんちゃんどんちゃんやっているところへ、

Beep!

警報が鳴り響いた。

『警告。警告。本館ノ軌道上ニ、障害物。座標、プラス〇度。高速デ接近中！』

どこかで聞いたことのある言葉だ。
三人は、もーろーとした頭で考えた。
そのあとのことは、もはや説明する必要もないだろう。
最後の瞬間に、正気をとり戻したみのりが、バーニアのスイッチを入れなかったら、二つの豪田邸は、地球上空で、あやうく正面衝突するところだったのだ。
片方の豪田邸は台所を失い、もう片方の豪田邸は、二階部分を丸ごと失った。
行きの豪田邸は、そのまま上昇を続け、帰りの豪田邸は、かなりよたよたと降下していった。
豪田邸は、敷地まであと数メートルというところで力つきて、ぐしゃっという感じで着陸、いや、正確には墜落した。
「うわ〜〜〜っ、ひどい目にあった」
半壊状態の豪田邸から、体のほこりをはらいながら、山下が出てきた。すっかり酔いもさめたという顔だ。そのあとに、みのりが続く。
「あの時ぶつかったのが、自分ん家だったなんて、今でも信じられないわ」
「だけど、宇宙が始まったから、ぼくたちも生まれてきたわけで、それが、そのぼくたちを生んだ宇宙を始めにいくってのは……、いったいこりゃあ、どうなってるんですかね？　そもそものはじめは、誰が始めたんです？」
まだ少しろれつの回らない口調で、サトルが言った。
「そーゆーことは、考えない方がいいわよ」

笑いかけたみのりの耳に、その時、信じられないような声が、とびこんできた。
『オ帰リナサイマセ。オ嬢サマ』
「アレックス！」
みのりが、とびあがった。
「あんた、無事だったのね！」
『ハイ。台所カラ投ゲ出サレタト思ッタラ、スグ目ノ前ニモ、モウ一軒、オ屋敷ガアリマシタノデ、シガミツイテ地上マデ降リテ来タノデス』
「あの瞬間、こっちへ飛び移ったってわけか」
山下が言った。
「とにかく、無事でよかったわ、アレックス。心配してたのよ」
『ソレハ、ドウモ』
アレックスは一礼した。そして、三人の背後に横たわる豪田邸の残骸を指さしながら、言った。
『トコロデ、オ嬢サマ。アレハ一体ドーユー事ナノカ、ゴ説明願エルデショーカ？　今マデ、ドコデ、何ヲ、シテイラシタンデス？』
みのりは、他の二人をふり返った。三人の顔には、同じような表情が現われていた。
みのりは、アレックスに向き直り、にっこり笑って、言った。
「話せば長い物語よ♡」

*

その後、豪田邸の修理には、三ヶ月かかった。もちろん、みのりが下らない仕掛けを、あちこちにほどこしたことは、言うまでもない。

ちなみにつけ加えると、サトルの写真はボツになった。

山下は、禁煙をあきらめた。

番外篇　犠牲者は誰だ?!

1

「あの……」
ふり向くと、女が立っていた。
全身で、『私はキャリア・ウーマンよ。そこらのOLと一緒にしないでちょうだい！』と、主張しまくってるような型（タイプ）だ。
彼女は、山下のとなりの席（シート）を指さして、言った。
「ここ、あいてます？」
「あ、どうぞ」
山下は、あわてて、自分の荷物をシートからどかした。
「どうも」
女は軽く会釈して、腰をおろした。ハンドバッグをひざに置き、まっすぐ正面のスクリーンを見つめる。香水が、ほのかに香った。

——なかなか、いい女だな。

山下は、女の横顔をチラチラと盗み見ながら、内心で鼻の下を長くした。

平日の午後だというのに、映画館の中は、けっこうな込みようだ。それも、若者というには、少しばかりトウの立ちすぎた年代——ちょうど山下と同世代の連中が多い。みんな、なんのかんのと口実をでっちあげて、仕事を途中で抜け出してきましたって顔をしている。そいつは、山下にしても御同様だ。

今は校了前の一番忙しい時で、『猫又ジャーナル』の編集部は、さながら戦場のような有様だった。それなのに、編集長代理の山下が、こんなところで、のんびり映画など見てていいはずがない。

いいはずはないが、見てしまうのだ。

なにしろ今日は、山下がまだ学生だった頃、一世を風靡しまくった女優『芳山和美』の、リバイバル上映、最終日なのだ。しかも一挙三本立て。これを見のがすようじゃ、ファンとは言えない。

山下は、無意識に左手首に目をやった。——もうすぐ開演時間だ。思わず、こぶしを握りしめる。気合いが入っている証拠である。

ふと、となりの様子をうかがうと、彼女もバッグのひもを、ぎゅっと握りしめている。

——ここにも、ファンがいた。

そう思うと、山下は、なんとなくうれしくなった。ファン同士の、余人にはわからぬ連帯感と

いうやつだ。映画が終ったら、ひとつお茶にでも誘ってみようか……、などと、山下が不埒な想像にひたっていると、
「あの……」
女が、突然、声をかけてきた。
「お茶ですか?」
反射的に言ってしまってから、山下はうろたえた。女は、けげんな表情だ。
「あわわ、いえ、なんでもないです。ちょっと考え事をしていたもので……。えーと、何でしょう?」
「すみませんけど……」
と、女は少し言いにくそうな顔をした。
「はい?」
山下は、ある種の期待に、胸をふくらませて、次の言葉を待った。
女は、意を決するように、言った。
「すみませんけど、その貧乏ゆすり、やめていただけません?」
「は?」
山下は、ひどく間の抜けた声を出した。
それから、女の視線をたどって、足元に目をやった。
カタカタカタカタ……。

そこだけ、独立した生き物みたいに、山下の右足が、せわしなくステップを刻んでいる。
山下と女は、しばらくの間、まるで魅入られたように、無言でその動きを見つめ続けた。——ひとつの惑星上に生命が誕生し、やがて進化して文明を築き、いつしか滅んでしまうくらいの時間が経過した。
はっと我に帰った山下は、あわてて膝頭を両手でおさえた。
貧乏ゆすりは、止まった。
山下は、笑ってごまかすことにした。
「あはは……」
女は、何も言わずに、正面に向き直った。
灯りが消え、映画が始まった。

2

冒頭のモノクロ・シーンから、山下はたちまち映画の世界に引きこまれた。
画面がカラーに変わり、タイトル。と同時に、重厚なチェロの旋律が流れ始める。
それを聞いただけで、山下は涙がこぼれそうになった。青春が一気によみがえってくる。——いいものは、何度見てもいい！

山下は、膝頭を力いっぱい握りしめた。
と、
右の手のひらに、『ぐにゅ』というような感触が伝わってきたのだ。
「ぐにゅ？」
山下は、首をかしげた。なんで膝頭が、『ぐにゅ』なんだ？
山下は、まず自分の膝を見た。あるべきはずの右手は、ない。
「ない」
と、山下は呟いた。
「しかし、ここにないとしたら、どこにあるんだ？」
山下は、ゆっくりと首を回した。
そして、その『どこ』を見つけ出した。
とたんに、山下の顎が三十センチも垂れ下がった。
あろうことかあるまいことか（結局、あったわけだが）、山下の右手は、ほぼ水平に横に伸びて、となりの席の観客、つまり、女性の、なんて言うか、まあ、胸のあたりを、よーするに、その……、
『**わしづかみ！**』
にしていたのである。（やれやれ）
あまりの大胆さに、一瞬あっけにとられていた女の目が、たちまちキリキリと吊りあがった。

唇が、悲鳴を発する直前の形に開かれる。
山下は、とっさに、彼女の口をふさごうとした。告発されるのを、おそれてのことではない。せっかくの映画の雰囲気がぶちこわしになることを、まず心配したのである。
女は、山下の手に、思いっきり、かみついた。
「うぎゃ〜〜〜〜〜っ！」
山下は絶叫した。
映画は、ぶちこわしになった。
「なんだ、なんだ」
客が騒ぎ出す。
女は、右手を振りあげた。
「この、ド変態！　ドえっち！　ド助平！」
ぱん、ぱん、ぱん！
と、往復びんたの三連発である。
「ま、待ってくれ。誤解だ。ぬれぎぬだ。おれがやったんじゃない」
「んまー、なんですって。今さら、しらばっくれようっての。あたしは、はっきり見たんですからね！　間違いなく、あんたの、そのいやらしい右手だったわ！」
「いや。おれの右手なのは確かだけど、おれがやったんじゃない。知らない間に、右手が勝手に動いてたんだ。本当だ。信じてくれ」

「まー、ぬけぬけと。言い訳なら、もう少し気の利いたセリフを用意しとくことね。そんなんじゃ、陪審員を納得させることは、できなくってよ」
女は、勝ちほこったように言った。
フィルムが止まり、場内に灯りがともった。劇場側も騒ぎに気づいたらしい。
「なんだ。どうしたってんだ」
「おい。痴話喧嘩なら、外でやってくれ。おれは忙しいんだ。早く映画を見て、社に戻らなきゃならんのだ」
前の席の男が、ふり返って言った。そんなに忙しいんなら、見に来なけりゃよさそうなものだが……。
「あ、あの、すみません。なんでもないんです」
山下は、席を立ちかけているまわりの客たちに、頭を下げながら言った。
「あら。なんでもなくないわ」
女が横から口を出す。
「皆さん、聞いて下さい！　この人ったら……」
女が、ひときわ声を張りあげた、ちょうどその時――
山下の耳に、聞きなれた声が飛びこんできた。
「あれえ。山下先輩じゃないですか？」
人垣をかきわけて、サトルがひょっこりと顔を出す。

「サトル！」
山下は、とたんに自分の立場を忘れた。電光のように、職業意識が戻ってくる。
「お前、こんなとこころで何やってるんだ？　ミッキー・鳥越のイラストを、取りに行ってるはずじゃなかったのか！」
「へ？」
サトルは、きょとんとしている。
山下は、思いきりサトルを睨みつけた。
サトルの顔に、しまったという表情が浮かぶ。
「あっ。いや、そうなんですけどね。あの、つまり……」
言い訳を始めたサトルが、山下を見て、ふと首をかしげた。
「それより、先輩こそどうして、こんなところにいるんです？　社の伝言板には、たしか火村了のところへ原稿取りって、書いてあったような……」
――くそー、気づきやがったか。
山下は、内心、舌打ちした。しかし、そんな気配は、おくびにも出さず、
「もちろん、行ったさ」
と、大嘘をつく。
「行ったことは行ったが、例によってまだ出来てない。どうも、ラストの二、三枚が決まらないらしいんだな、これが。まあ、おれとしては、その場で出来あがるのを待つつもりだったんだが、

気が散るって言うんで、仕方なしに、——いいか、サトル、ここんとこをしっかり覚えとけよ、仕方なしに、だ、——こうやって見たくもない映画を見てるってわけだ。まったく、あの人にも困ったもんだよ。は、は、は」

「は、は、は」

サトルも調子を合わせて笑いながら、

「いやー、実はぼくもなんですよ。ミッキーさんとこへ伺ったら、あと少しだけど、仕上げの時は、誰にも見られたくないって言うもんで。いやー、奇遇ですねえ、先輩」

——なにが奇遇だ、この野郎。

山下は苦々しく考えた。賭けたっていいが、サトルが今日、ミッキーの家へ行ってないことは確かだ。それどころか、半径五キロ以内に近づきすらしなかったろう。——しかし、こいつも、芳山和美のファンだったとはねえ。

山下は、サトルの丸顔を、つくづくと眺めた。彼女には、昔からこういった『かくれ和美ファン』というのが多くて、え〜〜〜って言うような人物が、こっそり写真なんか集めてたりする。もっとも、山下もその一人なのだが。

「ちょっと、いいかげんにしてよねー」

完全に無視された格好の女が、ヒス声で言った。

「こっちの始末は、どうつけてくれるのよ！」

「あ、ごめん、忘れてた」

ふり返った山下の目に、その時、とんでもない光景がとびこんできた。

人垣の後ろの方を、顔をかくすようにして、こそこそと逃げていく男。寝る時以外は、はずさないという黒いサングラスを、馬鹿みたいに映画館の中でもかけている、あの男は……、

「火村了！」

山下は、天井が落っこちそうな大声で、わめいた。

とたんに火村は、これまたワンパターンのネクタイをひらひらさせながら、出口めがけて一目散に駆け出した。

「待て、この野郎！」

山下が追う。

「逃がさないわよ！」

女も、走り出す。

「待って下さいよお」

サトルが、その後に続く。

残された観客たちは、一様にポカンと口を開けて、三人の後ろ姿を見送った。

3

「さあ、つかまえたぞ！」
ロビーに出たあたりで、山下は火村のネクタイをつかんだ。
「げっ。く、苦しい……」
火村は、ジタバタと暴れた。
山下は、火村にぐいと顔を近づけ、思いきりドスのきいた低音で、言った。
「原稿はできたんだろうな？」
「そっ、それが、その……」
「な・ん・だ・とお〜〜〜」
「あっ、でも、半分はできてますし、あと一日もあれば、いや、半日、いや、三時間……、だから、その……」
「しめ切りは、何日前だったと思ってるんだ？」
山下は、ひき肉器（ミートチョッパー）を通すみたいに、歯の間から声をしぼり出した。いっそのこと、このトンマなSF作家を、ひき肉器にかけてやりたい。山下は本気でそう考えた。わずか八枚のショートショートなのに、いったい何をやってるんだ、こいつは！
山下は、のどの奥で唸った。腹をへらしたライオンそっくりのやつだ。
火村の顔から、さっと血の気がひいた。あわてて言い訳を始める。
「だ、だけど、ぼくなんか、まだいい方ですよ。ミッキーさんなんか、まだ全然だって……」
「ミッキー？」


SATORU

山下の目が、ギラリと光った。
「あわわ」
火村が、あわてて口を押さえた。
「ミッキーも来てるのか、ここに！」
「いや、ぼくは単なるたとえ話を……」
山下は、火村の胸ぐらをつかんだまま、ロビーを見回した。
すみっこの方で、こっそりポスターをはがしている男。——まちがいない。ミッキー・鳥越だ。
「お前ら〜〜〜」
山下の頭は、爆発直前の活火山だった。ようやく追いついてきたサトルに、
「サトルっ、お前はミッキーをつかまえろ！　おれは、このトンチキを、会社の物置きに閉じこめて、逆さ吊りにしてでも原稿書かせてやる！」
「あそこだけはやだーっ」
火村が悲鳴をあげた。
「あそこ、ゴキブリが出るんですよー」
「うるさいっ」
山下は怒鳴った。
とたんに、
ぱっかーん！

後頭部のあたりに、スルドイ一撃。
「いつまで、ごちゃごちゃやってんのよっ」
女は、ヒステリックにわめいた。肩で息をしている。よほど腹にすえかねてるらしく、目がすわっていた。バッグを持つ手も、ぶるぶる震えている。あれで殴られたらしい。
「あのですね、お嬢さん。今、とりこみ中でして……」
山下が気をとられた一瞬のスキをついて、火村が脱兎のように逃げ出した。
「ミッキー、逃げろ！　編集（サツ）だ！」
その声で、はじかれたように、ミッキー・鳥越もかけ出した。
「あっ、待て！」
「待つのは、あんたよ！」
山下の前に、女が立ちふさがる。
山下は、ため息をついた。
「OK。わかったよ。謝るよ」
山下は、こういう時のためにとっておいてある、特別あつらえの二枚目声で言った。女の肩に軽く手をおき、目をじっと見つめながら、
「だけど、これだけは信じてくれ。悪気があってしたことじゃない。君が、あまりにも魅力的だったんだ。――君のその美しさに、どうしようもなく惹かれてしまうのは、ぼくの罪だろうか？」

「あら。そんな。まあ……」
女は、頬を染めて、うつむいた。
山下は、急に早口になって言った。
「そんなわけだから、今日んとこは、これでごめん！」
素速く女の頬にキスすると、山下は身をひるがえして、火村たちのあとを追いはじめた。
「サトルっ、来い！」
サトルも、ドタバタと走り出す。
ロビーの中央には、頬に手をあてて茫然と立ちすくんでいる女だけが残された。

4

「どっちへ行った?!」
映画館の玄関をとび出したところで、山下は左右を見回しながら叫んだ。
「あっ、あそこです！」
サトルが、歩道の彼方を指さす。
火村とミッキーの後ろ姿が、人々の陰に小さく見えていた。二人とも懸命に走っているらしいが、日ごろの不規則な生活がたたって、早くも息を切らしている様子だ。

「逃がしてたまるか！」

山下は、猛然とダッシュした。

通行人たちが、驚いて道をあける。

距離が、みるみる縮まってくる。――山下は、足にはいささか自信があった。毎月毎月、校了間際には、いつもこーゆーことをやっているのだ。足も鍛えられようってもんだ。――編集者の仕事の半分が、逃げまわる作家たちをとっつかまえることだとは、誰も思わんだろうな。

山下は、頭のすみで、チラッと考えた。

その時、また、あれが起きた。

山下の体は、山下の意志とはまるで関りなく、勝手に左に曲がり、ビルの壁に激突した。

ぐしゃっ！

というような音がした。

頭の中で、打ちあげ花火が、盛大に爆発した。

カエルみたいな格好で、壁にへばりついていた山下は、やがてゆっくりと、後ろに倒れた。

「だ、大丈夫ですか、先輩！」

サトルが、かけ寄る。

「いったい、どうしたんです。曲がり角でもないのに。何かに、けつまずいたんですか？」

山下は、空ろな目つきで、サトルの顔を見つめた。

徐々に焦点が合ってくる。

「つかまえたぞ、この野郎！」
山下が、いきなりサトルの首を絞め始めた。
「うわっ。せ、先輩！　ぼくですよ。サトルですったら」
「サトル……？」
まだ、ぼんやりした表情で、山下がつぶやいた。
「なんだ、サトルか」
「そうですよ。しっかりして下さいよ、先輩」
「やつらは……？」
山下は、あたりを見回しながら訊ねた。
「やつらは、どこ行った」
「逃げちゃいました」
「くそー」
山下は、左の手のひらに、右のこぶしを打ちつけた。
「だけど、本当にどうしちゃったんですか、先輩」
「こっちが聞きたいね」
山下は、不機嫌に言った。
「走ってたら、なんだか知らないけど、急に強い力で左に引っぱられたみたいに、足が勝手に曲がってっちまったんだ」

「はあ」
「さっきはさっきで、右手が勝手に動いて、あの騒ぎだ」
「なるほど」
サトルは、もっともらしい顔でうなずいた。そして、言った。
「ひょっとして、先輩、夢遊病か何かに、かかったんじゃないですか?」
「阿呆。おれが寝てるように見えるか?」
山下は、辛辣に言い返した。そのあとで、ひとり言のようにつけ加える。
「それに、なんか、そーゆー神経がおかしくなってるって感じじゃないんだよな。体の内部じゃなくて、むしろ、外部から、誰かにあやつられてるみたいな……」
そこまで言いかけた時だ。
山下は、突然びっくり箱みたいに、ぴょんと飛びあがった。
あっけにとられているサトルの目の前で、山下はぴょんぴょんとリズミカルに飛びはねた。
それが終ると、両腕を大きく振り回し始める。
さらに、体を曲げたり、伸ばしたり。
「せ、先輩……?」
サトルが、目を丸くして言った。
「いったい、なにをやってるんです?」
「なにをやってると思う?」

山下は、妙なうす笑いを浮かべて、投げやりな調子で応えた。

無理もない。自分の体がとんだりはねたりしてるのを、ただ見てることしかできないのだ。言ってみれば、車の助手席に座らされたみたいなものだ。

サトルは、山下の動きを、しばらくの間、じっと観察していたが、やがて『あ』という顔になって言った。

「わかりましたよ、先輩!」

「そうかい」

「先輩が、いや、先輩の体がさっきからやってんのは、ラジオ体操ですよ。いち、に。いち、に。うん。まちがいない」

「ラジオ体操?」

「はい。ラジオ体操の第一ってやつです」

「ラジオ体操第一……」

山下は、泣きたくなった。

こんな真っ昼間、人通りの多い道のまん中で、何が悲しゅうて、ラジオ体操なんかしなきゃならんのだ?

「もうちょっとです、先輩。がんばって下さい」

サトルが、山下を励ました。

「なにが、もうちょっとなんだ?」

「自分じゃわかんないでしょうけど、今、先輩は深呼吸をやってるんです。もうすぐ終りですよ」
たしかに、サトルの言う通りだった。
体は再び山下のものになった。
「やりましたよ、先輩！　よかったですねえ」
「ああ」
山下は、少し息を切らしながら、微笑んだ。
しかし、それで安心するのは早かった。
ラジオ体操第二が始まったのだ。
両手を元気いっぱい振り回しながら、山下は叫んだ。
「助けてくれ〜〜〜っ！」

5

『オ茶ガ、入リマシタヨ』
アレックスの声に、みのりはちょっとびっくりした顔で、ふり返った。
「えーっ、もう、そんな時間なの？」

壁の時計を見あげる。針は三時をさしていた。
「うあー。なんか、あって言うまに、時間がたっちゃったよお」
みのりは、うーんとのびをしながら言った。
『コナイダカラ、何ヲ、ソンナニ夢中ニナッテイルンデス？』
みのりは、にーっこりと笑った。さっきから、誰かにそれを聞いてもらいたくて、たまらなかったのだ。
「まあ、ちょっとあれを見てよ、アレックス」
みのりは、得意満面ってかんじで、実験室の中央にでっちあげられたシロモノを、指さした。
ごちゃごちゃしたメカのかたまり。その中央に、一体の等身大の人形が立っていた。中学の理科室あたりでよく見かける、筋肉むき出しの例のグロテスクな人形、あれを流用したものらしい。
体中から細いコードが無数に流れ出て、足元のメカに接続されている。
筋肉人形は、かき、こき、と関節を鳴らしながら、ラジオ体操をしていた。
『体操人形デスカ？』
「そう見えるでしょ？」
『ソウ見エマス』
「ところが、なんと、これはパペット・マシンなのだ。すごいだろー」
『ぱぺっとト言ウト、操リ人形ノ……？』
「そう。言ってみれば、人間用の遠隔サーボ・コントロールマシンね。対象となる人物のデータ

をインプットしてやると、その人間をあの人形と同じように動かせるの。——たとえば、プログラム次第では、ニジンスキーのバレエを、ズブの素人が完璧に踊りこなすこともできるのよ。すごいと思わない？」
『ハア』
「他にも、スーパーマンのプログラムを入れてやれば、普通の人間が、弾丸よりも速く、機関車よりも強く、高いビルでもひとっ飛びできちゃうわけ」
『ナルホド』
アレックスは、うなずいた。
『デ、ソノぷろぐらむハ、モウ出来テルンデスカ？』
「それがねー」
みのりは、うつむいた。
「あたし、ハードは得意なんだけど、ソフトがまるでダメなの。結局、一ヶ月もかかって、やっとあの程度」
アレックスは、機械的な正確さでラジオ体操をしている筋肉人形に、チラリと電子アイを走らせた。
『トコロデ、オ嬢サマ？』
「なーに、アレックス」
『コノ装置、もでるハ入力済ミナノデスカ？』

「う—ん。い・ち・お・う・ね♡」
『ナルホド……』
「なによ、アレックス。なんか言いたそうね」
『イエ。タダ、もでるニサレタ人間ノ事ヲ考エマスト、少々、気ノ毒ナ気ガ……』
「あら。平気よ。一応って言ったでしょ。本気で人間と感応させるには、その人に関する膨大なデータを全部入れなきゃならないの。要するに、その人自身の協力がなきゃ、パペット・マシンは作用しないのよ。あんな簡単なデータくらいじゃ、ぜんぜん平気」
『ドンナでーたヲ入力シタンデス？』
「名前と、生年月日、星座と、血液型」
『ソレダケ？』
「そう。それだけ。いくらあたしでも、たったそれだけのデータで、相手を思う通りにあやつれる装置なんて、できっこないじゃない」
みのりは、お気楽な調子で、きゃらきゃらと笑った。
それから、不意に両手を打ち合わせて、叫んだ。
「いっけなーい。せっかくのお茶が冷めちゃうわ。早く行きましょ、アレックス」
『ハイ、ハイ』
みのりは、実験室を出ていきながら、ふと立ちどまって、パペット・マシンをふり返った。
筋肉人形は相変わらず、ラジオ体操にいそしんでいる。ほうっておけば、永遠にそうしている

はずだ。

みのりは、パペット・マシンのコンソールに戻ってきて、呟いた。

「考えてみれば、電気のムダね」

みのりは、パペット・マシンの電波スイッチを、Ｏ、Ｆ、Ｆ、にした。

筋肉人形の動きが、ぴたっと停まった。

「これでよし」

みのりは満足気にうなずいた。

「あたしって、いい奥さんになれそう。——きゃっ♡」

みのりは、一人で顔を赤くして、パタパタと実験室を出ていった。

6

「さっきの急患に、何か問題があるって話だが、どんなことかね？」

猫ヶ丘大病院の院長が、まだ若い医者に聞いている。

「はい。心電図、脳波計とも、まったく反応ありません」

「死んでるのかね」

「いえ、死んでるわけじゃないんです」

若い医者は、ちょっと困ったような顔をして、言った。
「つまり、そのう、単に止まってるだけらしいのです」
「止まってるだけ？」
「はあ。こんな症例は、今まで見たこともないのですが、たしかに止まってるだけで、生命に別条はないようなのです」
「君は、本当に医大を出たのか？」
「そう言われましても、私にもこれ以上説明のしようが……」
若い医者は、ハンカチで額の汗をぬぐった。
院長は、カルテを見ながら言った。
「心臓も停まっている」
「そう」
「もちろん、血液の流量もゼロだ」
「そうです」
「脳波も出ない」
「その通りです」
「それなのに、死んでるわけでもない！」
院長は、吐きすてるように言った。
「そうなのです。で、院長。あの患者どうしましょう？　死んでるはずなんだからと言って、ま

さか殺すわけにもいきませんし……」

「どっかへ捨ててこい。そんな患者(クランケ)は、医学界のつら汚しだ！」

院長は、イスを回して、そっぽを向いた。

若い医者は、黙って頭を下げ、院長室を出ていった。

院長は、ひとり呟いた。

「まったく、最近は常識のないやつらが多くて、いかん！」

＊

聞くところによると、その後も『猫又ジャーナル』は、順調に刊行されているとのことである。

解説

いしかわ　じゅん

一　火浦功、その人格

サングラスである。

あの、目薬をさす時にもしていると言うサングラス、アレが彼の人格の全てを言い表わしている。

やましいのである。

何かやましいトコロがあるのである。

大っぴらにオテント様を拝めないナニカがあるに違いないのである。

ぼくもサングラスをかける時がある。そしてそれは、仕事が続いて目が疲れている時か、あるいは吉祥寺駅のKIOSKで東京スポーツを買って五百円玉を出したらオツリを四百五十円も貰い急いで現場から立ち去る時である。

それほどサングラスは、やましいのだ。

では、どんなやましい事が彼にはあるのか。
ぼくは彼の実家に電話してみた。謎を探るタメである。この腰の軽さが、全雑誌制覇の原動力であり、また仕事が多岐にわたるワリには文化人と中々呼ばれない理由なのである。
ベルが鳴り、受話器の上がる音がした。
「ハイ、有名な小説家の火浦功の母の文子53歳です」
サスガである。自慢の息子なのである。どんな時にもアピールを忘れないのである。偶然カドカワ書店の社長がヤクシマルくんとこに電話するつもりで電話番号を間違え、火浦くんの実家にかけてしまい、「うーん、そんなに有名な作家なのか。では次のヤックンの映画は彼の原作にしよう」などと思わないともかぎらないのである。そうすればもう、イキナリ成金である。大きい声では言えないが、H書房などとは売れ行きのケタが違う。ヒトケタどころかフタケタくらいは違うのである。ぼくも、同郷の鳥山明と単行本の部数が、冗談でなくフタケタ違うのを指摘され、恥ずかしい思いをした事がある。売れ行きが百倍違うと言う事は、収入が百倍違うと言う事である。鳥山明はぼくよりカナリ若いくせして豪邸を建てたのに、ぼくはまだ借家である。残念なのである。それはともかく、つまり、えーと、可能性があるのである。
「あの、いしかわじゅんと申しますが」
ぼくは名乗った。
「え……⁉ あ、あのいしかわ先生でごぜーますだか⁉ も、もったいねえだ。ウラみてえなもんにお電話なんぞ‼」

どうも火浦くんのお母さんは謙虚な人柄なようである。
会った事のない、それもシロートの、オマケに年配の人をネタにするのはなんだか気がひけるが、ぼくに解説なんか頼む方が悪いのである。
「ひえええ——っ、もったいねえですだ〜〜っ!!」
火浦くんのお母さんは、電話の向うで額をタタミにすりつけた。
「まあまあお母さん、お手をお上げんなって。いえ、別にそんな、まあ確かに単行本は23冊ばかり出しましたがね、エッセイ集もその内出しますし、小説集もまあ短篇を後二、三本書けば一冊分になりますから、来年には出すつもりですがねー、最近CMの仕事がいくつか来て、スイミングクラブにも入ってますが、だからと言ってイヤそんな、はっはっは」
いつの間にか電話の向うには、多勢の人間が集まっているようだった。
「セ・センセエ、火浦の一族が皆集まりましただ。どうか将来の火浦一族の指針になるようなお言葉をかけてやっておくんなまし!」
標準語を使おうとしてお母さんは、廓言葉になっていた。落語に出て来る言葉が江戸弁であると誤解しているのだ。
ぼくはひとつセキをした。受話器のカナタで巨大な沈黙がとぐろを巻いていた。
「タバコは地元で買おう!」
ぼくは高らかに宣言した。
ウオーンと、地鳴りがした。

火浦一族がのたうっていた。感動に泣き出す者、狂ったように柱に自らの頭を打ちつける者、クラウチングスタートする者、ベリーロールをする者、老若男が感情を解き放っていた。女の子は、いしかわじゅんファンクラブの入会届を書いていた。

「ウンウン……」

ぼくはうなずき、そして静かに受話器を置いた。

チン、と音がして、サングラスの謎は闇に葬られたのであった。

二　火浦功、その作品

この解説をお読みになる前に、中身をお読みになった読者ならご存知であろうが、この作品は、三人の主役クラスの人間によって成り立っている。

みのりちゃんと山下と、サトルである。

で、このサトルなのだ。

ぼくの明治大学漫画研究会の後輩に、スノウチサトルと言う男がいる。ヤハリ漫画家をしていて、ぼくの漫画の中によく出て来る。つまり、ぼくのキャラクターの一人なのだ。

この作品がSFマガジンに連載されていた時も、さし絵はぼくが描いていた。シリーズ一本目の原稿のゲラを受取りざっと読んで、ぼくは驚いた。「サトル」と言う登場人物が「スノウチサトル」とイメージが似ているのである。

ぼくはためらわず、「サトル」を「スノウチサトル」の顔で描いた。ピッタリだった。

そして、二本目。「サトル」は、一本目よりまた少し「スノウチサトル」に似て来ていた。三本目四本目と進むにしたがって、「サトル」と「スノウチサトル」は、殆ど同一人物になってしまった。もう後半あたりは、多分、火浦くんは「サトル」を「スノウチサトル」を書くつもりで書いていたに違いない。

原作つき漫画に、こう言うケースはたまにある。漫画家の描いたキャラクターに原作者が影響を受け、漫画家の描いた延長線上の性格で次の回を書いてしまい、またそれを受けて漫画家が延長線上に、と言うグアイにキャッチボールをくり返しながら、いつの間にかキャラクターが一人で歩き出す。

しかし、小説とさし絵で、と言うケースでは珍しい。その上、実在の人間がからんでいるのはもっと珍しいのである。

火浦くんは、ぼくの描いた「スノウチサトル」を見た事はあるが、本物の「スノウチサトル」には会った事がない。一度会わせてみたいものである。ドッペルゲンガーが出会う時のように、ナニカが起きるのではないかと言う気がするのである。

ところで、ぼくは「みのり」と言う名前がキライである。

もうホントにキライなのである。

ぼくが漫画家を開業してからもらった一番安い原稿料が、みのり書房のページ二千円であった事からも、それは容易に想像がつくであろう。

三　火浦功、そのファッション

彼はいつも、黒のジャケットである。それにストライプのネクタイである。いつも同じ服を着ているように見えても、実は同じ服を何着も持っていて、毎日着がえている、と言うケースもあることはあるが、彼はソレではない。右の袖口がハナで光っているのがその証拠である。ハナミズと言うのは黒地の服では光りがちなのである。

四　火浦功、その住居

京王線千歳烏山である。

五　火浦功、その火浦功

こう言う内容のない文章をいつまでも書いているとヒンシュクを買いそうなので、この辺でやめることにする。ぼくは内容のないのはトクイなのだ。

さて、火浦功についてよく理解していただけたことと思う。出生の秘密、黒メガネの謎、母の正体、作品の背景、これでもう来春の入試に出ても大丈夫である。心おきなく本屋に走り、「いしかわじゅんの単行本」と御指名いただきたい。間違っても、「吾妻ひでお」とか「とり・みき」とか言わないよう御注意いただいて、御アイサツにかえたいと思います。

初出一覧表

「マッドサイエンティストです」　ＳＦマガジン82年4月号
「タイムトンネルを掘る」　ＳＦマガジン82年8月号
「とっても素敵な電送人間」　ＳＦマガジン83年1月号
「いつかアルキメデスが……」　ＳＦマガジン83年2月号
「ちょっと混線」　ＳＦマガジン83年4月号
「日曜日には宇宙人とお茶を」　ＳＦマガジン83年12月号
「ブラックホールだぜい！」　ＳＦマガジン84年3月号
「犠牲者は誰だ?!」　書下ろし

著者略歴　昭和31年生，作家　主著書「宇宙カジノ略奪作戦」「幸せの青い鳥」（以上早川書房刊）

HM=Hayakawa Mystery
SF=Science Fiction
JA=Japanese Author
NV=Novel
NF=Nonfiction
Jr=Junior
FT=Fantasy
YR=Young Romance
GB=Game Book

日曜日には宇宙人とお茶を

〈JA190〉

昭和五十九年七月三十一日　発行
昭和六十二年三月十五日　六刷

（定価はカバーに表示してあります）

著者　火浦功
発行者　早川清
印刷者　矢部富三
発行所　株式会社　早川書房

郵便番号　一〇一
東京都千代田区神田多町二ノ二
電話東京(二五二)三一一一(大代表)
振替口座番号　東京六-四七七九九

印刷・三松堂印刷株式会社　製本・株式会社川島製本所

ISBN4-15-030190-5 C0193

狐と踊れ 神林長平著

5Uと呼ばれる薬を飲み続けないと人々は胃を失ってしまう……衝撃的デビュー作を含む。

七胴落とし 神林長平著

大人になるとテレパシー能力を失ってしまう子供たちの焦燥と不安をみごとに描き出す！

言葉使い師 神林長平著

秩序を乱すものとして全ての言語活動が禁止されている無言世界を描く星雲賞受賞作他、五篇

敵は海賊・海賊版 神林長平著

宇宙海賊課刑事のラテルと、相棒の黒ネコ型宇宙人ラプロの活躍を描く痛快スペースオペラ。

戦闘妖精・雪風 神林長平著

「未知の異星体ジャムから地球を守れ！」スーパー戦闘機・雪風の戦いを描く星雲賞受賞作！

あなたの魂に安らぎあれ 神林長平著

地上にはアンドロイドが住み、人間たちは地下に暮らす火星で、二者間の緊張は高まる！

一人で歩いていった猫 大原まり子著

背中に銀色の翼が生えた天使猫は、進化の袋小路にある地球へ送りこまれた……処女短篇集。

銀河ネットワークで歌を歌ったクジラ 大原まり子著

宇宙をあまねく旅してまわるサーカス団のクジラと、少年の交流を描く表題作他、五篇収録。

瞑想者の肖像　岬　兄悟著
化物大ウサギと半裸の美女をともなう異世界の大冒険に巻き込まれる表題作ほか、五短篇収録

風にブギ　岬　兄悟著
わたしの体の持ち主を探して！——美少女の奇妙なお願いが誘う異次元のめくるめく大冒険！

ロック・ミー・ベイビー　岬　兄悟著
裏切られた女の甘く怪奇な復讐を描く表題作など、同時代の感覚で描くショート・ショート集

ラヴ・ペア・シリーズ①
魔女でもステディ　岬　兄悟著
ある朝突然、全裸でベッドに出現したオカルト美少女麻美とおれの甘く怪奇なラヴ・コメディ

ラヴ・ペア・シリーズ②
女神にグッバイ　岬　兄悟著
愛し合うと合体し両性具有者に変身する不思議なカップル、おれと麻美が探偵物語してしまう

地球はプレイン・ヨーグルト　梶尾真治著
味覚でコミュニケーションするという宇宙人とファースト・コンタクトする表題作他、六篇。

時空祝祭日　梶尾真治著
ホロリとさせる人情話から、奇想天外な物語まで、短篇の醍醐味が味わえる十一篇を収録！

航空宇宙軍史
仮装巡洋艦バシリスク　谷　甲州著
人類の宇宙進出を支える強大な戦力を誇る航空宇宙軍の絶えざる戦いの歴史をつづる四篇収録

幸せの青い鳥　火浦功著
平凡な男が、ある日突然卵を生み落とした……表題作ほか、奇妙なアイデアで描く五短篇収録

日曜日には宇宙人とお茶を　火浦功著
かわいいマッド・サイエンティストみのりちゃんの珍発明が巻き起こす大パニック。八篇収録

高飛びレイク・シリーズ①
宇宙カジノ略奪作戦　火浦功著
脳天気な超能力怪盗レイクが相棒のジム、女盗賊のジェーンと共に難攻不落のカジノに挑む！

高飛びレイク・シリーズ番外篇①
99％のトラブル　火浦功著
少女誘拐の汚名を晴らすべく敢然と卑劣な悪人どもに戦いを挑む怪盗レイク。表題作ほか二篇

高飛びレイク・シリーズ番外篇②
ファントム・レディ　火浦功著
怪盗レイクと電子工学の天才ジム。絶妙の犯罪コンビ誕生のエピソードを語る表題作ほか二篇

マインド・イーター　水見稜著
人間の精神を食べる前宇宙の残滓マインド・イーターと人間の壮絶な戦いを描く連作短篇集。

回廊世界シリーズ①
二重戦士のさだめ　水見稜著
少年サージは悪神に引き裂かれた己が半身を見出し超戦士となるべく混沌の世界に戦いを挑む

飛行船の上のシンセサイザー弾き　難波弘之著
地球を守る伝説の巨鳥〝鵬〟とモルト博士の人智を越えた心の交流を描く表題作ほか七篇収録

TOKYO
HAYAKAWA
BOOKS

火浦 功の作品

—既刊—

幸せの青い鳥

＊

〈高飛びレイク・シリーズ〉

宇宙カジノ略奪作戦

99％のトラブル

ファントム・レディ

＊

〈みのりちゃんシリーズ〉

日曜日には宇宙人とお茶を

大冒険はおべんと持って



火浦　功

豪田みのり、美少女、18歳、親子三代にわたる筋金いりのマッドサイエンティストの家系、豪田家のひとり娘。けれどもまだ仮免許のマッドサイエンティストみのりちゃんが発明するのは、一本の鉛筆を削るのに一時間もかかる〈コンピュータつき鉛筆けずり〉、時間量子を掘り抜けタイムトンネルをつくっていく〈量子シャベル〉、人間を電送するとサボテンと合体した〝怪奇サボテン人間〟をつくりだす〈物質電送装置〉などなど。日夜、猫ヶ丘ニュータウンのタウン誌《猫又ジャーナル》編集員の山下とサトルを実験相手にみのりちゃんパワーが炸裂する！

ISBN4-15-030190-5 C0193 ¥420E

TOKYO HAYAKAWA BOOKS

火浦 功の作品

—既刊—

幸せの青い鳥

＊

〈高飛びレイク・シリーズ〉

宇宙カジノ略奪作戦

99％のトラブル

ファントム・レディ

＊

〈みのりちゃんシリーズ〉

日曜日には宇宙人とお茶を

大冒険はおべんと持って



火浦　功

豪田みのり、美少女、18歳、親子三代にわたる筋金いりのマッドサイエンティストの家系、豪田家のひとり娘。けれどもまだ仮免許のマッドサイエンティストみのりちゃんが発明するのは、一本の鉛筆を削るのに一時間もかかる〈コンピュータつき鉛筆けずり〉、時間量子を掘り抜けタイムトンネルをつくっていく〈量子シャベル〉、人間を電送するとサボテンと合体した〝怪奇サボテン人間〟をつくりだす〈物質電送装置〉などなど。日夜、猫ヶ丘ニュータウンのタウン誌《猫又ジャーナル》編集員の山下とサトルを実験相手にみのりちゃんパワーが炸裂する！

ISBN4-15-030190-5 C0193 ¥420E

TOKYO HAYAKAWA BOOKS

定価420円

日曜日には宇宙人とお茶を

火浦　功

ハヤカワ文庫

JA
190

日曜日には宇宙人とお茶を

〈みのりちゃんシリーズ〉

火浦 功

傑作日本SF

420

JA
190

日曜日には宇宙人とお茶を

〈みのりちゃんシリーズ〉

火浦 功

ハヤカワ文庫JA

420

カバー／いしかわ じゅん



JA
190

日曜日には宇宙人とお茶を

〈みのりちゃんシリーズ〉

火浦 功

ハヤカワ文庫 JA

420


火浦 功

豪田みのり、美少女、18歳、親子三代にわたる筋金いりのマッドサイエンティストの家系、豪田家のひとり娘。けれどもまだ仮免許のマッドサイエンティストみのりちゃんが発明するのは、一本の鉛筆を削るのに一時間もかかる〈コンピュータつき鉛筆けずり〉、時間量子を掘り抜けタイムトンネルをつくっていく〈量子シャベル〉、人間を電送するとサボテンと合体した“怪奇サボテン人間”をつくりだす〈物質電送装置〉などなど。日夜、猫ヶ丘ニュータウンのタウン誌《猫又ジャーナル》編集員の山下とサトルを実験相手にみのりちゃんパワーが炸裂する！

ISBN4-15-030190-5 C0193 ¥420E

TOKYO HAYAKAWA BOOKS

定価420円

火浦 功の作品

—既刊—

幸せの青い鳥

＊

〈高飛びレイク・シリーズ〉

宇宙カジノ略奪作戦

99%のトラブル

ファントム・レディ

＊

〈みのりちゃんシリーズ〉

日曜日には宇宙人とお茶を

大冒険はおべんと持って

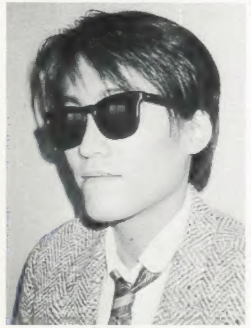


JA 190

日曜日には宇宙人とお茶を

〈みのりちゃんシリーズ〉

火浦 功



火浦 功

豪田みのり、美少女、18歳、親子三代にわたる筋金いりのマッドサイエンティストの家系、豪田家のひとり娘。けれどもまだ仮免許のマッドサイエンティストみのりちゃんが発明するのは、一本の鉛筆を削るのに一時間もかかる〈コンピュータつき鉛筆けずり〉、時間量子を掘り抜けタイムトンネルをつくっていく〈量子シャベル〉、人間を電送するとサボテンと合体した〝怪奇サボテン人間〟をつくりだす〈物質電送装置〉などなど。日夜、猫ヶ丘ニュータウンのタウン誌《猫又ジャーナル》編集員の山下とサトルを実験相手にみのりちゃんパワーが炸裂する！

ISBN4-15-030190-5 C0193 ¥420E

TOKYO HAYAKAWA BOOKS

火浦 功の作品

—既刊—

幸せの青い鳥

*

〈高飛びレイク・シリーズ〉
宇宙カジノ略奪作戦
99%のトラブル
ファントム・レディ

*

〈みのりちゃんシリーズ〉
日曜日には宇宙人とお茶を
大冒険はおべんと持って

日本SF

ベスト
キャラクター
フェア

■ハヤカワ文庫JA／早川書房■

傑作日本SF



イラスト／安彦良和

●ファン待望のシリーズ第3弾！

『ダーティペアの大乱戦』

高千穂 遙　B6変型

映画「ダーティペア」
3月14日より全国松竹系公開